

342

1911



始



入工 3X-5

342-1914

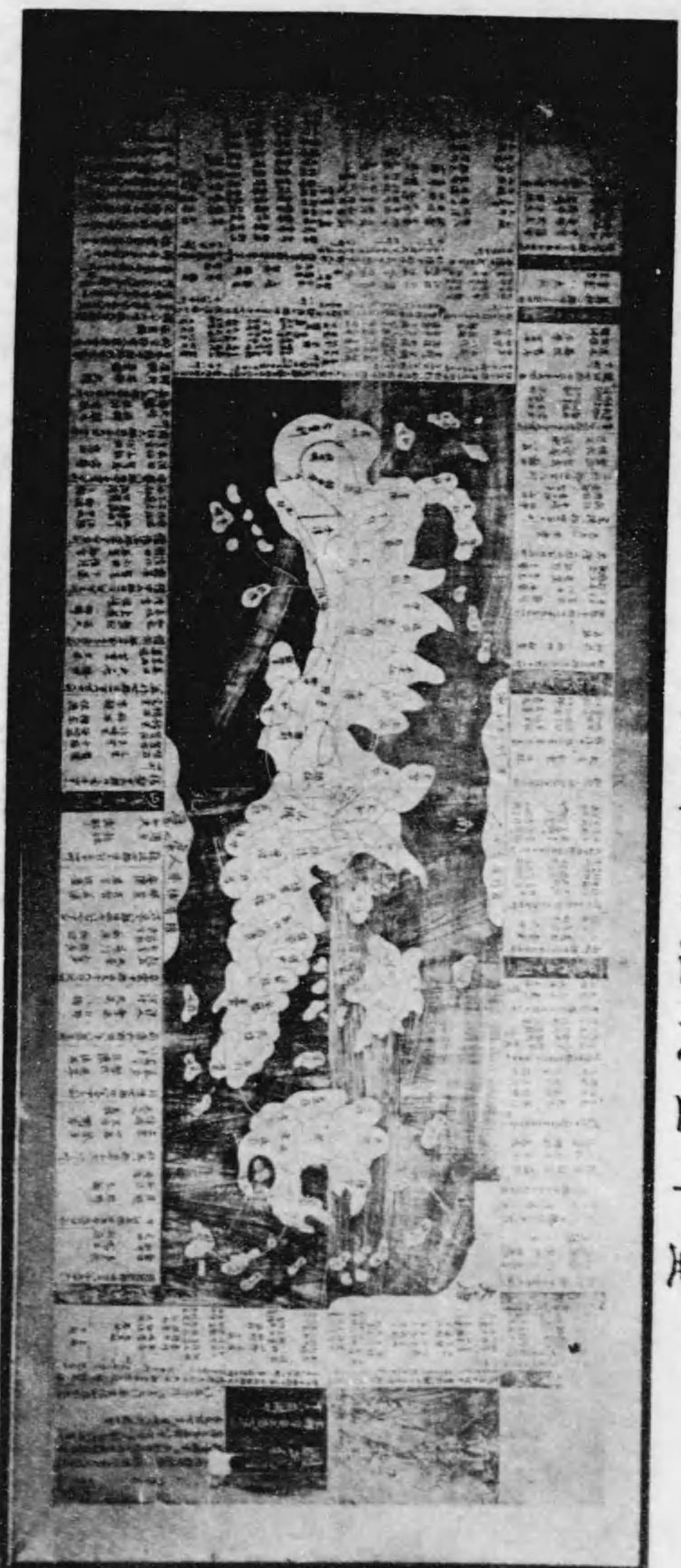


吐
堂
叢
書

世態人情論

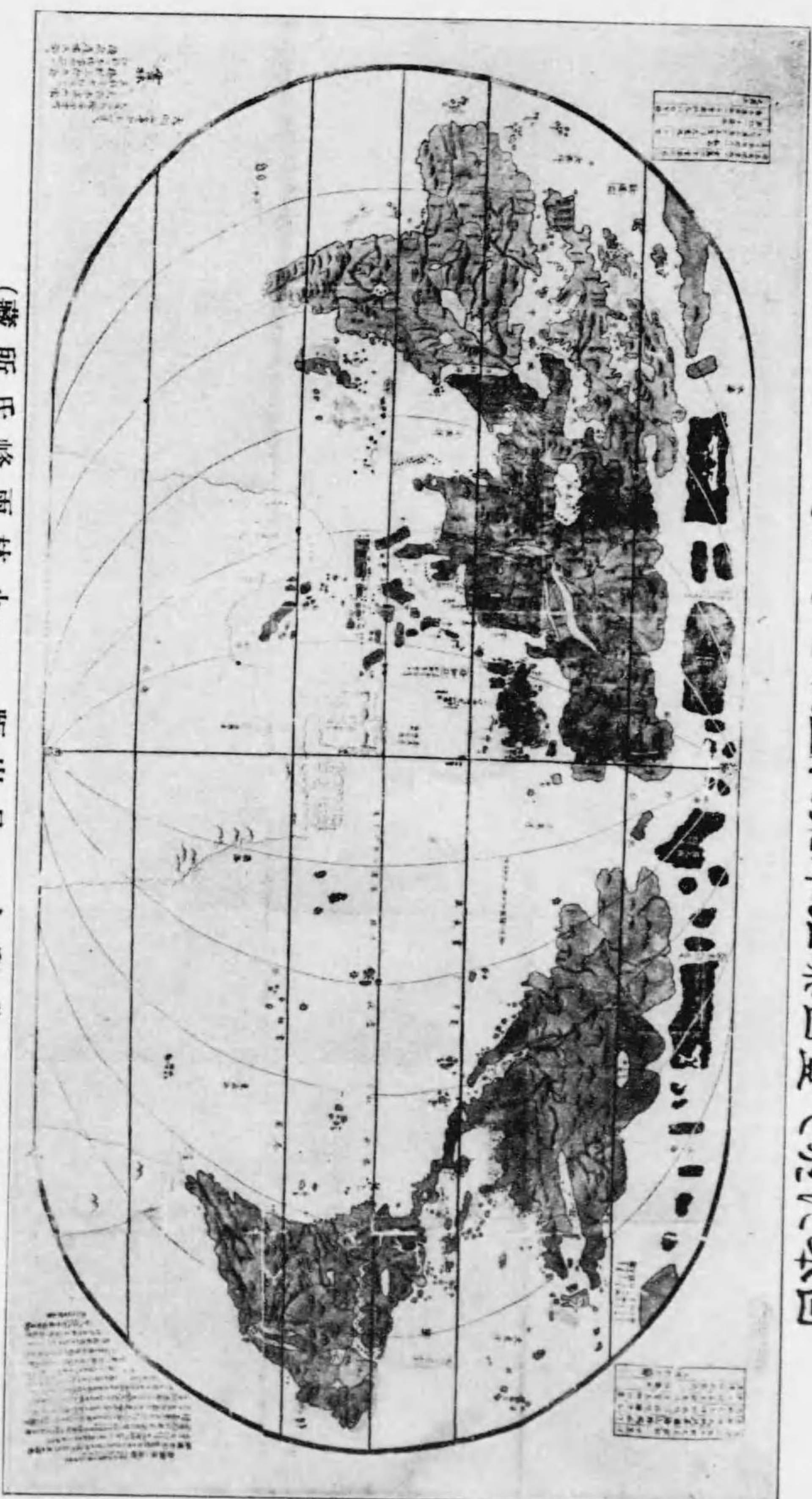
大正
2. 8. 30
內交

『地本回』の箭羊餘拾六百千壹



(作 著 薩 菩 基 行 傳)

『圖全世界』のたれらせ版出に前年拾参百壹て於に本回



(藏所氏峰雨林小……版出月一十卯癸年三明天)

自序

没頭すれば波瀾萬重、出頭すれば萬里一碧、没頭する者は世態に囚はれ、出頭するものは人情に迂なり。出頭是か、没頭非か。通じ難きは人情、讀み難きは世態。哲人時に之れを誤りて空疎の論を立て、田夫偶ま之れを得て徹底の語を漏す。出頭没頭、没頭又出頭、古今を讀破して其の眞趣に迷ひ、世故閱し來つて尙ほ其の歸着に惑ふ。況んや、吾、讀書の力弱く、世故の閱歷に乏し、豈に能く世態と人情とを觀得たりと云はむや。唯だ久しく

心を之に潜め、一切の論議を此の根柢に立てんと企てたるが爲めに、糢靄を隔て、遠山を望むが如く、世態と人情との歸趣に對して髣髴として或る者を認めたるの感あり。其の果して奇峰亂立せる眞の山たるか、或は又天風に吹却せらるゝ蜃氣樓中の幻影たるかは未だ遽かに判ずべからずと雖も、暫く先人の指示を力に一脈の理路を辿りて、此の述作を試む。波間路なし路縦横、予の辿れる所も亦少しく世態と人情とを見るに足るものあらむか。想ふに乾坤の活歴史は世態と人情との紛糾に成り、渾圓球上の生活は世態と人情との錯綜を示し。

過去數千年の典籍は之れに基き、現代百般の施設皆な之れに萌すが故に精到に觀察せんとすれば眼及ばず。仔細に考察せんとすれば思慮を絶す、予は常に臆面なく諸種の論議を試む、然かも本論を稿する時ほど切に自己の無學無識を感じたることなし。佛人マクス、オ、レルは世態人情に於て一隻眼を有するもの、彼れいふ予は自ら特に學ぶ所あるが如くに装ふを欲せず、幸に予は充分に予の無智なることを知り得るを感謝すと、予も亦此の語を繰返して自ら慰めんのみ。世態人情の研究は一代の事業なり。予や出頭没頭、四十餘年、江湖

に放浪して修めたる所少きも、生來讀書の癖あり、
更に多くの書を読み、更に深く思ふて本書の補綴
を企てん。

誰かいふ讀書子世態と人情とを語るべからずと、
齋藤拙堂いふ、莫謂書生暗時務、當時諸葛亦書生と。
頭を出して萬里の一碧を見、頭を没して波瀾の萬
重に處す。離れて離れず、即して即せず、其の眞
相を看取するは容易にあらずと雖も、幸に達士達
觀の先蹤あり、古賢垂訓の芳躅あり、之れを鳥跡
の中に求めて窺ひ得べきもの少からず。殊に近代
の生活は迂疎、予の如きもの、身邊にも尙ほ日夜

に肉薄し來る世態の波動あり、人情の暗流ありて
獨り書窓の人たるを許さず、街頭に出でて現實の
葛藤に接觸せしめ一脈の理路の其の間に伏するを
覺らしめざるにあらず、心を注げば日常の驢事馬
事の中にも得る所少からざるべし。

予は本書を以て予が此種の研究の第一着とし、
進んで本書概説したる所を詳叙し、輕々に看過し
たる所を仔細に觀察し、足らざるを補ひ、誤れる
を正し、今後の研鑽を此の方面に向け、努めて忘
らずんば一代敢て大成し能はずとも、幾分の補正
は予が生涯に庶幾し得べけんか。

咄
堂
識

凡
例

一本書の想を構へしは明治四十二年の秋、月夜瀬戸内海を過ぎて石天基の「世
事通を繙きし時なりし。翌年一月同人と爐邊にロツスの「社會心理」ルボンの
「群衆心理」を會讀するに當りて更に其の念を深くし、進んで世態人情に關し
て組織的述作を試みんことを企て略ぼ材料を整へ梗概を定めて之れを東亞
堂主人に圖り、其の年の冬より筆を執り、稿するに従て印刷に付せしが、
紙に臨みては豫期せざりし諸種の問題岫然として起り、暫く筆を止めて研
鑽に従ひて其の年は暮れ、翌四十四年又稿を續け第一篇半ばに至りて夏期
講習會の聘に應じて秋田、長崎、香川、高知、兵庫、廣島、愛知、北海道
の各地を旅行し、秋風と共に都門に入り、旅中讀み得たる所と見得たる所
とによりて稿を續け、一日一枚又二枚、歳末に至りて第二篇に入り、本年
春、第三篇に入る頃、幼兒を喪ひて人の世、哀れを覺え、其の後、世事の
轉變の特に子を喪ふものありて人の情の美しきを感じ、人生の葛藤に觸れ

ては筆進まざりしが、志を勵まして稿を續け、第四篇より五篇に入る。其の間予の講話したりし、維摩經講話は上梓せられ、禪學觀は公にせられたれど、本書の述作は遅々として進まず、筆を執て三春秋、初夏の候に至つて漸く稿を脱したるも、事、所期と違ひ、足らざるもの完からざるもの殊に多きを覺ゆ、嗚呼これ人事の己むなき數か。

一題して世態人情論といふと雖も、本書は唯だ之れを概説したるのみ、仔細に之れを説述せんには本書の一章とし一節とし若くは細目に列したる一項を論ずるにも本書と同じき紙數を要するもの少からじ。世態人情の研究は一代の事業なり、予は予の生涯の事業として研鑽怠らず漸次本書の一章一節一項に説き去りたる事相を詳叙して其の缺けたるを補はんことを期す。本書に次で出る所の群衆統率の心理、近代生活の研究の如きは其の一部分なり。

一本書は第一篇に於て世界の變遷を看取して現代の生活に及びたりと雖も、其の主として觀察する所は我が日本の現代にして、其の觀察の全國に及ぶ

能はざりしものは之れを帝國の首府たる東京に止めたり。人情に古今なく世態に東西なしといふも、尙ほ幾分の異同なきを得じ、讀者請ふ之れを諒せよ。

一本書の統計は統計年鑑、農商務省統計表、東京商業會議所報告并に警視廳統計等に據りたるも、筆を執る三春秋、其間多少數字の異同なきを得ず、故に一々其の年月と出所とを示したり、其他本書の述作に對して參考したる諸書は、之れを引用するに當りて之れを挙げたれば、讀者之れによりて更に一段の觀察を進めば得る所少からざるべし。

一世態人情論の結論は一面に社會的施設に及び制度政策の問題に觸れざるべからざれど、此の方面の研究は、世、其の人に乏しからざるを以て暫く之れを他日に譲り、今は他の一面たる人心修養の事のみを以て筆を結べり、蓋し一切の改良は人を本とし、人の改良は心を本とす。其の本を説いて末を略したるのみ、深く答むるなくして可なり。

一本書挿入する所の繪畫はたゞこれ世態の變遷を知るの一助としたるのみ、

之れによつて古今の差、文野の別を見るあらば幸甚。

四

壬子の夏

著者識

世態人情論目次

第一篇 世態人情の觀察

第一章 緒言

第一節 世態の紛糾……………一

衣食住の必要…火食の法…衣服の人為的加工…巢棲穴居と家屋…社會の共同生活…人間教育の必要…金錢の發明…金錢は人間生活の根本中樞…腕力の優勝劣敗…統治機能…夫婦親子兄弟姉妹…家族關係…血族以外の關係…言語文字の利弊…理性と感情…習慣と儀式…趣味と生活…處世の道

第二節 人情の微妙……………九

心…理性と感情の衝突…感情と自我觀念…感情圈…全き人間…生存慾…宗教の要求…財産慾…寒山の詩…色慾と名慾…アラトニツタラフ…紙治のおさん…千代萩の千松…悲哀の快感…眞善美の三情操…感情は花理性は實…四端の心…神に近づくべき情操

第二章 世態の成立

目次

一

第一節 原始民族の世態……………二〇

人類の二足歩行…器具の發明…火の發明…原始民族の數の觀念…現在に生活す…吾等の祖先…原始民族と小兒…遊戲は勞働より古し…家族關係…食物の缺乏と勞働…牧畜時代…家族組織の變化…同類意識…血族と宗教…統治關係…統治者の資格…農耕時代

第二節 文明の發達……………二九

兵農の分離…交換…道路…貨幣…商工業…法律…國家の權能…社會の進歩…國際關係…教化的施設…表面と裏面…文明の幸福

第三章 世態人情の變遷

第一節 文明の故國……………三九

野蠻と文明…文明の四源…埃及とニール河…社會學藝とニール河…定教と木乃伊…埃及の文字…パピロニヤ…アツシリヤ…新パピロニヤの榮華…パピロン、アツシリアの宗教…ヘブライの文明と宗教…フイニキア人と商業…フイニキアの文字…印度の文明…波斯の文明…印度と波斯

第二節 西洋文明の淵源……………五六

希臘の地位…宗教的一致…スバルタ人の生活…アテネの政治…波斯

第四章 日本の世態人情……………

第五節 東西文明の融合……………一〇九

海の文明…航海術の發達…王權の確立…宗教改革…東洋傳道…清の統一…東洋貿易…英國革命…佛蘭西革命…米國の獨立…西洋思想と東洋思想…ナポレオン大帝…プロシア…歐洲と亞細亞…歐洲と亞弗利加…米合衆國…極東問題…科學の應用、其の進歩

第四節 中世文明の大觀……………九二

支那と歐羅巴…東羅馬帝國…マホメット…基督教の分裂…カロロ大帝…法皇と皇帝…騎士の生活…サラセンの文化…十字軍…成吉思汗…蒙古人…元朝に於ける東西交通…オスマン、トルコ…帖木兒…近世文明の曙光

第三節 支那文明の一瞥……………七八

世界は一家…三皇五帝…周の制度…春秋戰國と文藝…儒教…秦の始皇…漢と羅馬…唐の天下…宋と蠻族

第二節 希臘の文明……………

と希臘…希臘の文明…アテネ人の生活…マケドニアの勃興…アレクサンドル大王の偉業…東西文明の融合…シリア…埃及…ローマの發達…自由平等の思想…羅馬大帝國…羅馬人の生活…羅馬は湖水の如し…基督教…羅馬帝國の末路

第一節 日本民族の文明……………一三八

世界の日本…日本原始の文明…萬國無比の國體…國民性の根幹…外來文明の咀嚼融和…優しき心…三韓征伐と生活狀態…推古朝の文明

第二節 奈良平安朝の世態人情……………一三六

奈良時代の統治狀態…大寶令…佛教と文明…金錢の使用…住居の改造…歌垣…神佛融合…假名文字…平安朝の世態人情…同時代の文藝…闇黒面の女性…旅行…社會の變遷

第三節 鎌倉室町時代の世態人情……………一四七

武家の生活…北條より足利…應仁の亂…皇室の式禮…京師と地方…上下の懸隔…亂世の人情…室町時代の生活と禪…武家の作法…文學の權…武術の發達…後妻打…室町時代の貿易…西洋文明の輸入…一統の氣運

第四節 江戸時代の世態人情……………一五九

徳川氏の統治…冬籠の時代…江戸の繁盛…公家と大名…系圖造り…町人の勃興…華美の俗…飲食并に娛樂の職業…演劇…遊廓全盛…階級と世襲…世界の大勢と日本…最近に於ける世態人情の變遷…現代の縮寫…新舊思想…東西の混淆…社會制裁

第五章 地理と人情

第一節 國民性と地方感情……………一七二

民族と性情…地方と性情…東西文明と思想…民族と宗教…地と人の關係…日本の風景と歴史…地理と人情…地方觀察…地理的關係…職業…歴史…文化…宗教…娛樂

第二節 關東と關西……………一八四

關東と關西の人情…東西の宗教…關東と上方…大阪商人の努力…數學上の概観…東西の都會…人國記の言

第三節 東北と九州……………一九五

新橋と上野…奥羽と九州…奥州の風俗…出羽の風俗…九州の市と奥州の市…數學上の比較…農業の地…商工の地…九州の人情…幕府時代の九州と奥州…維新後の變化

第四節 表日本と裏日本……………二〇四

北陸と其の反面…北陸の統計…北陸の人情…山陰の人情…山陰と山陽…中國の人情…中國と山陰との都會…四國概観…四國の人情

第五節 世態人情の研究……………二一四

今の人情と過去の結果…血は水よりも濃し…人情の反覆…生活狀態と人情…男女の關係

第二篇 生活の研究

第一章 生活の中堅

第一節 生活の意義……………二一九

生活と生存…現代文明と生活…生活の五段…生産と消費…中流の生活…農民生活…生活難の問題…實用と贅澤

第二節 食物と生活……………二二一

生活の根本中樞…人あれば食あり…人口と食物…米産と人口…殖民政策と食物…食物と人情…食物と道德…古今食物の變遷…山海の珍味…贅澤なる食物…食物の本義…名聞心と食物

第三節 住居と衣服……………二四一

原始の住居…家屋の變遷…諸大名の普請…借屋借室…住居と人情…衣服と裝飾…衣服古今變…おあん物語…衣服と人情…衣服と道德

第四節 金錢と人情……………二五〇

金錢と生活…金が敵…社會制度と金錢…金錢萬能…金錢と人情…假名世説…金錢道德…守錢奴と濫費者

第二章 生活と世態人情

第一節 家族生活……………二五八

直系親族…傍系血統…法律上の親族…扶養の義務…父母の恩…親子の情…骨肉の愛…棄兒の歌…親を思ふ…兄弟の情…嫁と姑…繼母と繼子…家庭の不和と犯罪…人情の醜方面…人情の美所

第二節 國民生活……………二七六

國家の統治…政體…國民の權利…國民の義務…國民精神…愛國心…愛土心と愛國心…正氣の歌…愛國心の生起の原因…愛國心と人情…自治體と人情

第三節 社交生活……………二八九

生活の舞臺…世間の手前…社會制裁…禮儀禮式…恭敬の心…言語態度…英雄の人心收攬…己を知るものゝ爲めに死す…書簡…社會的生命…人の噂も七十五日

第三章 職業と人情

第一節 職業の分類……………二九七

文明の進歩と職業の分化…中古の職業…近世の職業種別…職業分類

の困難……職業の分類

第二節 自然物採收に關する職業……………三〇六

自然物採收に關する職業の類別……農の意義……純農と養蠶者……農村の
醇朴……地主と小作人……農民の生活……農民の割合……林業者の氣風……漁
民の氣風……漁民の信仰……坑夫の氣風……坑夫の飯場

第三節 製造並に運搬に關する業……………三二七

文明の進歩と製造運搬……工場と賃銀……職工の氣風……工場以外職工の
賃銀……職工の分類……職工の氣風……名工の苦心……平凡なる職工……鐵道
及び電車……車夫馬方……立ん坊

第四節 賣買に關する業……………三三〇

商行爲……營業稅納付者營業別……銀行會社員……町人根性……農工の氣風
と商人……大商人の大腹中……株式市場……大局の達觀……思ひ切りの必要
……株式賣買の憲法……諸戶清六……外界の事情と商業……商人の美風惡風

第五節 政治教化衛生に關する業……………三四〇

官吏の生活……巡查傳給……政務官事務官……役人根性……官吏觀……理窟と
先例……自由業者……新聞記者……辯護士……醫師……文學者美術家……染筆と
原稿料……文學者氣質……宗教家……教員

第六節 娛樂に關する業及び罪惡的職業……………三五三
俳優……名優の心得……遊藝稼人……相撲の氣質……藝妓……娼妓……密賣淫……
博徒……高利貸……犯罪者

第七節 職業と心理……………三六五
個人と職業……蛙の子は蛙……遺傳と境遇……氣質と職業……他の職業に對
する羨望……山崎闇齋と三の樂……同業者間の嫉妬……職業的自信……犯罪
者……不生産者……兒童の職業……苦學生……囚人

第三篇 世態と宗教

第一章 宗教の觀察

第一節 宗教的信仰……………三七五

宗教心……一神教と汎神教……世界宗教……日本宗教……佛教の俗間勢力……
科學と宗教……哲學と宗教……宗教の意義……宗教は感情背景

第二節 宗教の病的現象……………三八五

信仰の對象……動物崇拜……植物崇拜……生殖器崇拜……天然崇拜……宗教風
俗……爭鬨の風……神佛混淆

第二章 迷信と人情

第一節 世態と運命

世態變轉：鶴林玉露：楊誠齋の詩：人生は臘月夜：神の豫定：三世因果：佐藤一齋の運命觀：偶然の事實：大算數：運の解

第二節 卜占と人情

人事天命：原始民族の卜占：易：五行：方位：九星：相生相剋：六曜日：三浦安貞の卜占說：卜占の行はるゝ理由

第三節 祈禱禁厭

祈禱と人情：祈禱の迷信：報酬の特約：祈禱の原理：祈禱萬能の迷信：祈禱と信力：サツエーシ氏の祈禱論：文盲の犬

第三章 宗教と人生

第一節 信仰と活力

宗教と迷信：死後の觀念：善惡因果：永生：非理法權天：信仰と活力

第二節 世界宗教の一瞥

自然教と倫理教：佛教、基督教、回々教：包容主義と排斥主義：人種と宗教：宗派心と俚諺

第四章 宗教と風俗

第一節 祭禮の儀式

祭典と商業：諸種の祭禮：盆踊：祭禮と娛樂：祭禮と人情

第二節 冠婚葬祭と宗教

氏神と産神：七五三の祝：婚姻の儀式：死亡と宗教：葬式と華美の風：葬儀と佛教：神儒佛三教と人の一生：言語上の迷信

第四篇 男女の問題

第一章 女性の觀察

第一節 男女の差異

生理的差異：心理上の差異：女の智恵：感情と女性：女性と文學：男女の比較：男女の分業：婚姻の歴史：東洋の女性觀：西洋の女性觀：男女人口比例

第二節 女性と人情

女性の氣質：女性の迷信：容貌の美醜：其の心理的影響：女性と愛

…嫉妬と女性…猜疑…虚榮心…兼好法師の女性観…女性の自覚…「人形の家」

第三節 女性と世態……………四六三

女性と職業…職業の目的…賣淫の現象…犯罪と女性…現れたる力と隠れたる力…国家治亂と女性…良妻賢母…男子の生涯と婦人の生涯

第二章 戀愛と人生

第一節 戀愛の性質……………四七〇

男女相愛…男の見る女と女の見る女…戀愛の成立…女性の一生は戀愛の歴史…肉慾と戀…戀愛の神聖…戀愛の心理…戀ふる心…戀の満足…戀と人情

第二節 戀愛の種別……………四七七

春情發動期…青年の戀…中年の戀…夫婦の情…老年の情…乙女の戀…賣笑婦の戀…戀の意地…遊女の心

第三節 戀愛の社會的現象……………四八二

戀愛と夫婦…結婚後の葛藤…自殺と戀愛…情死の研究…情死の原因…無理心中…女同志の心中…求女塚…同性の愛

第三章 婚姻と出産

第一節 婚姻と道德……………四九一

婚姻の法律…年齢…血族…非婚論…夫婦の道德…離婚の條件…結婚と離婚との割合

第二節 出産と死亡……………四九七

出産總計…死産と生産…私生子…死亡數…男女と人口…海外發展

第五篇 世態の心理

第一章 世態心理の基礎

第一節 個人心理と世態概要……………五〇三

感覺…觀念…觀念の競等…注意…聯想…記憶と人生…想像と人生…疑心暗鬼…概念…思考作用…推理判斷の誤…パットは眞理を妨ぐ

第二節 感情と人生……………五一二

智力と情感…情緒の分類…希望と人生…感情と顔面…感情の表出…情操…智的情操…倫理的情操…美的情操…取合せ…悲哀美…滑稽美

第二章 世態の心理的觀察

第一節 世態心的の法則

社會心理學……社會意識の存在……傳説と歴史……習慣風俗……社會意識と個人意識……社會の個人化個人の社會化……模倣と發明……盲目的模倣……習慣と社會……意識的模倣……流行の原理……流行傳播の狀態……流行の傳播性

第二節 世態心理と社會

社會意識の智的方面……平準智識……教育……社會的憤怒……社會的悲哀……社會的恐怖……社會的歡喜……社會的智的情操……社會的偶理的情操……社會的美的情操……社會情操と文明……天才……時代精神……輿論

第三章 群衆の心理の特性

第一節 群衆の心理狀態

群衆心理の一般性質……群衆の知識……群衆心理の特徵……群衆の無責任……群衆の感情……群衆の理解力……群衆の暴橫……群衆の道德……否か諾か……成句の力……政治家の秘訣……群衆の意見

第二節 群衆活動の心理

第四章 世態心理の應用

第一節 群衆統率と世態心理

群衆活動の開始……群衆の指導者……群衆は意志を求む……地位と名望……隠れたる指導者……暴動又は同盟罷工……群衆は破壊的
乾坤の活歴史……統率者の威嚴……資格……公平……孔明……孫子……威服……法三章……亂國多制……簡にして明……成語轉換……英雄人を欺く……群衆は欺かれ易し……尹大納言……英雄の心を攪る……吳起……宗教家……類を以て集る……英雄の風采

第二節 言論文藝と世態心理

雄辯法……専門語の通俗化……術の如き言語……平易と平凡……譬喩……譬喩使用法……反語……文藝……精神の聲……神來の興……主觀詩客觀詩……戯曲小説……天才と凡才……文藝と時代……新聞紙

第三節 職業と世態心理

流行と職業……廣告の種類……廣告文……刺戟……美感……反覆……新意匠……商品の命名……商品の陳列……人氣……最負……中村歌右衛門

第五章 結論

第一節 人情は世態の縮寫……………五八五

人生の二大矛盾…世態と人情と其の疾一…世態人情觀察の資料…名と利と命と戀…命あつての物種…人情の美…人情の裏表…人情の不可解…社會は個人の如し…境遇と年齢…氣違ひ日和と人の心…人生は一大劇場…千兩か三錢五厘か…哲學者と其氣質…耽美主義と寫實主義

第二節 世相と人心……………六〇〇

凡人の世相觀…アレキサンドル大王…豐太閤…信長と信玄…ナポレオン…白樂天の太行路…文豪と世相…ライプニッツ…シエラインマツヘル…ヘーゲル…厭世說…シヨーマンハウエル…ハルトマン…改善說…性惡說…性善說…孔子…佛說…プラトーン…カント…世相と人心…クリーン

第三節 處世と人格……………六二二

理路一貫…正反合…歴史の結果…現代…時代と人…理想と現實…堅忍の意志…深厚なる同情…處世の三大要件…行路難

世態人情論目次終

世態人情論

加藤 咄 堂 著

第一篇 世態人情の觀察

第一章 緒言

第一節 世態の紛糾

唐の神宗皇帝の代に、蔡君謨といふ非常に髯の長い人があつた。或る時天子の前に出ると、天子は戯れに、卿の髯は頗る立派であるが、夜間は蒲團の中にに入れて寝るか、出して寝るか、何れであると仰せられた。蔡君謨、自分の髯ではあるが何れとも氣付かない、其の夜、歸つて寝る時に蒲團の外に出

して見たが、何うも寝苦しい、これは矢張入れて寝たに相違ないと、入れて見ると何だか勝手が違ふ、矢張出して寝たのであらうと出して見ても寝難い、入れて見たが左様でもない、出したり入れたりして終宵寝なかつたといふ有名な昔話がある。平生は何とも思ふて居らぬことも、少し氣を付けて考へて見ると紛糾難然、何れとも定め難く、心を迷はすことが多い。鳥は空中にあつて空を相忘れ、魚は水中にあつて水を相忘れ、人は世態の中にあつて世態を相忘れて居るが、仔細に觀察して見ると、吾等が日常生活は簡單なるが如くにして、其の實非常に複雑なるものである。

人は如何にして生活するか、唯だ是の如くにして生活するといふ、其の是の如きとは如何なることか、先づ吾等は其の生存の第一條件として食はねばならぬ、着ねばならぬ、雨露を凌がねばならぬ、其の食ふといふは何を食ふのであるか。曰く空氣、曰く水、曰く米麥、曰く鹽と云へば至極簡單であるが、人は唯だ之れのみで満足して居るのではない、實用の食物あり、趣味の食物あり、動物も食へば植物も食ふ、其の食ふも唯だ之れ食ふにあらずして、

衣食住の必要

火食の法

衣服の人為的加工

巢穴居と家屋

社會の共同生活

太古蒙昧の時代はいざ知らず、少しく進歩したる人類は火食の法が大部分を占めて、火は實に人類生活に缺くべからざるものとなつて居る。其の着るといふのは何を着るのであるか、これも太古は木の葉や皮で僅に身を覆ひ、獸皮を以て寒を防いで居つたのであるが、進歩するに従つて人為的加工を施して毛布、麻布、綿布の類も生じ、一個の昆蟲たる蠶の吐く絲によつて絹布も出來、その養成、その栽培、その紡績、その機械、その裁縫等の加工を経て、吾等の日常の衣服は成り、曾ては樹上に巢の如きものを造つて雨露を凌ぎ、山腹に穴居して生存を保ちしものも、今は石材木材を以て巍峨たる家屋を建築するに至り、個人の生存に必要な衣食住は個人自身によつて之れを供給する能はず、汝の食ふ所の米は汝自身の耕し得たるにあらず、汝の着る所の衣は汝自身の織り成せるにあらず、汝の住む所の家は汝自身の建て得たるにあらず。生活の大部分は之れを他人の手に待たねばならぬ。これ我一人他人に待つにあらず、他人も亦之れを他人に待つ、世の中は持ちつ持たれつ、相互救済して成り立つて居るので之れを社會の共同生活といふ。

既に之れ共同生活なり、我れの他人に待つが如く、我れも亦他人をして待たしむる何物かを爲さざるを得ず、然らずんば他人は何物をも我れに與へず、我が生存は終に保持する能はざるに至る。此に於て人は何等か社會の共同生活に貢獻する所の業に就くにあらずんば、到底此の世の中に生存することは出来ない。併し人は生れながらにして業に就けるものでない、其の生れた子を獨立の業に就くまでに育成し教養せねばならぬ、此の育成教養も亦一つの職業である。されば有形と無形との區別はあるが、此の世に生存するものは何等かの職業に就て其の報酬として、他人の力に成るものを與へられて、以て自己の生活を保持するのである。此の關係を圓滿ならしむるが爲めに、人類は金銭なるものを發明して、物物交換の煩を避け、何物といへども此の金銭の媒介によつて、容易に得ることが出来るやうにした。之れ實に人類の大發明で、我れ何等かの業を営みて、金銭を得、此の金銭によつて我が欲する所のものを購ひ、以て其の生活を保持するといふ風であるから、此の金銭は直に人類生活の根本中樞となり、終に「金が敵の世の中」なぞいふ俚諺を

人間教育の必要

金銭の發明

金銭は人類生活の根本中樞

腕力的優劣敗

統治機能

生ずるに至つた。眞に金が敵の世の中で、金さへあれば不自由がない、此の金が思ふやうに得られぬから煩悶もあれば懊惱もある。正當に業を営みて正當に金を得るのは當然であるが、中には業を営むの煩を厭ひて直に其の金銭を得んとするものがあつて、一方正當に働いて居るものを脅かして之れを得んとし、優勝劣敗の理法を腕力の方に應用して不當の行動に出るものが出来て、其の爲めに社會の共同生活を妨げらるゝことが少なくない。此の社會の共同生活を圓滿ならしむるには、是非とも統治機能といふものがあつて、治者被治者の關係を明にし、治者は被治者の利益を計り、被治者は治者の命令に服従し、苟くも其の共同生活を妨げ安寧秩序を害し、進歩發達を阻むものに對しては之れに適當なる制裁を與へて、個人の生命財産自由を安固ならしむる組織を立て、其の組織によつて個人を保護するものに對しては、又適當の報酬を出して、互に安んじて業に就く方法を講せねばならぬ。其の組織に文野の別あり、其の制度に不完の差はあるが、何れの人民と雖も、此の統治機關の下に生活して居らぬはない。これだけでも人間生活は複雑なもので

夫婦親子
兄弟姉妹

世態人情の觀察

六

家族關係

血族以外
の關係

言語文字
の利弊

あるに、更に他の方面を見ると、人は決して一人で棲息して居るものではない。男女相倚るは自然の法則で、男女相會して此に夫婦の關係を生じ、既に夫婦あれば従つて其の間に子を生じて親子の關係あり、其の子の中には兄弟姉妹の關係を生じ、兄弟姉妹亦各々子を生じ網狀形に發達して、祖あり孫あり叔姪あつて紛然たる家族關係を生じ、或は一家に棲息し、或は戸を別ちて互に交通し、此に倫常の教あり。人生の關係頗る紛糾を極む。されど人は唯だ此の如き血族關係に於てのみ生くるものにあらず。其の職業の性質に於て師弟の關係あり、親分子分の關係あり、主従の關係あり、上下の關係あり、雇主と傭人との關係あり、資本主と労働者との關係あり、同業者間の關係あり、更に其の住家の關係よりして向ひ三軒、兩隣即ち隣保の關係あり、是等の關係と密接して、しかも別なる朋友關係ありて互に意志の疏通を計り、交誼の親を盡くす。二重又三重、縦あり横あり、人生の生活、簡單なるが如くにして眞に複雑、互に思想を通ずるに言語を以てし、此の言語の行き違ひは直に紛擾の因となり、親交の媒となり、一言一句は生活に影響し、井戸端の

理性と感
情

習慣と儀
式

緒言

七

出合ひに挨拶を怠りしが爲めに大喧嘩を醸し、益壽の禮を缺きしとて榮達を妨げらる。言語は思想交換の媒介をなし最も便利なるものにして、又最も不便なるものである。此の言語の有形に現はされたる文字も、亦人類思想傳達に於て缺くべからざる必要品なれど、「人生字を識るは憂患の始」諸種の葛藤これより生じ、世態の紛糾、之れによりていよ／＼其の度を加へらるゝことを免れない。人は社交の動物にして又感情の動物、理性の判断に因つてのみ左右せらるゝのであれば、至極簡單であるが、自ら理性の動物と思惟しながらも人生活動の大部分は感情であるから、益々複雑である。理性からいへば、何うでもよいことを、習慣が何うの、儀式が何うのと騒ぎ廻り、此の場合「さざります」と云はねばならぬの、イヤ「ござる」でよいの、「一筆啓上」と書かねばならぬの、イヤそれには及ばぬの、此の場合には綱がなければ藩藩が整はぬの、此の席には袴を穿かねばならぬのと、さまざまに苦勞して社交を維持して居る。吾等は此の紛然雜然たる世態の中にあつて、其の紛糾を忘れ、雜然を茶飯の事と思ふて居るが、若し人間以外の者があつて、此の

世態人情の觀察
 世態の上に立ち、人生を下瞰したならば、人間といふ動物の奇妙奇態なる生活に喫驚せざるを得ないであらう。人生の奇妙奇態なるは之れのみならず、一體、人生の營々たるは生くる爲めであるかと思ふと、そればかりでない、其の大半は趣味の爲めの生活で、趣味がなければ働きもせず、稼ぎもせぬ。男女の愛も趣味なり、職業の精勵も趣味なり、金を愛するも趣味、社交の成り立つも趣味、其の趣味の結晶したるものが美術となり、文藝となつて人生を飾るので、其の高尙なるものには詩歌とか繪畫とか音樂とかいふものもあり、其の下劣なるものに至つては卑陋猥褻、君子の聞くを恥づるものもあるのであるが、其の高卑何れにせよ、是等の娛樂も亦人生の主要となつて、世態構成の上に缺くべからざるものとなつて居る。

以上は唯だこれ大體の觀察のみであるが、此の大體の觀察を以てするも、尙ほ吾等の生活の紛糾錯綜、眞に驚くに値するものあるを見ることが出来る。觀せずんば則ち已む。觀じて此に至る、何人も此の微小の身を以て如何か此の世態に處し、此の短き生命を以て如何か此の社會に立つべきかを苦慮せざるを得ない。世態人情の研究、これ簡單なるが如くにして複雑、容易なるが如くにして困難なる問題である。

第二節 人情の微妙

世態の紛然たる此の如く、而して之れを組織する個人の心意の紛然たるは寧ろ之れに倍するのである。「奇しきは空なり、空よりも奇しきは海なり、海よりも奇しきは人の心なり」と古人の云ひける如く、人の心の怪しきは殆んど豫想の外にある。人の心意の他の動物に異なる所は理性の存在にあるのであるが、先きにもいふ如く實際活動の力となるものは、理性よりも感情の方が有力である。或る人が「幽霊のないといふことは理性に於て充分に承認して居るが、何うもさうは思はれぬ」といふたことがある。此のさうは思はれぬといふのは理性を侮辱したる感情である。これあるが爲めに夜闌け人靜まるの後、陰雨濛々として燐火點々たる墓地を過ぐるに當つて、一種恐怖の情を懐かざるを得ない。さればとて人は唯だ感情のみによつて左右せられるので

世態の紛然たる此の如く、而して之れを組織する個人の心意の紛然たるは寧ろ之れに倍するのである。「奇しきは空なり、空よりも奇しきは海なり、海よりも奇しきは人の心なり」と古人の云ひける如く、人の心の怪しきは殆んど豫想の外にある。人の心意の他の動物に異なる所は理性の存在にあるのであるが、先きにもいふ如く實際活動の力となるものは、理性よりも感情の方が有力である。或る人が「幽霊のないといふことは理性に於て充分に承認して居るが、何うもさうは思はれぬ」といふたことがある。此のさうは思はれぬといふのは理性を侮辱したる感情である。これあるが爲めに夜闌け人靜まるの後、陰雨濛々として燐火點々たる墓地を過ぐるに當つて、一種恐怖の情を懐かざるを得ない。さればとて人は唯だ感情のみによつて左右せられるので

感情と自我觀念

はない、勿論感情の闇を破る理性の光明の、人生を指導する上に於て有力なるものには相違ないが、何方かといへば感情の方が力があるのである。而して此の感情が自我の觀念の主要部分となるので、心理學者ボールドインは此の感情に關して、「他人は予の認識する所のものを認識することも出来、予の意志する所のものを意志することも出来るが、予の感ずることは如何にするとも感ずることは出来ない、予の感ずる所のことは予の主観性で、一の意識體が他の意識體から隔絶して接近し難い所は全く此處にある」といふて居る。予の知りたる如く他人に知らしむることは出来るが、予の感じたる如く他人に感せしむることは出来ない、此の感せしむるもの出来ないものを中樞として人に接して行くのが、人間社會の常態であるから吾等の生活は餘程面倒なものとなる。理性によつては解ることも感情によつては解らなくなる、此の解らない感情が吾等の心意に勢力を持つて居るのである。宗教心理に精通せるプラトンは是等の感情を感情團 (Feeling mass) と稱し、「此の感情團は心意生活の他の方面よりも一層廣く且つ深く、自我と最も同一視され、其の變化が直

感情團

全き人間

に人格の變化となるものである」といひ、

予の實際注意する論點は全き人間 (Whole man) なるものは、人性の一小部分たる理性とか智覺とかいふものとは違つたものと見ねばならぬ。勿論是等の理性とか智覺とかも信せんければならぬけれども、其等は吾等の信用を獨占する権利のあるものではない、人類を活潑にし、之れを指導する理想、人生に光明を添ふる情操熱、人生をして禽獸に優らしめ、歴史の原動力となつた衝動、世界の救主、聖人、英雄を指導した直覺は、明瞭なる意識の中心より來るものでもなく、理性や論理の結果でもなく、寧ろ人性の一層深遠なる方面から發したのである。

生存慾

といふて居る、これらの感情團の中には、持つて生れた先天的のものもあり、生れてから加へられたものもあつて、紛然雜然と錯綜して正確に之れを分解するとは出来ないが、此の感情と伴つて吾等をして活動せしむる慾望は、生存慾即ち死を厭ふの感情で、「今までは人のとだと思つたにおれが死ぬとはこいつたまらぬ、何人も死を厭はぬものはない。此の死を厭ふ爲に人生に諸種の

緒言

宗教の要

活動は出来るので、吾等が業を営むも其の根本は生きて居りたいといふ慾望、死にたくないといふ算段に外ならぬ。此に於て又いろ／＼の施設があつて生命保持の衣食住、生命安固の政治關係、其の外に醫藥衛生の道も立つが、かく厭ひ厭ふても、終には死の命運を免れぬものであるから、永生の願求となり、不死の希望となつて宗教なるものを求むることともなり。之れが又人生に偉大の勢力を振ふ。勿論宗教の要求は全人性の至情から出るので、唯だ永生を願求し不死を希望するのみではないが、云はゞ架空的、超越的で現實を離れて居る此の宗教なるものが、人生に密邇し來つて、現實生活の力となり、此の爲めには生命をも犠牲に供し、財産をも抛つといふに至つては、其の事自體が一の奇跡ではなからうか、吾等は此にも人情の微妙なるを見ざるを得ない。

財産慾

生存の慾望と共に此の財産慾即ち所有の念といふものも、人生生活の力となつて居るもので、佛教では之れを財慾といひ、解釋を與へて「財は即ち世間一切の資財なり、謂く人、財物を以て己を養ふの資と爲す、故に之を貪求

し戀著して棄てず、之れを財慾といふ」と、他の物を以て自己の物たらしめんとする慾望、自己の物をして減損せしめざらんとする感情は、何人も之れを持つて居るので、之れあるが爲めに働き、之れあるが爲めに動くと共に、又之れあるが爲めに争ひ、之れあるが爲めに苦む。之れ必ずしも非ならざれど、之れ必ずしも是ならず。睦まじき人生も之れが爲めに別れ、親むべき社會も之れが爲めに亂る。孟子は「王、何ぞ必ずしも利を云はん、唯だ仁義あるのみ」といふたが、人生の常情は仁義は二の次ぎ、先き立つものは此の利で、利のある所に人の集るは、蟻の甘きに就く如く、

寒山の詩

城北仲家翁、渠家多酒肉。
 仲翁婦死時、弔客滿堂與。
 仲翁自身亡、能無一人哭。
 喫他盃糞者、何太冷心腹。

と寒山の謳ふたのは、能く人情の機微を道破したものと云はねばならぬ。されど人を以て唯だ利にのみ動くと爲すものは、未だ眞に人情を見たものでは

ない。財慾以外に人生を動かす二大勢力がある。曰く色慾、曰く名慾、色慾は人類の先天的本能にして生理的約束に出る男女の愛である。シヨールペンウエルは「戀愛は一見、甚だ高尚なるが如く、神聖なるが如きも、其の根本を査究すれば結局色慾に外ならず」と喝破したが、併し之れを以て單に肉慾として満足するは、人情の肯んせざる所で、之れに精神上の戀即ちプラトニックラブ(Platonic Love)なるものを結合せしめて、一面に於て大に卑むべきものであると見ると共に、他面に於ては神聖なるものとして崇めて居る。されば兼好法師は「よろづいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうしくしく、玉の厄の底なき心地ぞすべき。」といふて居る。戀愛は人生の色彩なり、之れあるが爲めに睡み、之れあるが爲めに親しむ。若し夫れ巢林子が「天の網島」に現はせる紙屋治兵衛の妻おさんが、良人の體面を保たしめんが爲め、其の困難を見兼ねて、

わたしや、子供は何着いでも、男は世間が大事、請出して小春も助け、太兵衛とやらに一分立て、見せて下さんせ

と「良人の恥と我が義理を一つに包む風呂敷に」情を籠めて、夫の情婦小春を身請の金の才覺に行かんとするを、治兵衛に、

手付渡して請出して其の後、圍つて置くか、内に入れるにしてから、其方は何となることぞ、

と云はれて、ハット行き詰り、

アア左様ぢや、ハテ何とせう、子供の乳母か、飯焚か、隠居なりともしませう、

とワット叫び、治兵衛をして、

親の罰、天の罰、神佛の罰は當らずとも、女房の罰一つでも、行末はようない筈、ゆるしてたもえ、

と云はしめたる情緒に至つては、義理と人情との絢み合つたる人心の複雑、皮相の觀察を以て知り得べきことではない。此の「男は世間が大事」といへる一語は、又直に人生の他の勢力たる名慾即ち名譽を喜ぶ感情の存立を示して居る。名譽の爲めに生命、財産、戀愛をも犠牲に供せる事實は、世間其の

千代萩の
千松

悲哀の快
感

例に乏しくない。人は一代、名は末代といへる武士道の常套語は、肉に死して名に生きんとするもので、彼の「加羅千代萩」に可憐なる千松を描きて「お腹がすいてもひもじうない、何共か、じよめん、瀝面じよめんつくり、涙は出れど、なまけ、稚氣なまけに譽められたさが一ばいに、こちや泣きはせぬと額を撫で、泣き顔かくす心は、さすが名にあふ武士のたねなり」と云ふたのも、此の名譽の爲めに飢餓を忍ばしめたのである。英雄回天の事業、見來れば多くは此の名の爲めである。田舎の金持が財産を抛つて議員にならうとするのも、氏素性のないものが名門と婚を通せんとするも、皆な此の爲めである。併し之は又或る場合に於ては此の名を抛つても顧みない時がある。他の慾望即ち生存の慾望や利慾、戀愛の爲めに名譽を犠牲にすることは少なくないが、其の最も氣高きものに至つては「人生意氣を感じず、功名誰れか復た論せん」で、此の意氣の爲めに一切を犠牲にする例もある。解し難きは人の心。平生は平和を愛し争闘を惡むのであるが、一旦事あるに當つては奮然とし争ひ、勇闘猛進、他を斃して而して自ら快とする。悲哀は人の喜ばざる所であるが、一たび其の事の假象と

なつて戯曲小説に現はるゝ時は、好んで之れを見て涙を流して自ら喜ぶ、

泣きもせて泣くふりするを見て泣いて

泣かぬ顔する芝居見る人、

理を以て律すべからざるは云ふまでもないが、さればとて個人の感情を以て他の感情を計ることは出来ない、されど、幸ひなことには、人には人として共通の感情があつて、各人共に脈絡貫通して居る。何人と雖も眞を求め、善を求め、美を求めぬものはない、此の眞を求むるのを智的情操といひ、善を求むるのを倫理的情操といひ、美を求むるのを審美的情操といふ、疑惑に不快と不安とを感じ、了解に愉快と平安とを感じるのは、此の智的情操にして、之れあるが爲めに人類の智識は發達し、理性は開發するので、如何に感情は人生に勢力があるといふても、全然理性を撥無し、智識を蹂躪することは許されない、感情は花であるが理、實である。冷やかなる理性は人を動かすものではないが、感情のみに走つては、其の方向を誤らないことは少い、感情の盲動を制止し、之れを正しき方向に赴かしむるものは理性の力である。

眞善美の
三情操

感情は花
理性は實

四端の心

此の理性の力と伴ふて感情を制取するに力あるものは、倫理的情操即ち善を求むる心である。義理をして人情を征服せしめ、道義に立つて名利を抛たしむるも此の力である。孟子いふ「惻隱の心は仁の端なり、羞惡の心は義の端なり、辭讓の心は禮の端なり、是非の心は智の端なり、人の此の四端あるは猶ほ其の四體あるが如し」と「折りて後貫ふ聲あり梅の花、性は善なる人の心、更に孟子の語を引用せしめば、

今、人乍ち孺子の井に入らむとするを見れば、皆な怵惕惻隱の心あり、交を孺子の父母に内るゝにあらざるなり、譽を郷黨朋友に要するにあらざるなり、其の聲を惡んで然るにあらざるなり、是に由て之れを觀れば、惻隱の心なきものは人にあらざるなり。

と、人は之れによつて情慾に打ち克つ、こも亦人心指導の大勢力である。人情の美は此の倫理的情操と相接し、更に其の審美的情操は艸の葉に置く露に、無限の詩趣を感じ、峰に咲く花に思ひを凝らし、生存競争、寧日なき人生に慰安を與へ、齷齪たる人心に一道の融和を生ず。蓋し此の眞善美を愛好する

神に近づくべき情

の情操内にあつて、人は神に近づく、此の如く神に近づくべき情操を持ちながら名利の爲めに障へられ、肉慾の爲めに動かさる、清きが如くにして汚れ、汚れたるが如くにして清く、一面は神に似たれど、他面は獸に類し、各人相異り、相異なるが如くにして相同じく、異中に同を求めば各人脈絡貫通して、打てば必ず響けど、同中に異を求めば風馬牛、相關せず、妙と云はんも、尙ほ言ひ及ばず、奇と云はんも尙ほ當らず。此の如く解し難く計り難き心意を以て成り立つて居る個人、其の個人を單位として構成せられたる世態、其の紛然雜然たるは云ふまでもない。吾等は徐ろに其の異中に同を求め、同中に異を探りて之れが一應の觀察を試みんとするのである。

第二章 世態の成立

第一節 原始民族の世態

時代は歴史の縮寫 今日の時代に於ても尙ほ 過去の歴史に生活する人類の存在して居るのは争はれない事實で、中央亞弗利加や南亞米利加又は南洋の島々の中には、文明人士が數千年若くは數萬年前に經過し來つた生活の面影を遺して居るものがあつて、横目縦鼻、其の形體の人たるに於ては疑ひないが、其の生活状態は寧ろ動物の方に近いのである。勿論人は動物より進化したものであるから、其の源に遡れば他の動物と異なる所はないのであるが、強て其の差を求むれば、人類は早くも下部の二足を以て立つことを發明して、上部の二足を歩行以外に用ふることとし、此の二足即ち手を以て器具を使用することを發明したのにある。二足を以て立つものは高等動物の中にもあることはあるが、器具を使用するといふことは、人類以外には多く見ることが出來ない。多く見ることの出來ないので、稀には石や木片を使用するものもあ

人類の二足歩行

器具の發明

火の發明

るが、唯だ其の人類の器具と異なる所は、彼等は自然物のまゝ使用するが、人類は多少とも之れに加工して使用に便して居る。自然物を自然物のまゝ使用したのは、まだ器具と名けることの出來ないので、多少とも之れに人工が施されて初めて器具と云ひ得べきものであるから、此の器具の使用は人類の他の動物と異なる一大特色と云ふことが出来る。されば今日地底を發掘して人類の遺骨を發見する所には、何處にも其の使用に供したと思惟せらるゝ器具を發見する。勿論其の器具は、僅に自然物に加工せられたる石器類で、其の最も進歩したと思はるゝも疎末なる土器に過ぎないが、他の動物の未だ使用せざるものなることは明かである。此の器具の使用と共に人類の特色と目せらるゝのは、火の使用で、支那では燧人氏、木を鑽つて初めて民に火食を教へたといふが、何れの民族に於ても餘程古くから之れを使用したに相違ない。それもラボックなどのいふ所によると、南洋諸島に於ける野蠻人の中には、今も尙ほ火を用ふる術を知らないものがあるといふほどであるから、人類の他の動物と異なる所は、其の原始時代に於ては其の差、真に一絲であり、今日

原始民族の数の観

の野蠻人は尙ほ其の面影を遺して居るのに過ぎない。されば彼等の心的状態は頗る憐れなもので、目前の事實を知覺するといふことは出来やうが、之れを推理し思念するといふ作用は、全く缺けて居つて、亞弗利加のゲムマラ族の如きは三以上の數を表はす言語を有せず、僅に指で表はすのであるが、それも五以上になると、指でも表はすことが出来ないから數へることが出来ないといひ、同じく亞弗利加のブッシュメン族、南亞米利加のウツド、インヂャン族の如きは二以上の計算がむづかしいといふ、それ程であるから彼等の生活は唯だ現在ののみで未來といふ考もなければ過去といふ考もない。飢ゑ來れば食ひ、渴し來れば飲む。其の食ふ所のものは果實と魚介、其の飲む所のものは水、時に石を抛ちて鳥を射、力闘して獸を得るとあるも、飽けば即ち昏昏として樹下に眠り、意に適すれば起つて歌舞す。蓋し舞蹈は各地野蠻人通有の習俗にして、彼等は之れによりて身體を緊張し、之れに無限の快樂を感ずるものにして、先きに擧げしブッシュメン族の如きも、此の爲めには徹宵歌舞して終に絶息するに至るといふ。愚なるが如しと雖も、これ吾等の祖先が經由し來り

現在に生活す

吾等の祖先

原始民族と小兒

遊戯は勞働より古

し過程で、進化論の云ふ所によれば、吾等は單細胞動物より高等動物にまで進む數億年間の経路を、僅か母胎にある十箇月の間に踏み來るが如く、原始民族より現代文明の人士に到る數萬年の歴史は、生後十年二十年の中に經過するので、過去なく未來なく唯だ現在に生活したりし原始民族の面影、飢ゑれば食を求め、渴すれば飲み、飽けば眠る原始民族の名残も、之れを吾等が小兒時代に見るべく、意に適すれば扑舞したりし状態さへ、小兒時代に殘つて居るのである。小兒と原始民族との類似は之れのみにあらず、彼のブッシュメン族が全身に脂を塗り、粘土を以て之れに彩色を施し、頭髮に羽毛を挿み、光輝あるさまざまの器具を頭に巻き、胸に垂るゝが如く、小兒は無目的なる裝飾を喜ぶものであつて、スペインサーが「文明人の虚榮心も大なれど、未開人の虚榮心はそれにも増して大なり」といへるは、直に大人と小兒とに應用すべく、ブツヘルが「遊戯は勞働より古く、藝術は實用より古し」といへるも、亦大人と小兒との経路に於て見得べき事實である。されば現代に於ても尙ほ原始民族に髣髴たる種族の存在するが如く、吾等の心の中にも亦、原始

民族と相距る遠からざるものゝ存在することを忘れてはならぬ。これが世態觀察の要件である。

家族關係

上來述ぶる所の如く、原始民族の生活は單純なるものなれど、此の單純なる生活の中にも早や男女の關係あつて、從つて親子の關係生ず、其の初めは他の動物の如く母を主として父を忘れたれど、其の子は皆な母を助け、兄弟姉妹も皆な母を中心として團結して、此に家族の素因を生じ、一家族は他の家族を生じ、他の家族は更に他の家族を生み、かく人種の繁殖するに從つて其の食物を得る方法も初めは何の勞苦なく、飢ゑて食ひ、渴して飲み來りしものも、終には多少の勞働を爲すにあらざるば食物を得難きに至りて、只これ一時的充慾的にして殆んど無目的なりしものも、其の面目を變じて稍永久的有目的となりて、曾ては只管に自然の供給する所の果實、魚介、獸畜を以て食とせしものも、後には之れを漁り之れを獵らざるを得ざるに至り、更に進んでは自己の用に供すべき動物を畜養する牧畜の時代となり、其の動物を養ふに適當なる食物のある所を、水草を追ふて轉移し。偶ま他の種族の來り

食物の缺乏と勞働

牧畜時代

家族組織の變化

同類意識

て、同じ處に狩獵し牧蓄するに至つては、勢ひ自己の利益の爲めに、他を排斥せざるを得ず、此に於て争闘は激甚となり、其の争闘に於て強きものは勝ち、弱きものゝ負くるは自然の理なれば、女子よりも男子の強ければ、母系中心の家族も漸次に男系中心に變じ、男子は女子を壓し、女子は男子の保護の下にあるにあらずんば、其の生存を保維し難きにより、其の初めは多夫一妻なりしものも、今は變じて一夫多妻となり、男子は擅に他の部落の女子を掠奪して己れの妻妾とすることゝなりて、子は皆な父に從屬して一族の發展を計り協力して敵に對するに至る。かくて種族と種族との競争に當りて一致團結の鞏固なるものは勝ち、其の軟弱なるものゝ負くるも、争ふべからざる自然の理法なれば、相互團結して社會の因となる。もとより人の社會を組成するに至るは、單に此の生存競争の必要のみならず、人類固有の同類意識 (Consciousness of kind) によることは、社會學者ギッデングスの云へる如くにして、他の動物と異なる此の人類なるものが、相互に其の類似を自覺して相頼るに至りしには相違なきも、一面此の生存競争が社會の成立を促すの因たりしも

疑ふべからず。さて此の團結を鞏固にするには、單に人類としての類似よりも同一血族てふ觀念は一層其の團結を鞏固にし、之れに加ふるに其の崇拜の對象なる神を同うするてふ思想生ずるに至りて、益々鞏固となるので、此の人種と宗教との異同は、今日文明社會に於ても合同し分離する主要のものたるが如く、太古にあつては同一血族なりてふ觀念、同一保護神の下に立てりてふ思想は、其の團體を鞏固にし、他の血族、他の保護神の下に立てるものを排斥せるは、これを歴史あつて以後の事實に徴するも明かなることにて、彼等は實に此の同一血族たり、同一保護神の下に立てりてふ思想を以て團結し來り、其の後或る事情の下に分離することありとも、其の信仰は永く傳へられ、信仰の相同じてふとは、其の祖先を伴にするといふことゝ密接して一致團結の力となり、其の宗教を異にし信仰を共にせざる種族と争ひて、之れを驅逐し又は之れに驅逐せられて、迫害なき地に逃れたるは、彼のイスラエル民族の四方に漂泊したるに照して察するに出來るのである。これら血族關係、宗教關係と共に吾等の看過すべからざるは統治關係である。一の部落が

血族と宗教

統治關係

一致團結して他の部落に對するに當り、其の一致團結の鞏固なるものが勝ち、然らざるものゝ負くるは已に述ぶる所の如くであるから、此の一致團結を鞏固にして他に對するには、是非とも之れを統率し指揮するものがなければならぬ、此の統率者指揮者の命に服従して、初めて其の一致團結が鞏固になり、規律ある行動を以て敵に對することが出來るので、若し此の統率者指揮者なく、各人思ひ思ひに戦ふた時には、必ず其の統率者あり指揮者ある團體の爲めに敗るゝのであるから、最も強力なるものを會長として他に對するに至り、部落の長なるものを生ず、此の部落の長なるもの、腕力に於て優れて居るべきは勿論であるが、唯だ腕力に於て優れて居るのみでは、老いて力衰へたる時は、直に其の長を代へざるを得ざるに至つて内訌絶えず、常に一致團結して他の部落に對する能はざるを以て、腕力以外に團體を統率する力あるを要す、此の要求に應ずるものは即ち宗教の力にして、何れの國も其の初めに於て會長たりし英雄は、何等が特殊の關係を其の種族の保護神に有せざるなし、猶太人の會長が神と密接の關係ありしは云ふまでもなく、彼の羅馬の始祖

統治者の資格

ミユラスの羅馬人の保護神と深き關係ありしも著名の事實で、各國の古代神話は多く此の英雄と神との關係を語るものである。此の宗教的意義の外に、其の統率者を永久的ならしむるの要件は、血族の尊者である。英語で王のことをキング(King)といふは、其の源はキン(Kin)即ち血族の子といふ語から出たもので、今尚ほ親族のことをキンドレッド(Kindred)、族制のことをキンシップ(Kinship)などいふは此のキング即ち王といふ語と關係あるは、既に學者の認むるところ、彼のアイヌ族の如きも王といふものなく、其の部落の中にて家筋正しく人望あるものを長とする如きは、其の一例である。されば部落の長たるべきものの資格は一、武勇絶倫なるべきこと、二、宗教上の權威を有すること、三、血族の尊長なることとの三要件にして、此の内の一を有するも能く之れを統率するを得べけれど、此の三を具有するに至ては、一層其の統率をして有力ならしむるのである。かく社會の進歩し來ると共に其の日常生活も次第に變易して、牧畜の時代は過ぎて、農耕の時代に入り、水草を追ふて轉移したりし漂泊の生活より、一定の土地に住して、之れに播種し、其の收穫を得て食

料に供することとなり、進みては唯だ天然に任せずして、肥料を施して之れを培養するに至り、人類の生活と土地とは離るべからざるの關係を生じ、先きには收穫の場所に就て、他の部落と争ひしものも、後には土地の兼併、奪略となり、治者あり、被治者あり、一定の土地ありて、近代國家の萌芽を爲すに至る。

第二節 文明の發達

既に治者被治者の關係生じて社會の一致團結愈固く、農耕の業初りて一定の地に止住するに至つては、社會は益々擴張せられて、其の生存の競争も亦激甚となり。人口の増加に従つて食物の増加を希ひ、食物の増加を希ふにつれて土地の兼併を望み、甲の部落は乙の部落の地を奪はんとし、乙の部落は又甲の部落の爲めに奪はれじとして相争ふや。初めは部落皆な兵、悉く武器を執つて他の部落と争ひしも、かくては食物の供給者なくなりて、其の競争を永續する能はず、永續し得るもの、勝ち、永續し能はざるもの、負くるは當

然の理なれば、勢ひ出で、戦ふものと、止つて農耕に従事するものとの別を生じ、止つて農耕に従事するものは食物を供給して兵役を免れ、出で、戦ふものは之れによりて其の食物を得て、後顧の憂なきを得るに至り、此に社會の階級を生じ、かくて其の戰爭の擴張せらるゝに至つては、懸軍萬里といふ程ならぬも、遠く自己の地を離るゝが故に勢ひ他の非戦者に望むに、食物の運搬を以てせざるを得ず。即ち他に食物を運搬するものあつて之を供給するものは勝ち、之れなきものは敗れざるを得ざれば、止つて農耕を事とするものゝ外、出で、之れを運ぶものを生じ、甲の地より丙に運ぶものと、乙の地より丙に運ぶものと相會して、初めて甲の地になくして乙の地にあるものを發見し、乙の地になくして甲の地にあるものを見、戦ひ止みて平和克復するの後も、其のあるものを出してなきものを得る交換は行はれ、他面に於ては同一宗教の下にある各部落が其の祭神に祈らんとて相集るに際して、又一地方に豊にして他地方に乏しく、他地方に豊にして又他の地方に乏しきを見るや、有無相通するの必要を認めて商業の基礎を成す。蓋し戦争は民種接觸の

始にして、宗教は商業發達の素地を爲すものである。かく商業の基礎成りて需要するものと供給するものとの別立つに及びて、其の需要を充すべく、又は供給に應すべく、物品の運搬を計らざるべからず、此の物品の運搬を計るに就ては、需要者の出る所と、供給者の趣く所と相合せざるを得ず、これ道路開通の必要生ずる所以で、其の初めは獸類の踪跡を往來したるものも、漸次其の踏み行く路の一定するに至つて、不完全ながらも道路の形を生じ。加ふるに宗教上の祭祀によつて相會するの風あらんか、各方面の地より一所に會同するの道路を生ずるので、勿論其の道路といふも、今日文明國に行はるる如き堂々たるものにあらずして、苔の細道辿り行くに過ぎなかつたのであらうが、之れによりて交通は便となり。交換の事は益發達し、今日南洋フィジー島人が定時に處々に集りて交換を行ひ、サンドウイチ島民がイラク川上に集りて産物を交換し、古の希臘人がオリンプスの祭禮に交易を行ひしが如くなりしが、其の交換盛なるに至ては、唯だ甲の物品と乙の物品との交換に止らずして、甲の人の剩す所の品は乙の人の望む所にあざれど、乙の人の剩す

所の品は、甲の人の望む所となり、乙の人は丙の人の剩す所を望めど、丙の人は却て甲の人の剩す所を望むといふ場合に、甲者が其の望む品を得んとするには、先づ自ら剩す所のものを丙の人に與へて丙の人の剩す所のものを得、之れを乙の人に與へて、乙の人の剩す所のものを得るといふ不便を生ずるを以て、何人も望む所のものにして、且つ分割し得べきものを媒介として、甲の人はそれを乙に與へて自己の望む所のものを得、乙の人はそれを以て又自己の望む所のものを得るといふ便を計るに至りて交換は一層便宜となり。此の媒介物も今は貨幣即ち金銀なれど、初めは布を以てし或は貝類を以てしたるにて、説文にも「貝は海甲蟲なり、古は貨は貝にして周に至て泉あり、秦に至て貝を廢して泉を行ふ」とある程にて其の金屬を用ひたるは、餘程開化したる後のとにて、それも初めは金片銅片等を用ひて貨幣として一定するとなかりしが、英吉利に於ても初めて貨幣を鑄造したるは西曆七十八年の頃だといふことである。かくて不完全ながらも媒介物が出來て交換は敏活となり其の初めには自己の作りたものを、自己之れを持ちて交換したるものゝ、終

貨幣

商工業

には生産者と交換者との區別を生じ、甲の生産を乙に與へ、乙の生産を甲に與へ、其の間の報酬によつて衣食する商人なるもの出で、其の商人も亦運搬するものと賣却するものとの分業を生じ、此の他に其の物品の製作即ち工業なるものも生じて、人智も發達して文明の光は漸く其の間に輝き初むるに至る。一面其の統治機能の方を見ると、初めは首長は統率者指揮者の地位にありて、單に戦争のこのみならず、商業のことにも干與して、之れを保護し獎勵し、苟くも其の首長者の命令に反するものは、之れに施すに刑罰を以てして共同生活の平安を計り來りしが、唯だ此の首長の自由意志によりて左右せられて、其の間一定の規律なきときは個人の生命、財産頗る安固ならず、此に於て其の首長なるものは、豫め其の制裁の程度を明にするの法律なるものを定め、個人として之れに服従せしむることゝなる。云ふまでもなく其の法律は今日の如く整備せるものにあらずして、其の取捨變更一に首長の意志により、其の適用改變も亦首長の自由なれど、暴横は民心を得る所以にあらず、専恣は團結を鞏固ならしむる所以にあらず、且つ個人の意志によりて朝

法律

令暮改せらるゝは、民衆の平安を得る所以にあらざれば、宗教の教義又は從來の慣習によりて法を立て、萬世の則とすることとなり、此の時代に於て早くも發明せられし文字によりて、其の條文を金石に刻して國民に知悉せしむることとなり、こゝに法律なるもの生ず、彼の羅馬の十二銅標の如きは其の一例にして、其の社會によりて多少の差はあれ、兎に角法律の制定は、社會組織一段の進歩にして、正に之れ國家と稱すべきものとなつたのである。其の國家も初めは統治者の威壓と被治者の服従とによつて治められたのであるが、漸次に統治者は其の威壓の程度を制限して被治者の自由を認め來るに至りて、國家の組織は君主專制より立憲同治に進み行くので、此の時に當りては國家の權能は、法律を制定する立法部と共に、之れを實施する行政部を生じ、更に其の法に背けるものを處分する司法部を生じ、立法、行政、司法の三權を有し、唯だ國內の安寧と秩序とを維持して團結の平安を計るのみならず。一歩を進めて其の國家をして他の國家に優るの國家たらしめ、其の國民をして他の國民に優るの國民たらしむるの施設を爲すに至る。何の世、何の時とい

國家の機能

社會の進歩

へども、優勝劣敗は自然の大法にして、生存競争は不斷のことなれば、其の國家にして團結鞏固ならず、其の國民にして身心の力劣弱ならんか、終に他の優強なる國家の爲めに侵略せらるゝは數の免れざる所にして、昔は軍事上に於てのみ行はれし此の事も、經濟關係複雑となり、商工も亦發達して、初めは國內の一地方と他地方とによりて行はれし交易も、後には一の國民と他の國民との間に行はるゝこととなり、人によりて運搬せられしものも、牛馬を使役することとなり、人も牛馬も、もとは肩土にて運びしものも機械を發明して車を用ふるに至り、一方水力風力を利用する船舶となり、更に蒸汽力電氣力を使用するに至りては、一切のこと大仕掛となりて、曾ては山河懸隔したりし他の國家も今は比隣の如く、前には相見ては直に相争ひし國と國との關係も、今は成るべく事を平和に決せんとし、國際法なるものを定めて其の關係を規定し、それも近きより遠きに及びて一切の關係全く世界的となるに至つた。かくなつては國家存立の施設も容易なことではなく、云はゞ萬國林立、隙あらば乘じ、機あらば窺はんとする間に介在して行くのであるから、

國際關係

軍事的施設に於ては強ならざるべからず、經濟的施設に於ては富ならざるべからざると共に、亦教化的施設に於ても智ならざるべからざるのである。教化的施設とは前に云ひ洩らしたが、社會が其の共同生活を圓滿ならしめんとするには、其の社會の成分たる個人をして、相互に共同生活を營み得しむるまでの技能を授けて、生れたての自然的なる人類を教養して、其の時代に適應せしむるやうにせねばならぬので、此の必要によつて社會の漸く進むに従つて教化的施設なるものは考へられ、先づ共同生活に必要な言語文字を教へ、進んで其の智能の啓發と徳器の成就を計るのであるが、世益進むに従つて此の事愈必要となり、現代に於ては尤も缺くべからざるの施設となり、之れなき時は兵も強からしむるを得ず、國も富ましむるを得ず、國家の體面も保維することが出来なくなつて來た。

之れを昔に比すれば、現代は利便にもなり道義的にもなつた。曾ては自然に克服せられて、其の爲すがまゝに任じたものが、今は自然を克服して自己の用に供することとなり。前には他の部落、他の國家に對しては掠奪を擅に

せしものが、交易となり、争鬪を旨とし事を干戈に訴へしものが、樽俎の中に事を決する外交となつたのである。之れを文明の進歩と云ひ得べくんば確かに文明の進歩である。之れを人智の發達と云ひ得べくんば、確かに人智の發達である。文明は確かに進歩した。人智は確かに發達した。併し之れは唯だ其の遣り方が巧妙になつた。其の舞臺が廣くなつたといふまで、社會初生時代の消息は今尙ほ遺つて居るのではなからうか。前にもいふ如く時代は歴史の縮寫で、現代に於ても原始社會の状態を保維せる蠻族の存在するが如く、現代文明人士の胸の中にも、原始時代の思想が遺つて居る、これは確に事實であるが、併しそれは次第に裏面に潜みて勢力を失ひ、表面に現はれたる活動は漸次理性的となり、道義的となり來つたのも疑ふ事の出来ない事實である。例のギツデンダスは、主觀的には道徳的生活の擴張し、客觀的には道徳の發展、同情の進歩して社會的關係の密接になれるを文明の徴とした。此の定義によれば今の時代の昔に比して文明と稱し得べきは疑ふべくもない。されど此の文明の裏面に、尙ほ不合理的不道徳的非圓滿的狀態の伏在するを

忘れては、精到に世態を觀察することは出来ないのである。マッケンジーは「人間の幸福は一、自然の克服、二、社會機關の完全、三、個人人格の開展より成る」といふた、此の語によれば、今の時代の昔に比して幸福となつたのも見易き事實であるが、尙ほ未だ自然に克服せらるゝことの少からず、社會機關の完全ならざることあり、個人人格の充分に開展せられざる不幸の境あるを看過することは出来ぬ。現代の世態は過渡の時代であり、否、何つの代、何つの時も過渡に屬して、人類は理想を辿りて進み行きつゝあるのである。請ふ、少しく過去の歴史に就て、上下茫茫五千載、世態が如何に變遷し、人情が如何に推移し來れるかを概觀せしめよ。

第三章 世態人情の變遷

第一節 文明の故國

社會進歩の系統と人文發達の經路とは大要上來述る所の如く、人は進歩の動物にして、一日も向上發展の大道を辿らざるなければ、何れよりを文明と名け、何れよりを野蠻といふべきかの區別は明かならず、文明の淵源は遠く野蠻の昔にありて、最も進歩したる野蠻時代と最も劣等なる文明時代との境界は定め得べきにあらねど、唯だ自然に克服せられて、何等之に打ち克つの準備なき時代を野蠻と名け、自然を克服して自己の用たらしむるを得る時代に至て文明の萌芽出で、單に個人個人の集團にして社會組織の未だ成立せざる時代を野蠻といひ、其の稍、社會組織の完備し來れる時代を以て文明と呼び、全く腕力的の競争にして弱者の人格の全然侮蔑せられたる時代を野蠻とし、其の人格の漸く認めらるゝに至りしを文明の發現と目するの外はない。太古は茫漠、得て探るべからざれど、史家の以つて文明の發源と目せるものは、

僅に四五千年の昔にして、其の民族を云へば曰くハム、曰くセム、曰くアー
ルヤ、曰く漢、其の地をいへば、曰く埃及、曰くメソポタミヤ、曰く印度、
曰く支那、而して此の四の地方は悉く大河の岸にありて灌漑の便を受け、土
地豊饒の地である。埃及には神に喩へられしナイル河あり、メソポタミヤに
はユーフレテース、ティグリス兩河あり、印度にはガンヂス、インダス、支那
には黄河揚子江あり、これら四個の文明は多少の前後こそあれ殆んど時を同
うして、世界の四個處に開發したので、彼等は互に相知らず、互に相通する
こともなかつた。(尙ほ此の外に北亞米利加のメキシコに於て略ぼ同時代に文
明が開けたのであるが、これは餘り世界の氣勢と關係しないから、此には略
する)併し此の四は後來世界の文明の幹流となつて、流れ來る支流を集めて
現代文明を大成したので、此の四個の中、埃及とメソポタミヤとの文明は流
れて西洋に入り、印度、支那の文明は東洋文明となり、今は此の文明相通じ
て世界文明となつて居る。抑も其の始源たる四個の文明は如何なる状態なり
しぞ。其の最も古しと云はるゝは埃及にして、支那最古の記録に先つこと一

千年の昔に於て已に高級の文明を有し、印度人がインダス河畔に沿ひて進み、
梵語を有するに至りしは、西曆紀元前千五六百年の頃なれど、埃及は其れ以
前に於て文字を有し、其の製作の如きは更に悠遠なる古代に屬すと稱せられ、
支那に於て天文学は紀元前一千二百年の頃に至りて發達したれど、バビロニ
アは二千二百年、埃及に於ては二千七百年代に於て見得べしといふのである
から、其の開發の順序をいへば、埃及最も古く、バビロニア之れに次ぎ、
印度は其後にあり、支那は又其の後にあるやうである、いでや。此の最古の
埃及より觀察の歩を進めむ。埃及人はもと西方亞細亞の地にありしハム民族
が漂泊してヌエズの西、ナイルの沿岸に居を住めしものにして、其の人文開
展の主因は、實に此のニール河にあり、此の河なからんか、埃及の地はリビ
ア沙漠の一部にして碣确荒寥たるべきに、幸に此の河の氾濫して兩岸を濕す
が故に、早くも耕作に従事して社會を結ぶに至りしにて、今を距る五千年に
は儼然たる王國を有して、體制略ぼ整ひ、國王はファラオ(Pharaoh)と稱して日
の神の子たるの意義を有し、平時にあつては立法、行政、司法の權を掌り、

戰時にあつては軍隊を統率して外敵に當る。彼等が夙に此の整備せる國家を組織せしも、實に此ニール河の賜にして、碣嶠の地此の河あつて濕ふが故に外には彼等は此の最好の地を失はざらんと務め、内には此の河の氾濫によりて土地の區劃時々没却せらるゝが故に、之れの整理を國王に仰ぐゝなり、且つ此の河一つが埃及人の生命であるから、此の水を諸方へ引く必要が起つて溝渠や運河の類を造るといふ共同作業が生じ、それには是非首長を即ち國王の力を借らねばならぬのであるから國民の團結は鞏固となり、此の國民は等しく日神オシリスを崇拜し、先にもいふ如く國王を以て其の子孫とし、之れを助くる僧侶は智識の代表者となり、官吏、教師、判官を兼ね、外寇を防ぐ爲めには武士なる階級あり、其の武器には弓、棒、刀、鎗、投石器等を用ひ其の他は農業、牧畜に従事する平民であつた。此の國の人文も亦多少ともニール河に關係して居るので、殊に其の太陽崇拜の如きも、ニール河の氾濫が年々太陽が一定の場所にある時に行はるゝものであるから、太陽と此の河とは密接の關係あるといふ考からいよゝ／＼鞏くせられたのであるといひ、其の

社會、學、
藝とニール河

宗教と木
乃伊

又太陽の同一位置を計るの必要から天文学や曆數の學開け、其の太陽が復び同一位置に来る間の三百六十五日と六時間なることを發見し、之れを一年としたる如き、ニール河の氾濫によつて没却せられたる土地の境界を恢復するの必要より幾何學の發達を促したる如きは其の一例である。

一體何れの國の宗教でも、其の初めに當りては皆な自然崇拜で、天に輝く日星、地に茂る草木、若くは山河を神とし、又は空飛ぶ鳥や野を驅る獸類をも神と見るのであるが、殊に埃及に於ては生死輪廻の信仰行はれて、吾等死後の靈魂は他の動物の肉體に入ると信せられたるを以て動物の崇拜甚しく、且復び靈魂の歸り來る時まで、其の肉體を保存する必要より木乃伊を造りて人體の腐爛を止むることゝなり、爲めに解剖學、藥劑學の進歩を促し、其の又墳墓を壯麗にしたるが爲めに建築彫刻の術進み、今日に於てもニール河畔に屹立して旅人の膽を奪ふ壯大なる金字塔ピラミッドは、皆な國王貴人の墳墓であるといふ。其他國王貴人の頌徳又は紀念の爲めに建てられし方尖碑オベリシク（Obelisk）宗教上の信仰より出でたる人首獅身のスフィンクス（Sphinxes）像の如き其の宏壯な

埃及の文字

るもの、今尙ほ現存せるを見ても、埃及人の古代に於て早く文明の光澤に浴せしことを見る事が出来る。此の國の文字は、何れの國も其の初めに於ては同じき如き象形文字にして、月を示すには半月形を描き、日を示すには圓形の中央に一點を施す如く、全く其の形を模したるものなるが、後には其の文字略せられて稍記號的となりて僧侶の間に行はれ、更に一層省略せられたるもの、平民の間に行はるゝに至つたといふのであるから、文字も餘程進歩したものである。

埃及より少し遅れ、若くは略ぼ同時代に於て文明の曙光を示したのは、メソポタミア地方に於けるセム民族である。此の地方は北の方アルメニアの峻嶽より二條の大河、其源を發し、東なるをチグリスとし、西なるをユーフラテースといひ、共に水源地方に於ては接近して居るが、中頃廣原に出で、は遠く相隔りて後、再び合してペルシア灣に入る。其中間にあるを以て土地肥沃にして穀物従つて豊饒なりしを以て、早く獨立せる小市府其の間に結ばれて、互に異なる君主と、異なる保護神とを有して相對抗し争闘止む所なく、

バビロニア

アッシリア

新バビロニアの榮華

殊に南方に住みしアッカド(Accad)族は夙に文明の發達を計り、楔形文字を發明して其の便に供して磨つたと云はれる。後此のアッカドはツラン人種なりしが西曆紀元前三千八百年の頃セム族の英主サルゴンなるもの出でバビロンの地を中心として、漸次四方を經略してバビロニア王國(即ちカルデア王國)を建設し、心を内治に止め、アッカド民族の文明を繼承して大に文教の興隆を計り、其の後東方に起りし亞細亞種の人民エラム族の爲めに侵害せられ一時は其の屬國となつたが、後に其の羈絆を脱せしも紀元前一千二百五十年の頃に至りて、バビロニアの植民地たりしアッシリア人は叛きて其の本國を亡ぼし、別にアッシリア王國を築きて其の版圖を擴張して、一時はメヂヤ、埃及をも服して隆盛を究めたが、後にはメヂヤ叛き、埃及離れて國內の擾亂に加ふるに北方の蠻族の來寇ありて國勢振はず、終にバビロンの鎮將ナボポラサルの子ネブカドネザルに亡ぼされて國は、新バビロニアとなり、ナボポラサルの子ネブカドネザル立つに及びて國勢隆々として盛んに、外はシリア、ユダヤ、フェニキア、埃及をも略し、内はバビロン城の經營に力を盡くし、城外周圍四里の環壁を立

て、廓内に大宮殿を築き、チグリス、ユウフラト兩河の間にも城壁を築き、ユウフラト河に長橋を架し、河口に港を開いたといふことであるし、又宮廷には正妻の外に三百有餘の妾ありて粧を凝らして居つたと傳へらるゝほどであるから、其の豪華の狀、想ひ見るべきであると共に、當時に於ける婦人の地位の劣等なりしも見る事が出来る。驕るものは久しからず、盛なるものは衰へざるを得ず、王の子孫暗愚にして國を治むる能はず、終に紀元前五百三十八年ベルシヤの爲めに亡ぼさる。舊バビロニアの建設より此に至る三千年常に他と相争ひしが故に勇悍の精神は此の民族の特長となり、其極殘虐なる行爲も少からざりしと傳へらるゝ。吾等は記述の都合により餘りに近代に來りしも、之れとても今を距る三千年前の事實である。三千年間其の思想に推移ありしは勿論なれど、此バビロン、アッシリアの二國は、絶對なる君主專制制度で、國王を以て地上に於ける神の代表者として尊崇し、其の祀る所の神は主として天體にして、光輝赫灼たる日月及び木火土金水の星を信ず。之れらはバビロニアにてはイルー (Ilou) アッシリアにてはアスル (Assur) なる

バビロン
アツシリア
の宗教

首神の下に屬すとし、且つ此の如く天體を崇拜すると共に、空氣清澄にして天體を視察するに便なりしを以て、夙に天文學及び數學に長じ、日月五行によつて一週を七日に定め、天體を十二宮に分ち、一年を十二月に定め、一日を廿四時間に、一時間を六十分に分ち、一分を六十秒に分ちたる等、學術界に貢獻したることは少なくない。

これら埃及、バビロニア二國に介在して、古代文明に貢獻した二個のセム民族がある。一はヘブライ人にして、他はフェニキア人である。ヘブライの建國も亦茫漠たるのであるが、初めユウフラト河の下流なるウルの地に居つたものが、紀元前二千年の頃會長アブラハムに率ゐられてバレスチナの地に移住したのであるといふことは明かである。ヘブライ人は此のバレスチナの地にあつて牧畜を業として居つたが、アブラハムの子の孫ヨセフの時に當りて、此の地に大飢饉あつて食料の缺乏を來したものであるから全族相率ゐて埃及に移り、暫し此の地にありて其の文化に浴せしも紀元前一千三百二十年の頃、埃及人の苦使に耐へかねて部長モーゼは全族を率ゐて埃及を逃れ、モ

ヘブライ
の文明と
宗教

ーゼは途中にて死し、其子ヨシア代つて一族を率ゐて故國バレスチナに歸り、其の信ずる所の宗教によつて祭政一致の政府を立て、シオフェテム (Shophetim) 即ち士師なるものを置き上帝の意を受けて國を治むることとした。元來此の民族は宗教的の民族で、他の民族が未だ多神教の域を脱せざる間に、夙に一神教を信じエホバを以て上帝として一切の他神を排斥して居つた。これが又他民族との調和を缺く所以で、其の埃及に於て迫害を受けたのも、建國後、常に他民族の侵掠を受けたのも之れに因するところが多い。此に於て賢者サミユルは全民族に建言して、國王を立てるを以て國民の團結を鞏固にするのは上帝の意に適するものたるを説き、士師政治を廢して王政とし紀元前一千五十五年サウルを立て、王とした。其の後ダビテ、ソロモン等の英主出で、國運大に振ふたが、嚴に天にまします一神エホバを信じて地にある一切の偶像を排斥したものであるから、古代にあつては常に繪畫彫刻の原動力となつた宗教が、他と撰を異にするが故に、此の方面に於ての發達を見る能はず、其の禮拜堂の如きも漂泊時代に於て天幕を以て充てたといふほどで、建築の如きも頗る

振はざるものであつた。其の代りに道義的は盛んで結婚の神聖は夙に認められ、婦女の地位の如きも同時代の他の民族の如く憐れなるものではなかつた。ソロモンの代になつて禮拜堂も建築せられ商業も盛んとなり、殊に神を讚美する文學の如きは尤も發達したが、これを要するに其の發達は精神上のことが主で、物質上のものではなかつた。ソロモンの後國內二分して一はイスラエル國となり、他はユダヤ國となりしが、イスラエル國は紀元前七百二十二年アツシリヤの爲めに略せられ、ユダヤ國は同五百八十六年バビロニアの爲めに亡ぼされ、其の國家的生命は短きものであつたが、宗教としての生命は今も遺つて居る。之れに反してフィニキア人は物質上の成功者で、商業國民として古代に雄飛した。これは全く其の民族の特性にも由るが、主としては其の地理的狀態で、バレスチナの西北に位し、東はレバノン山を負ひ、西は地中海に面したる狭長なる部分で、地味瘠せて農耕に適せず、且つ東方は山脈に遮斷せられて進み難く、勢ひ西方、海に出でざるを得ざりしを以て、早く漁業に従事し、後にはレバノン山に産するシーダと稱する松の一種を以て船

を作りて海岸に近接せる島々との交通を開き、紀元前千五百年代には航海貿易に従事し、順風に帆を孕まし、逆風に帆を巻き、天體を目標として遠洋に出で、終には地中海の沿岸并に其の諸島、は云ふまでもなく、亞弗利加の北岸より西方に及び、北は西班牙、英吉利にも通じ、陸路は隊商を組んでバビロニア、アッシリア、アラビヤ並にアルメニヤの地に進みて商業に従事したる程にて、船舶を家とし、港灣を國とし、到る所の沿岸に殖民地を置きたる世界的の民族であつた。かゝる民族の通弊として國民的團結弱く、各市府は獨立して世襲の王ありしも之れを統一するの力に乏しく、唯だ諸市の聯合を以て團結を計り、前にはシドン其の中心となり、後にはチル最も榮えたが、紀元前六百年代に於て全くバビロニアの爲に征服せられ、其の國民の大部分は亞弗利加の北岸なる殖民地カルタゴに逃れた。此のカルタゴこそ後に羅馬と對抗した立派な國であるが、フィキアとしては此の時に亡びたのである。此の國民の生活は此の如く世界的であり、諸方の文明に觸接したから智識に於ては餘程進歩したもので、各國に往來し、各國民と交際したから、勢ひ各國

の言語を寫すの必要を生じ、こゝに象形文字を離れた音標文字を發明するに至つた。これは埃及の象形文字、バビロニアの楔形文字に比して一層簡便にして且つ進歩したものであるから各國民の賞賛を受け、希臘に入りては希臘文字の源となり、羅馬に入りては羅馬文字の源となり、以て今日の歐洲文字の基礎を作つたのである。此の國民の宗教は通常バール教と稱せらるゝもので、日神バール(Baal) 月神アストレート(Asherah) 其他、木、火、土、金、水の諸星を崇拜したる多神教であつた。

以上は古代に於けるハム、セム兩民族の文明を一瞥したのであるが、この一瞥に於ても、農業國民は土地と密接の關係を有するが故に愛國心強く、商業國民は世界的なるが故に、其の本土を捨つるに吝ならざる如き、國豊かなものは内を守ることゝ汲々とし、國瘠せたるものゝ外に向はんとする如き、土地と職業、職業と氣質との關係、さては宗教と藝術との關係との密接なことは、今も昔も異ならざる世態人情である。

さてかくハム、セム兩民族が文明の曙光を世界に輝かせしと相前後して、更

らに特殊の開化を以て世界文明の先導を爲したるアールヤ、漢の二民族あることは既にいふたが、其中アールヤ民族は最も早く、ハム、セム二民族の文明と接觸したので、此の民族の根源地は、何れであるかは明かでないが、多くの學者は、今の波斯の西北に當るバミール高原地方より一は流れて印度に出で、他は波斯に出で、尙ほ他のものは分れて歐羅巴に入つたものと見て居る。印度には、もとドラーヴィダ(Dravidians)と名くる非アールヤの民族が居つたのであるが、今を距る四千餘年の其の昔、南下し來れるアールヤ人は印度河を越えて恒河河畔に對し、此にドラーヴィダ人を驅逐して此の肥沃の地を占領し、幾多の部落に分れて、各其の酋長の下に農耕に従事して居つたが、漸次人口増殖し、土地廣まるに従つて小は大となりて、部落は國家となり。其の漸次大陸に蔓延するに當り終に四姓の別を生じ、祭祀教法を司る波羅門(Brahman)は最上に位し、次ぎに政治并に軍事を司る刹帝利(Kshatriya)次ぎは吠舍(Vaisya)といふ、もとビス(Vish)即ち人民といふ語根より出で、商工に従事するものにして、最下の首陀(Sudra)は賤業に従事するもので非アールヤ人で

印度の文明

ある。此四姓の區別は世界最古の法典と云はる、摩拏(Manu)法典の出るに及びて家族若は社會に關する權利義務は定められ互に結婚することを禁せられて、其の最上に位する波羅門姓は、殆ど神の代表者と見られて、四姓を壓し其の勢ひは兵馬の大權を有せる刹帝利姓をも抑制して居つた。此の國は土地が豊饒で、生活し易きを以て、一體に樹下石上風清き所に冥想に耽るの風あり、夙に韋陀(Veda)なる經典を有して哲學的思辨に富み、且つ科學的考察をも怠らず、天文、醫學、生理等の學も發達し、殊に其の文學に至ては雄渾偉大にして光彩陸離たるものがあつたが、これらは皆な波羅門姓の獨り有する所であつた。盛なるものは衰へざるを得ず、驕るもの、久しかるべき理なく獨り四姓の上において權威を弄せる波羅門は、其の宗教上の權威を政治に及ぼさんとして弊害百出し、其の宗教上の議論も亦さま／＼に分るゝに従ひて、尊信の念次第に薄らぎ、之れに反して他の種姓の反抗はいよ／＼加はり、紀元前五百五十七年、中印度カピラハスツの王子釋迦出で、新宗教を唱道し、四姓平等の無階級主義を鼓吹するに及びて、其の勢威を失墜するに至つた。

此國民の宗教的なるはヘブライと似て居るが、其の信仰の状態は、二者全く其の途を異にし、彼れの一神教なるに對して、此れは汎神の傾向を帯び、彼れの一意神の啓示を信するに對して、此れは推理と思辨とを怠らず、彼れの宗教以外一物の他に示すものなきに反し、此れは此の宗教を根柢として哲學科學、文藝を發達せしめた。併し其の武力を世界に振ふに至らなかつたのは彼此一である。

同じくこれアールヤ民族であるが、印度の文を以て立つに反して武を以て立つた國は波斯である。西はチグリス河より、東は印度河に達し、北はカスピヤン海より南は波斯灣に至るの地で、其の一部には炎熱燒くが如き砂漠があるが、他の一部には五寒堪へ難き高原もあつて氣候頗る不順であるが、河畔一帶の地は豊饒にして牧畜又は農耕に適する。此の豊饒の地に居を卜したるアールヤ人は、夙に宇宙には善惡の二神あつて相戦ふものなれば、常に善神の命を奉じて惡神と戦はねばならぬといふ戰鬪的宗教を信じて、性勇悍にして騎射を善くした。此の宗教を大成したのは紀元前一千年の頃に出た

ゾロアストラといふ聖人で其の經典をゼントアベスタ (Zent-Avesta) といふ。國民は此の宗教を信じて漸次に大となり、初めはアッシリヤに屬せしが、後メデアに屬し四隣を征服し紀元前五百五十八年、國王キロス、メデアを亡ぼして版圖を擴張し、更にリヂアを討ち、進んで希臘殖民地の亞細亞にあるものを略し、バルチア、バクトリアの地を平げ、西はエーゲ海より東は印度河に及ぶ大帝國を組織するに至つた。此の國民のかく大を成したる所以は其の勇武の性によるとはいへ、又内は極端なる君主專制政治を施きて、國王を以て神の權化とすると共に、外、征服したる國民に對しては、人間の世は善惡二神相争ふものと信するが故に之れを遇すること頗る寛量で、其の固有の法律習慣を保存したるによる所少からぬのである。彼の印度が諸種の學術發達して、夙に五明とて内明(哲學)工巧明(美術)醫方明(醫術)因明(論理)聲明(修辭)音樂等を研鑽せるに對し、此の國民は簡單明晰で、其の兒童を教育するも、唯だ乘馬、騎射を學び、正直を尊び、虚言を吐かぬといふに外なかつたといふことである。哲學者の面貌と武士の風格とは。此の二民族の昔に於て見得べきである。

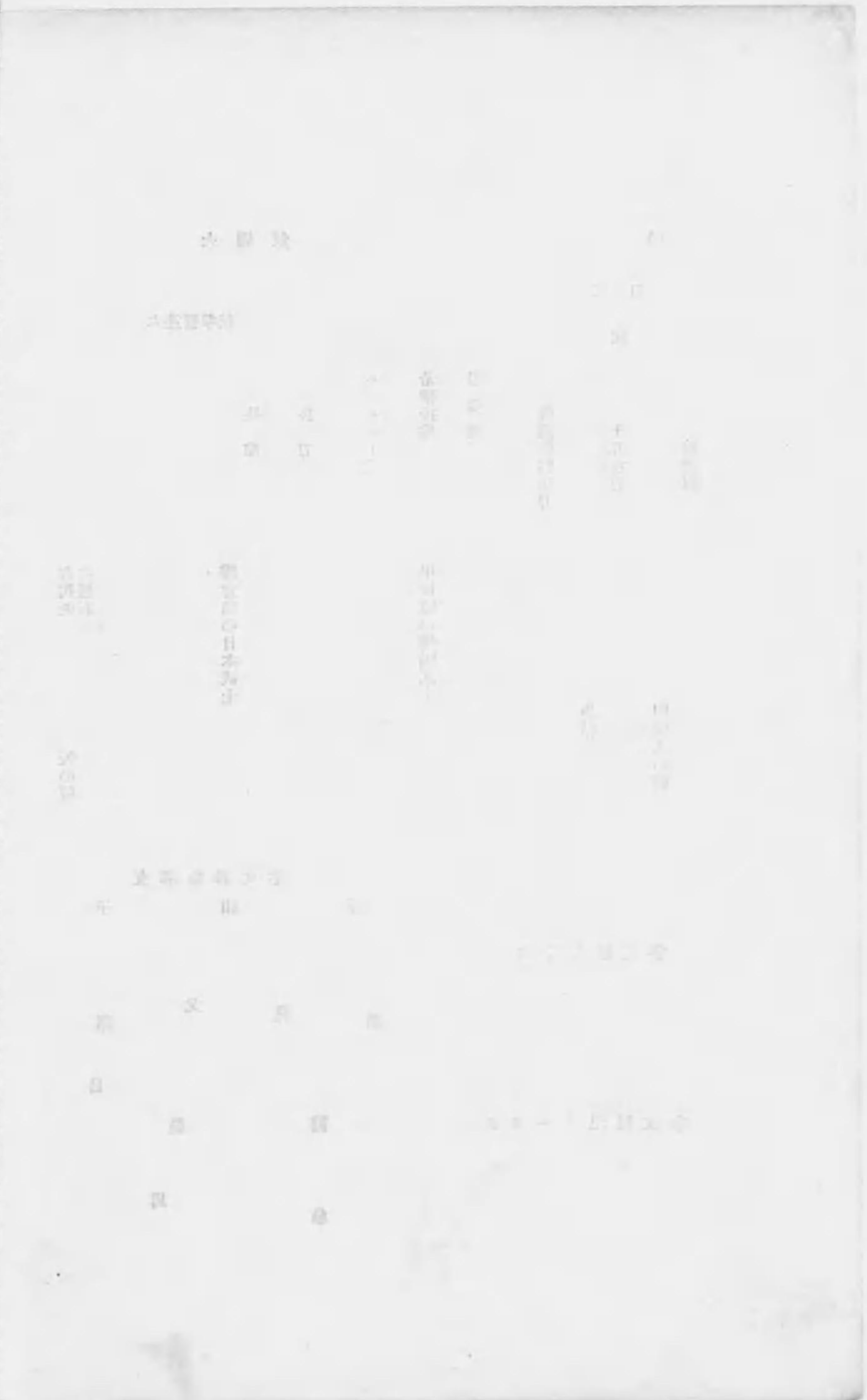
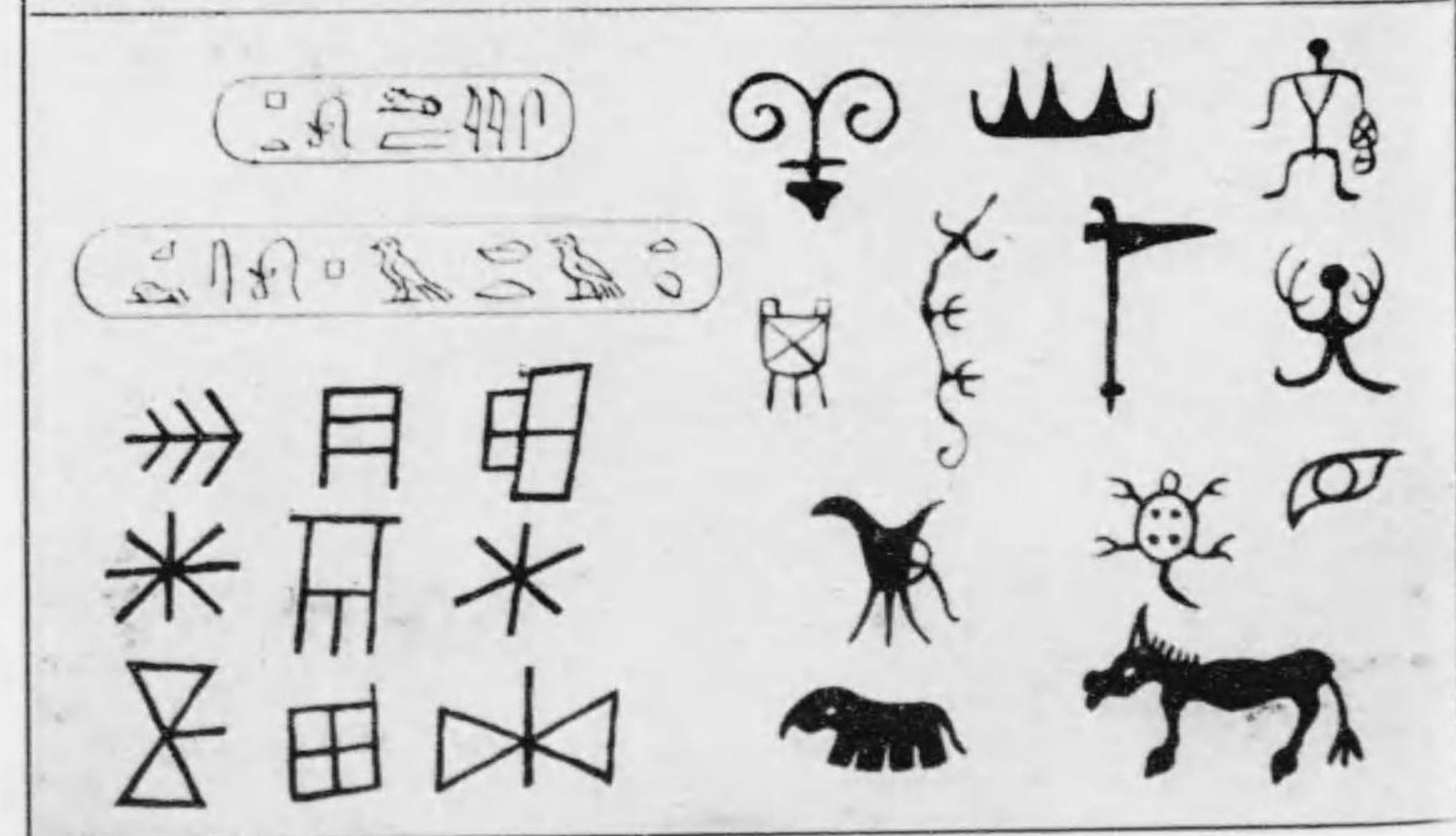
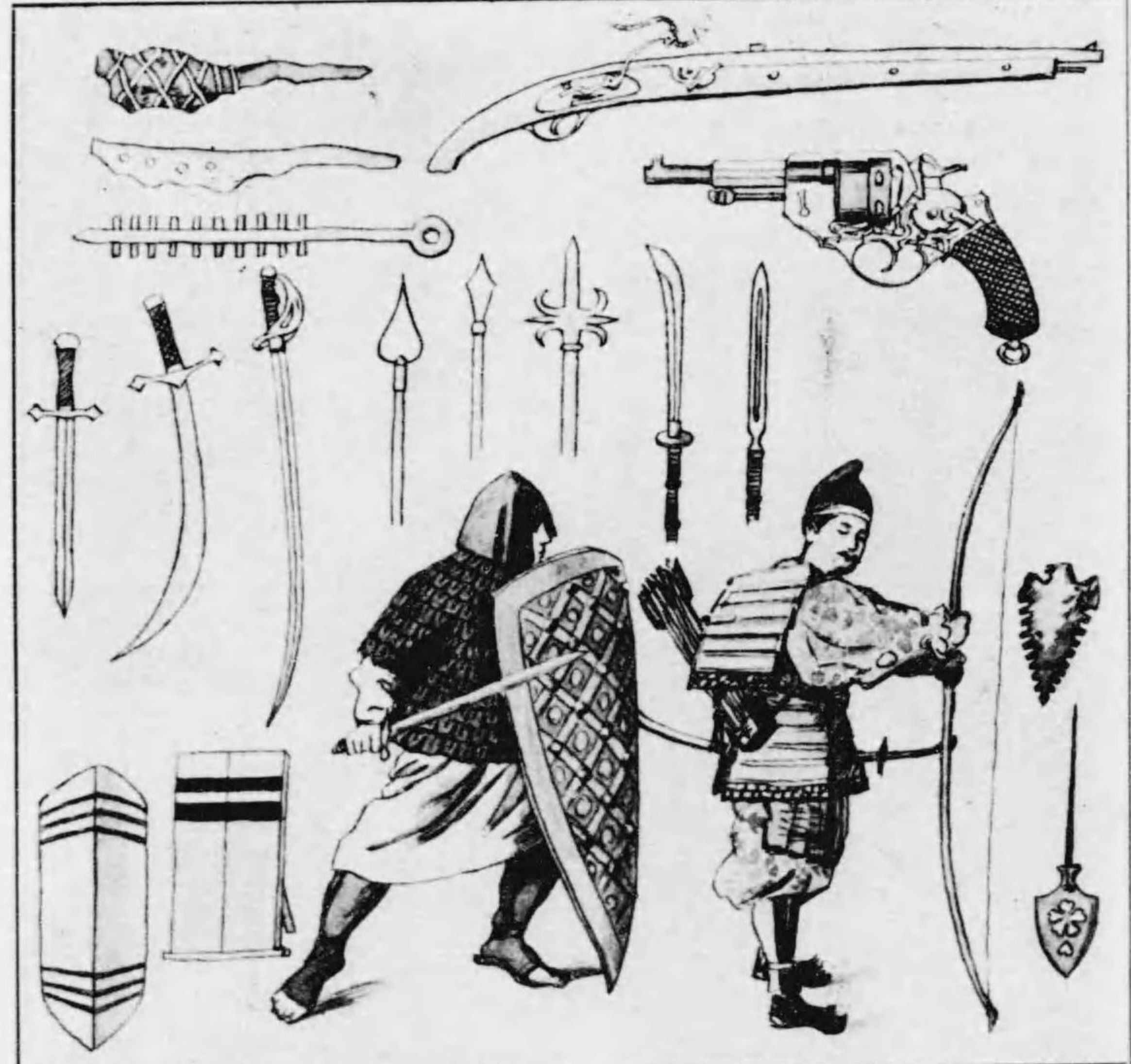
世態人情の觀察
 印度の興亡は哲學者の興亡の如く肉に死して靈に生きんとし、波斯の興亡は武士の興亡の如く、花の如くに開きて花の如くに散る。吾等は尙ほ後の希臘との關係に於て之れを見ねばならぬ。

第二節 西洋文明の淵源

位 希臘の地
 文明の故國は東洋の地である。併し之れを繼承して灼爛の美を呈せしめたのは、西洋の地である。而して其の先驅を爲したのは希臘國民である。希臘は歐羅巴の東、バルガン半島の南端にある東西百八十哩 南北二百五十哩、面積約二萬方哩に過ぎない小半島國に過ぎないのであるが、土地が文明の故國に近きと、海岸の屈曲甚しくして良港灣に富み、且つ海上島嶼多きとの地理的狀態は、夙に文明享受に便したので、其の初めは黒海及びカスピヤ海の北方より遊牧を業とし、水草を逐ふて此の地に來り、未だ野蠻の習俗を脱することの出來なかつたものであるが、其の近接せる諸國の文明發達するに従ひ、其の惠澤を受け、埃及の學術、フイニキアの文字等輸入せられ、此に



武 器 及 文 字 の 進 化



今日西洋文明の淵源を爲したので、其の民族はイオニア、ドリア、エオリア、アカイアの四に別れ、それが又二十餘の小獨立國に別れ、皆な其の都府の名を以て國名とし、世襲の王之れを統率して居つたが皆な同一の祖先より出で、同一國語を用ひ、同一宗教を信じて居つたから國民としての團結力は非常に強固であつた。殊に其の宗教は多神教の一種にして其の主要なる神十二あり、之れをオリンボス(Olympus)の神といひ、其の主神はゼウス(Zeus)とて諸神及び人類の父にして上天を主宰し、晝夜の別、四季の變等一切の天象を司るものとし、此の神の託宣はアポロウ(Apollo)神によつてデルフォイの殿堂に於て、人民に傳へらるゝものと信せられて、此の神殿を守り隣邦相救はんとて宗教同盟を造りて、國民聯合し、又た毎四年目にゼウス神の爲めに行ふオリンピアの競技は、全國民の集まりて文武の技を競ふものとして居つた。されば平時には同族相争ふこともあつたが、一旦緩急あるに至つては國民は一致して之れに當るので、此の關係を見ても同一祖先、同一宗教、同一國語が如何に人心を統一するに力あるかを見ることが出来ぬ。此の時代の希臘は文明の曙

光を受けたりとは云へ、未だ文明を以て許すことは出来ないで、人民は丘陵に住し、繞らすに城壁を以てして、其の國王たるものも手工に熟練し、料理に巧みなるを誇つた位で、生活は質素で、高貴の婦女も掃灑を自らしたので國とは云ひながら一大家族の大なるものに過ぎなかつたので、史上、國家として其の事蹟と見得べきはドリア、アイオニアの二族の勃興してからである。此の二族は同一祖先同一宗教のものであるが、其の性質を異にして、ドリア族はスバルタを建て、イオニア族はアテネを建て特殊の文明を發揮したので、スバルタは、武を以て建つてエオリア族を征服して之れを奴隸とし、紀元前九百年の末葉に出でたるリコルガス、尙武の氣象を以て國礎を定めんとし、憲法を制定して、凡そ男子の生るゝや、之れを公評に付して、其の成育するや否やを決し、其の羸弱なるものは平民に下し、其の強健なるものは、之れを育て、七歳より二十歳に至るまで、父母の膝下を離して、政府之れが教育の任に當りて、武術の訓練を爲さしめ、後、四方に派遣して平民の動靜を察せしめて治者たるの伎倆を養はしめ、三十歳に至りて兵士となりて結婚を許

スバルタ
人の生活アテネの
政治

され、六十歳に至るまでは、公共の食堂に飲食し、女子も男子の如く、體育を重んじて強健なる男子を生むを要とし、其の子の出陣に臨みても、「汝、楯を以て歸れ、然らずんば楯に乗て歸れ」との語を以て之れを送つたといふのは有名な話である。此の如き國風であるから、文學、美術、商業等のことは卑まれたが、アテネは之に反し、初めは王政であつたが、紀元前一千五十年の昔、ドリア族の來寇に對し國王コドロスの戦死するや、爾來國王を廢して王族中より一人の執政者を選びて之れを終身官とし、後、任期を十年に改め、更に貴族より選出することとし、人員を九人として任期を一年に改めて貴族政治を施して、貴族と平民との軋轢を招きしが、紀元前五百九十四年に至り賢者ソロン憲法を制定して金力の多寡によつて人民の階級を定め、後クリステネス出で、其の階級を廢し純然たる民主政治を施すに至り、尙武の氣象はあるが、又學問美術を愛し、盛んに航海通商に従事し、其の趣全然スバルタと同じからず。同じからずと雖も、同一祖先、同一宗教の民たり、紀元前四百九十三年波斯王大リオス一世、八紘に振ふの武威を以て希臘を征せんとし

て其の軍敗れしが、當時波斯の武は到底希臘の敵し得る所にあらず。ダリオス一世、使を遣はして希臘諸邦を屈服せしめんとしたるに、アテネ、スバルタは敢然として之れを斥け、其の使者を殺して敵意を表す。ダリオス大に怒りて六百の戦艦を以て希臘に迫る。アテネは之れを防ぎて撃退せしが、かく外患あり、希臘國民は一致せざるを得ず、アテネとスバルタとも力を協せて其の敵に當らんとす。波斯王ダリオスの子クセルクセス、父の志を繼ぎて二百萬の大軍、一千二百の戦艦を以て希臘に向ひ、水陸兩軍呼應してアテネに向ふ、時に之れ紀元前四百八十年。希臘の諸邦風を望んで降つたが、アテネ、スバルタは國家存亡の機此の一擧にありとして艱難敢て辭せず。小を以て大に當り、終に此の波斯の大軍を卻けた。此の戦争に於て尤も功のあつたのは、アテネ人であるから、アテネは終に外はペロポネソス以外の諸島諸市を糾合してデロス同盟なるものを造り、其の盟主となつて聲望隆々スバルタを壓し。内はペリクレスの如き文武の才を兼ね備へた聰明にして且つ高潔な大政治家が出て、市民の敬慕する所となり、其の言ふ所は悉く行はれ、行ふ所は

悉く賛せられて、紀元前四百四十四年から同四百二十九年までアテネをして黄金時代とならしめ、此に西洋文明の源を作つた。元來希臘の地は、其の氣候風土他國に勝れて美しいのであるから、自然を愛好するの心を有し、其の言語は流暢で他邦に勝れた優美の點あつて、夙にホメロスの如き有名な詩人を有し、其の作たる「イリアド」、「オデッセイ」の二篇は西洋最古の詩にして、少くとも紀元前九百年代に出でたるものと云はれ、次で全八百年代にはヘシオドスなる詩人出で文學は他の民族に比して、勝れて居るのであつた。これは其の風土、言語の外、オリンポスの競技に於て之れを獎勵したからでもあらうが、此の民族は頗る文藝の趣味に富んで、東方諸國の文明を輸入しても、單に之を模倣せずして、咀嚼同化して自家獨特のものとしたので、ペリクレス時代の前後には、文學に於てはアイスキロス、ソフォクレス、エウリピデスの如き悲劇の大家出で、人生の真相、人情の機微を穿ち、後世得て及び難きの傑作を出し、彫刻、建築に至てはペリクレスが、アテネの神を祀るが爲に建築せしめたるバルチノンの殿堂は、壯觀華麗を極め、其神像並に彫刻

は、名匠フィデアスの手に成りて、精巧古今に卓越せりと稱せられ、繪畫に於てはポリグノトスの如きもあつたが、唯だ美術の方面ばかり發達して居たのではない、此の民族は又智識に富んで居つて學術の方面を見ると、他の國民が未だ神話時代を去らず、天地の現象を以て一に神に歸したる時に當り、早くも智識的に思索を運らし、理を推して其の本原を究めんとしたる哲學起り、紀元前六百四十年頃にターレスあり、哲學の祖と稱す。爾來諸種の哲學大家出で、初めは客觀的に宇宙を觀察して物質的に宇宙の本原を究め、後に有名なるソクラテス出るに及びて主觀的研究に入る。此のソクラテスは、支那の孔子と併稱せらるゝ聖者にして、其の門にプラトーンあり、理論幽遠、思索精到、後世之れを宗とし、其の門より出でたるアリストテレスは、科學の祖と稱せらるゝので、其の他歴史にはヘロドトスありて之れ亦「歴史の祖」と云はれ、醫術にはヒポクラテスあり「醫術の祖」と云はれるので、今日に於ける一切の學術は實に希臘を以て祖と爲して居るのである。勿論、希臘の此の文明には、當時文明の先進國たる埃及、印度などより學び來つたものゝあるに

は相違ないが、希臘人は之れを以て其の國民性の根幹を培養して、終に此の精華を開かしたので、希臘の文明は實に百花其の妍を争ふの美觀を呈したのである。而して此の文明の中心となつたものは、唯だ武これ尙ぶスパルタ人にあらずして、アテネ人であつたことは云ふまでもない。

話は少し前後した所もあるが、かくアテネが文華の中心となりて他の諸邦に雄視するに當り、其の生活は華美となり、演劇は盛んに行はれ、其の興行は公共の費用を以て維持せられ、宴會、談話會の如きことは屢々行はれ、樂手、藝妓、輕口の徒も重んぜられ、一般婦人は家内に閉塞して専ら家事に従ひ、其位置は頗る低かつたが、宴會に出る藝妓は交際場裏に幅をきかして居つた。かくてアテネの文弱に流るゝに當り、競争國たるスパルタは別にペロポネソス同盟を作りて、アテネを中心とするデロス同盟に當り、終にアテネと相戦ふに至りて、此に有名なるペロポネソス戰役となり、二十八年間互に勝敗ありしが、スパルタは波斯の援助を得、紀元前四百〇四年に至りて、アテネを降し、此に於てアテネはスパルタの爲めに一時は其民主政を破壊せ

られ、後、之を恢復したが、さなきだに文弱に流れしアテネ人の品性は、いよく墮落して輕佻浮薄となり、其文學に於ても眞面目なる悲劇は行はれずして、嘲笑を事とする喜劇、時を得、彫刻もペリクレス時代の如き雄渾なる者は衰へて纖巧なる者となり、其哲學は詭辯派盛んに行はれて、之に反對した大聖ソクラテスの如きは、却て毒殺せられたのも此時である。一方、希臘聯邦の覇權を掌握したスバルタは、戰勝の餘威に誇りて、内は國民驕奢に流れ、質素堅實の氣象を失ひ、其特有たりし市民の平等は破れ、貧富の懸隔甚しく貧しき貴族は共同食卓の費だも支辨する能はざるに、富める貴族は共同食卓の外に、私邸に於て美食するに至る。外に對しては暴横を極めて、聯邦を壓し、貴族を助けて平民を苦めたものであるから、聯邦漸くスバルタを疎んず。此時に當りて、スバルタ、隙を波斯と開き、軍を出して之を攻む。波斯即ち金錢を希臘聯邦の間に散じてスバルタに反かしめ。アテネをも招きて對スバルタ同盟を作りてスバルタの軍を破り、終にスバルタをして暴威を振ふ能はざるに至らしめた。此一舉に於ても、如何に希臘人の品性が墮落したかを見

ることが出来る。曾ては舉國一致して、外敵波斯に對したものが、今は一は其の援けを得て他を討ち、他は又其の誘引に應じて一を責め。民族の一致、漸く弱く、希臘は既に其の全盛期を過ぎた。後、スバルタの權威を殺ぎて、セーベ一時全國に覇を唱へたが、それも東の間で、國民性を失ふた希臘各邦は次第に衰微に赴きて、萎靡として振はざる間に、彼等が蠻族と目したる北方マケドニアは勃然として起つた。

マケドニアは希臘の北方にあり、西はヒンドス山脈を以てイリリアと接し、北はモエシアに隣り、東はストリモン河を以てトラキアに接し、西北一帶は高山峻嶺なれど、中部は高原平野にして東に赴くに從ひ、漸次低下してエーゲ海に達するのであるから、早くから舟楫の便によりて希臘人と交つて居つたが、希臘人の如き市府的生活を營まずして、村落に住みて農業、漁獵を營み、其の性粗野にして、文學美術を有せないから、アテネの如き都人士には北方の荒夷として輕侮せられて居つたが、歴代の王家意を注ぎて希臘の文物を輸入せしかば長足の進歩を爲し、フィリポス王の如きは幼時質となりて當時覇

マケドニアの勃興

を唱へたテールベにあつたから、親しく其の兵制戰略を學び、歸りて王位に即くや、兄弟壻に閱めける希臘を統一せんと志を起し、紀元前三百五十五年中部希臘なるフォキス人、希臘人の祖廟たるデルフォイの神領を掠め、希臘の宗教同盟會は之れに課するに罰金を以てし、テールベをして督促の任に當らしめしも應せず、却て神寶を奪ひ、神庫を開きて軍資に充て、之を以て大に備兵を募り、アテネ、スバルタの如きも之れを援くるを見るや、フィリポは機乗すべしとし、直に神聖戰役を起してフォキスを伐ち、神廟を恢復して宗教同盟會の一員に列し且つ其の盟主となりて、勢威頓に揚る。既に宗教の盟主となる、彼れが希臘統一の基礎は成つた。これより南下して將にアテネに入らんとす。アテネの雄辯家デモステネス、其の野心を看破して三寸不爛の舌頭、熱誠を籠めてフィリポ反對の演説を試み、終にフィリポ反對の同盟を作らしめたが、既に士氣沮喪せる希臘の此の新進の國に當るべくもなく、デモステネスの雄辯を以て成りたる聯合軍も、之れを統率するの將なく、殊に其の訓練の點に於ても遠くマケドニア軍に及ばなかつたから、紀元前三百三十

八年を以て、希臘聯邦は悉くマケドニアに屈服した。此に於てフィリポは希臘聯邦の霸權を握り、更に舉國一致の希望なる波斯征討を企てたが、事未だ成らずして弑逆の禍に遇ひ、其子アレクサンドル、英邁にして大材あり、夙に碩學アリストテレスに師事して文學を修め智略又凡ならず、其王位に即くや、父の志を繼ぎて、大業を成さんとし、先づ希臘聯邦の己れに服せざるものを威歴し、紀元前三百三十四年、ヘレスポンドを渡りて小亞細亞に入り、連戦連捷、馬頭を轉じてシリアの地を略し、南下してフィニキアを平定して更に進んで埃及を服し、波斯の羽翼を殺ぎて、直に其の本土を衝き、波斯王ダリオス三世と戦ひて之れを破り、ダリオス三世は逃れて其臣下の爲めに弑せられ、波斯全く平定し、希臘人多年の素志を達し、尙ほ波斯人の宿意たる印度征討を企て、其の人心を得んとし印度に進んだが、これは本國の將士に不平があつて其の目的を達することが出來ず、僅に西北の一部を服したのみにして軍を旋した、かくアレクサンドルは前後僅に十年にして大業を遂げ其の版圖は、今や亞細亞、亞弗利加、歐羅巴の三大陸に亘りたる未前の大帝國

となつた。これ實に世界史上の一大事件で、アレクサンドルの此の偉業によつて東西文明の融合は計られ、これまでは一局部に限られた文明が漸次世界的となる曙光を放つた。しかも唯だこれ遠征に於ける自然の結果でなく、アレクサンドルは大帝國統一の手段として其の策を執つたので、大王は自ら波斯王ダリオス三世の繼承者の地位に擬し、ダリオス三世を弑せしものを罰して三世の爲めに仇を報じたりと稱し、三世の女ステケラを娶りて皇后とし、朝廷の儀式は波斯風の莊嚴を採り、八十人の將校に波斯の貴婦人を配して其の夫人たらしめ、マケドニアの兵士一萬人をして波斯の婦女を娶らしめ、且つ波斯の子弟三萬人を選んで、之れに希臘風の武藝教育を施し、首府をバビロンに置きて東西文明の鎔鑄を計り、古來民族衝突の因たりし宗教に對しては、自由主義を取つて、何れの神をも平等に禮拜し、何れの宗教をも平等に尊重し、希臘の學問美術工藝を、征服したる諸國に傳播し、印度河よりユツフラト河に至る通商の便を開き、且つ各地に大小の都市を建て、沿岸に新港を開きて商工の發達を計つた。此大王をして世に在ること長からしめたなら

東西文明
の融合

シリア

ば、東西文化の上に著しきものがあつたであらうが、不幸にしてアレクサンドルは紀元前三百二十三年、三十三歳の壯齡を以て逝き、此の大帝國は終に四分せられ、又此の雄大なる版圖を見ることが出来なくなつた。が、尙ほ其の面影を存して東にあるシリアは、最も大に、一時はアレクサンドルの征服した印度の西北部を領して居つたが、前にアレクサンドルの陣中に俘虜となつて頗る希臘の風に通じたるチャンダラ、クブタ(旃陀羅掘多)は、起りて、當時印度に雄視して居つたマカダ(摩竭陀)國のナンダ朝を亡ぼして都をバトナに建て、シリアと和して印度河以東の地を掩有して威を全印度に振ひ、其の孫アンカ(阿育王)父祖の遺烈を受けて、四方を征服し、深く佛法を信じて其の興隆を計り、布教僧を國內及び諸外國に出して其の弘通を計り、西はバクトリア、東は馬來半島、南は錫崙に至り、シリア、埃及、マケドニアの地にも赴かしめたといふ。こも亦たアレクサンドル間接の結果とも見ることが出来る。其の他カスピヤ海の東南部には波斯の文化を繼承したるバルチア(安息國)起り、其の東隣には希臘の文化を襲用したるバクトリア(大夏國)建つて、シリア

の領土は機減縮せられて、萎靡振はず、アレクサンドル帝國分裂の一部たる埃及王國は、最も能く希臘の文化に浴して、大帝の建設したるアレクサンドリアは地中海と紅海とを連絡する交通の衝に當つた者であるから、宗教商業學術の中心として東西の文明を收め、國王プロトレマイオス、三代相繼ぎて藝を奨励せしかば、數學、天文、物理等は他に比類なき發達を爲し、其の圖書館の如きは、東西の名著を網羅して居つたが、プロトレマイオス三世逝きて後主凡庸にして國威振はず。マケドニアの王國も亦疲弊して希臘國民も氣力を失ひ、アレクサンドル大帝の版圖は悉く羅馬人に征服せらるゝことになつた。

かくアレクサンドルの雄圖は夢と消えたが、希臘半島の西なる伊太利半島に起りし羅馬は、再び其雄圖を地上に現する活動を開始した。伊太利半島は北はアルプス山脈を以て大陸諸國に接し、東西南の三面は皆な海に面して居るが、アペニン山脈北より東南に連りて半島の脊梁を爲し、其支脈東西に分岐して平原地少く、其海岸も港灣少く島嶼稀れで、海國民としては活動し難き

國であるが、希臘の如く國內山脈縦横に交叉して區劃せらるゝとなく、大體に於て統一し易き地である。此半島の南部には夙に希臘人移住して居つたが、中部には同じくアールヤ民族であるが早く希臘人と分れた伊太利民族が居つた。此伊太利民族の一部たるラテン人は、チベル河の左岸に蕃殖して三十個の小都市を設け、各市は小丘上に牙城を作りて自ら衛りしが、其中なる羅馬は紀元前七百五十三年の頃、ロムルスなる者出で他の都市を併せて漸次發達してラテン同盟の主となり、此に國礎を開いたと傳へらる。政體は王政であつたが、紀元前五百九年頃より共和政體を組織し、二人の統領を選びて一年の任期を以て之に國政を委ね、國家危急の時には、一人の總統官(Dictator)を選舉し、六ヶ月間之れに無上の權力を付するとして居つた。併し是等は皆な征服者たる貴族の權に屬して、被征服者たる庶民は其の壓抑の下にあつたが、此の民族の自由を愛する、長く其の壓抑の下にあるを欲せず、しばしば貴族に反抗して其の權を伸べんとし、紀元前四百九十四年には、庶民の中より二人の護民官を選舉して政府の命令を取捨するとし、別に民會を開きて貴

自由平等
の思想

族會に對し、十二銅標を作りて成文法律を定め、後に護民官リキニウスの法案出で、貴族と平民とは平等の權を得ることとなつた。此の自由民權の思想は、西洋文明を一貫せるもので、決して等閑視することは出来ない。かく貴族と庶民との軋轢の間にも、羅馬は伊太利統一の方針を以て進み、終に紀元前二百七十六年に於て、希臘軍を破りて半島を統一し、更に海上權を得んとして對岸亞弗利加の地にありて地中海上に雄視し植民通商の權を壟斷せるカルタゴと兵を交へ、紀元前二百六十三年より同百四十六年に至るまで、有名なるボエン戰役を續けて終に之を略し、一面には同百六十八年にマケドニアの王國を亡ぼし、同百九十二年シリアと戰ふて小亞細亞のタウロス山以西を割かしめ、國威大に振ひしが、此の時は已に羅馬魂の消耗しかつた時で、羅馬魂の尤も其の美を示したるは、これら戰役の中で、正義の爲めには死も且つ辭せざる氣風もあり、且つ自由を尊びて、事を輿論に決したがため辯論を貴ぶ風があつて、雄辯術の如きは頗る發達したのであるが、戰後、財貨の流入と共に人心漸く腐敗し、官吏は賄賂を貪りて豪奢を極め、富豪は富を恃みて

羅馬大帝

私利を營み、昔日尙武の氣象は其の跡を止めず。漸次に貧富の懸隔甚しくなりて、内亂頻りに起りしが、國土の膨脹は之れに止らずして、西はイスパニアより東はシリアに及び、稀世の英雄ケーザル出るに及びて、ブリタニア、ゲルマニアを取り、盛んに人材を登用し、財政を整理し、且つ法制兵制を改め、地方に無數の殖民地を拓きて貧民を移住せしめ、大土木を起し、學問美術を奨励し、太陽曆を埃及より輸入して曆法を改正し、大に羅馬の文化を盛ならしめたが、自ら終身大都督の號を受けて國家の大權を總攬せしかば、國人不平の徒は之れを以て民權自由を害する者とし、終に之れを議事堂に刺殺した。ケーザル死して羅馬の領土は三分せられ、東部はアントニウス、西部はオクタウィアヌス、亞弗利加の地はレビヅス之れを領せしが、レビヅス先づ倒れて、世はオクタウィアヌス、アントニウスの二人となりしが、後アントニウス、埃及女王クレオパトラの色に迷ひて其の領土を彼れに與へ、且つ其の妻なるオクタウィアヌスの妹オクタウィアを離婚せしかば、オクタウィアヌスは、大に怒りて、之れを羅馬の國敵とし、逃ぐるを追ふて埃及に入り、アントニ

ウス、クレオパトラ相次で自殺して、埃及亡び、大權は悉くオクタウィアヌスに歸して、アウグスツス(Augustus)即ち尊大の義を有せる稱號を受け之れより羅馬は帝政となつた。

此の時に當つて羅馬の版圖は、東はユウフラト河より西は大西洋に、南は亞弗利加のサハラ沙漠より北はアルプス、バルガンの兩山脈に及び、歐羅巴大陸にてはライン河以西のゲルマニ族を平げたのであるが、帝は更に其の領土を廣め、東は亞刺比亞の一部を略し、西はドナグ河畔を征服し、此にアレクサンドル以後の大帝國を作り、内は勵精治を圖り、且つ文藝を奨勵し、宏壯華麗なるパンテオンの殿堂を建築し、羅馬の祖神たるアポロの宮殿内に大圖書館を設け、道路を修理し、制度を完備して羅馬市をして眞に世界の都府たらしめ、通商貿易の發展を計り、爾來五帝相承けて領土は次第に廣められ、文運は次第に發達して羅馬文明の黄金時代となつた。由來羅馬の家庭は家長權、著しく發達して子弟は財産の如くに取扱はれ、結婚したる男子と雖も、其の家長の爲めには死も亦辭することの出來ない風であつたが、家長は又子

羅馬人の
生活

弟の教育に心を勞し、其の學校の課目は普通には十二銅標の暗誦や文法、修辭、演說等を主要のものとし、是等の教科を卒へたるものには更に深遠の學に進ましめ、婦人の地位は高からざりしも、結婚後には多少の自由を得て家政の事に當りしも、夫は非常の權利を有して自由に其の妻を離縁するを得たといふのであるから、其の境遇も想ひやらるゝのである。一般人民の娛樂としたのは演劇、競馬并に格闘の類で、此の格闘も初めは世界各國より集れる猛獸や奴隸を以て行はしめたが、後には武士も亦現はるゝに至つて非常に盛なるものであつた。尙ほ羅馬人の生活を見るに忘るべからざるは沐浴を以て非常なる快樂とし、公衆の浴場を設け、此に多くの時間を費したることである。國は廣くして世は平なり、羅馬の文明は普く諸方の粹を集め、殊に希臘の文藝は全く之れを吸収して別に一機軸を出し、繪畫、彫刻、文學、哲學、又羅馬獨得のものを示したが、殊に注意すべきは其の法律で、これも其の源は希臘に得たのであらうが、之れを研究して學術的ならしめたのは羅馬人で、廣き版圖内に多種異様の人種を包容せる羅馬は、其の秩序を保たん爲め自然の

羅馬は湖水の如し

基督教

必要に迫られ、多くの學者を生じ後に東羅馬皇帝ユスチニアヌスをして有名なる羅馬法典を編纂せしむる素地を成した。史家ランケいふ、羅馬は湖水の如し、古代文明の小流を集めて之れを大成し、更に流れて歐洲各地を灌漑すと、羅馬の文明は實に此の如きものであつた。此の羅馬をして更に他の方面よりして世界的事業を爲さしめたるものは、ヘブライ民族によりて養成せられたる猶太教を改革して別に新しき信仰を唱道したる基督教である。基督教の祖イエスは紀元前四年に生れたのであるが、其の説時人に容れられず、紀元三十二年、イエルサレムの郊外に磔殺せられたが、其の遺弟は師の志を奉じて、此教を萬國に傳道せんとて、ヨハネ、ペテロ、パウロ等各地に傳道し、殊にパウロの如きは世界の都府たる羅馬に入つて其の教を弘めしが、羅馬帝は其の他神を排して、己等の奉ずる神のみ眞神とする教義を厭いて、大に迫害を加へ、ネロ帝の如きは其の徒を虐殺してトラヤヌス、アウレリアヌスの二帝も亦之れが防遏に力を盡くし、デオクレチアヌス帝の時には命を下して悉く會堂を破壊し、一切の經典を焚き、嚴刑を以て其信徒を罰せしが、迫害

いよく大にして、信仰いよ／＼強く、信徒次第に増加し、三百二十三年コンスタンチヌス帝立つに及びて其の禁令を解除し、之れを以て羅馬の國教とし羅馬、アレクサンドリア、コンスタンチノブル、アンチオク、イエルサレムの各地に大教會を置き之れが弘通を助け、終に世界的宗教たらしめた。世界的國民、世界的宗教、これ實に結構なことであるが、その爲めに羅馬固有の愛國心の失はれて來たことも事實である。これより先き羅馬の國威は漸く衰へ、東の方バルチアは勃興して其の邊境を侵し、北の方ゲルマニ族はライン河に逼て其の間隙を窺ひ、ドナヴ河畔にはゴス人襲來して屢々兵を交へ、幸に侵さるゝには至らざりしも、デオクレチアヌス帝は其の版圖の廣大に過ぎて到底一人を以て統治し難きを見て、國を東西の兩部に分ち、親ら東部(希臘・マケドニア、埃及、小亞細亞)を管し、將軍マキシミアヌスをして西部(伊太利・亞弗利加)を管せしめたりしが、帝の死後内亂起り、皇帝と稱するもの五人を出せしが、コンスタンチヌス之れを統一し、帝都の西に偏せるを見て都をボスポロス海峽に臨めるコンスタンチノブルに移し、帝死して又内亂を生

じ、三百九十四年テオドシウス帝全國に君臨せしが、其死に際して國を二分し長子アルカヂウスをして東部、次子ホノリウスをして西部を領せしめ、これより羅馬は全く東西に分れ、其西羅馬帝國もゲルマニ種族の侵入の爲めに苦められ、四百七十六年西ゴート人の爲めに亡ぼされた。併し羅馬は亡んだが、其の羅馬が極力弘通を助けた基督教は亡ばない、否、寧ろ之れより偉大の勢力を歐洲各國に及ぼすに至つたので、西洋の文明は希臘の文藝、羅馬の法律とヘブライの宗教によりて醗酵せられたものと云ふてもよいのである。

第三節 支那文明の一瞥

宇内は一家、打てば響くは世界の大勢で、西羅馬は何故に亡びたかといへば、ゲルマニ族の侵入である。ゲルマニ族は何故に羅馬に侵入したかと云へば、同民族の蟠居したる北方にモンゴル族の一派たるフン人種の他のモンゴル族に迫まられて、西に轉じてアールヤ人種に屬するゲルマニ族の域内に入り、先づ東ゴート西ゴートに入り、西ゴート族の堪ふる能はずして羅馬の許

可を得てドナウ河の南岸に移住したのに初るので、此のフン族は漢に所謂匈奴の一族の漢及び南匈奴の爲めに撃破せられてカスピヤ海の北に移り、漸次ヴォルガ及びドン河間の曠野を略取したものであるから、西に於ける羅馬帝國と東に於ける支那帝國とは面貌相接せざれど、知らず識らず關係し來つたのである。されば吾等は此の機會に於て眼を轉じて東方亞細亞の支那帝國を觀察するを便とする。

支那は埃及、バビロニヤ、印度等と共に世界最古の國で、今を距る五千年の昔、漢民族、西北方より來りて此の地にありし苗族其の他の人種を逐ひ、黄河の沿岸に部落を作つたので、其の酋長の中に燧人氏は民に火食を教へ、伏羲氏は佃獵を傳へ、神農氏は農耕の道、醫藥の法、さては交易の事をも教へたと傳へられるのである。其後、黄帝出で、四方を征服して支那帝國の基礎を建て、政治的組織を定め、其の臣蒼頡をして文字を作らしめたといふ。黄帝の後、顓頊、帝嚳の二帝を経て、帝堯あり、一年を十二ヶ月三百六十六日に分ち、閏月を置いて四時を正したといひ、堯、位を舜に譲りて制度大に

備り、今に至るまで支那人の理想とする太平の治を致したと傳へられて居る。舜、禹に命じて洪水を治めしめ、且つ位を之れに譲りて國を夏と號し、禹の後十七傳して桀に至りて淫虐を事とし、驕奢に耽り、勇を恃みて法を修めず、終に殷の湯王の爲めに亡ぼされ、殷も亦世を保つこと六百四十四年にして紂王に至り、暴虐無道、終に周の武王の爲めに亡ぼさる。これ恰も西曆紀元前一千百十八年の頃である。此に於て周天下を統一し、封建の制を布きて中央の地、方千里を畫して王畿として王官の采邑に充て、諸侯を公、侯、伯、子男の五に分ち、公侯には六百里の地を與へ、伯には七十里、子男には五十里を與へ、五十里以下のものは附庸と稱して之れを諸侯に隸屬せしめ、且つ田制租税法を定め、法律を制し、兵制を新にし、天子は六軍七萬五千人を有し、公侯は三軍、伯は二軍、子男は一軍としたる等秩序整然たらしめ、教育には大學小學の設あり、大學は貴族並に地方選拔の士、十五歳以上二十歳までのものを入學せしめて禮、樂、射、御、書、數の六藝を學ばしめ、小學は州(即ち三萬二千五百戸)に序あり、黨(五百戸)に庠ありて、普通人民の子弟、八歳よ

周の制度

春秋戰國
と文藝

り十四歳までのものを收めて、簡易なる學科並に洒掃應對の道を學ばしめたので、教育の設備は、頗る他に優るものがあつたのである。武王の子成王、成王の子康王の世は周の極盛時代で、四十餘年の間全く刑を用ひなかつたといふほどである。康王以降國威漸く衰へて諸侯專横となり、四方の蠻族も亦中國を侵さんとし、宣王之れを討ちて中興の業を樹てたが、其の子幽王寵妃褒姒に溺れて政を失し、王弑せられて平王起ちしが、此の時には蠻族の勢ひ猖獗に赴き、終に都を東に遷すに至り威漸く振はず、諸侯内に争ひ夷狄外に寇して春秋戰國紛亂の世となり。周の初め千八百と稱せし諸侯、大は小を併せ、強は弱を挫きて十分の一に減す。此に於て諸侯の有力なるもの出で、内は王室を安んじ諸侯を統率し、外は夷狄を攘はんとて天下に號令する覇者なるものを生ず。これを春秋の世と云ひしが其の後、王室益々式微し、諸侯一人の尊王を説くものなく、攻伐これ事とするに至て、戰國の七雄を生ず。今の陝西、甘肅、四川の地に秦あり、湖北、湖南、江蘇、安徽、浙江、江西並に河南の南部の地に楚あり、直隸の北部遼東までの地に燕あり、山西の北

半、直隸の南西に趙あり。山西の一部、河南の中部に韓あり、山西の南部、陝西の東部、河南の北部に魏あり、山東の地に齊あり。各武を練り文を興して天下に王たらんとし戦亂止む時なかりしも、其の間に文學大に起りて支那に於て殆んど空前の盛觀を呈した。これは王室上に衰へて諸侯下に争ひ、思想の束縛解けて言論の自由となり、憂世の士社會の秩序を匡救せんとして其の所説を公にして天下に遊説を試み、諸侯も亦之れに耳を傾けたからで、紀元前五百五十一年、稀世の聖人孔子出で仁を以て人道の大本とし、心を正し身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平にするを説き、列國を周遊して教化を施し、其の學統を繼ぐものに孟子あり、仁義を重んじ、功利を輕んずるの説を以て諸方に遊説した。此の孔孟の學説は儒學と稱して支那思想界の大勢力となつたものである。之れと前後して老子あり、全く儒家と其の説を異にし、仁義禮樂を排し、無爲自然を以て主義としたので、其の門に莊子あり、是非を齊うし死生を一にする道を説き、後には民間信仰と混じて道教として勢力を有した。其他孫子、吳子の如く兵法を説くものあり、商鞅、韓非

儒教

子の如く法術を説くものあり、或は鬼谷子の如く縦横の術を説いて外交を談ずるものもあつた。

前きに擧げた七國の中、秦は初め夷狄を以て目せられて中國の會盟に與かることが出来なかつたが、孝公、商鞅の説を用ひて大に富國強兵の術を講じ且つ國、尤も優勝の地にあるが故に終に六國に雄視するに至つた。此に於て洛陽の人蘇秦は六國を説きて合従して秦に當らしめんとし、其の策略ほ成る。秦大に懼れ魏の人張儀を相とし、其の策を以て六國を説いて秦に付かしめんとし、別に連衡の説を立て六國或は合し或は離れしが、後終に秦の爲めに併呑せらる。秦王此に於て自ら始皇帝と稱し天下を統一し、海内を分ちて三十六郡とし、更に之れを縣に小分して地方行政并に兵馬の權を掌らしめ、權力を中央に集め、民間の兵器を收め、且つ學者横議して人心を動かすことを厭ひ、博士所藏の外、天下の詩書を焼き、咸陽の儒生四百餘人を坑殺し、支那の文學は此に於て一頓挫を來したのである。始皇は此の如き高壓手段を以て内政を整理すると共に、北の方は戰國時代より屢ば中國に侵入する匈奴即ち

秦の始皇

フン人種の一部を伐ち、臨洮より遼東に至る延長八百餘里に互りて高さ二丈五尺、厚さ一丈五尺の長城を築かして之れを防ぎ、南の方、百越を征して安南に及び、大に領土を擴張し、盛んに土木を起して華麗の宮殿を設け驕奢を極めしが、驕るもの久しからざるの理は古今一轍で、始皇死して二世皇帝立つに及び、群雄蜂起して楚の項羽、沛人劉邦等の手に亡ぼされ、劉邦漢中の王となつて項羽を破り、都を長安に移して天下を統一す。之れを漢の高祖とす、漢の天下に至つて支那民族は益々發展し、武帝の世には北の方匈奴を征して遠く之れを北方に追ひ、南の方諸越を經略して東の方は朝鮮を服し、西の方は使をバクトリアを亡ぼして國を建てたる大月氏國に遣して匈奴を夾撃せんとし、内は秦の書を焚き、儒を坑にしたる後を承け、殊に儒教を尙びて大學を設け五經博士を置きて文學勃然として起る。武帝の後、六傳して平帝に至り王莽位を篡ひて國を新と改め、周制を復古して民心を得しが、僅かに十五年にして亡びて後漢の代となり、光武皇帝、英邁の資を以て王莽の弊政を矯め、名節を獎勵して専ら内治を圖り、明帝、章帝相繼ぎて天下太平に、

四境も亦た内附して敢へて背くものなく、南匈奴は早くも其の保護を請ひ、北匈奴は明帝の時に追はれ、和帝の時に擊破せられて北方に走り、西域諸國も多く内屬し龜茲、莎車、大月氏の諸國を服し、漢威はカスピヤン海の濱に及び、安息即ちバルチアを界して羅馬と相接するに至つた。後漢の桓帝の時は、羅馬は帝政の全盛期にしてマルクス、アウレリウス、アントニヌス帝(漢に所謂太秦王安敦)は安息を破り、ペルシャ灣頭の地を得、使を漢に通じた。これ實に紀元百六十六年の頃である。試みに空飛ぶ鳥となつて當時の世界を下瞰せんか、東には漢の大帝國あり、西には羅馬の大帝國あり、漢の天子は歴代儒を貴び、道教を敬し、文藝大に起り、羅馬には賢相繼ぎてストア哲學は節義の氣風を傳ふ。殊に其の大浴場に娛樂に耽る羅馬市民が裝飾に用ふる絹は之れを支那より仰ぎ、漢人の使用せし象牙は羅馬領より得る所ありしといふに至つては、宇内一家の感を深からしめざるを得ない。中間に介在したるバルチアは國威大に衰へたれど、更らに南の方印度は、これより先き紀元前三十二年の頃、佛教の興隆に力ありし摩竭陀國は南印度より起れるアンド

ラ朝の爲めに併せられて波羅門教、勢を得て佛教徒は北に奔りて大月氏國に投じ、大月氏の迦藏色迦王佛教を保護し、馬鳴、龍樹等の高僧、相繼ぎて之に赴きて、北印度闍賓の地は佛教隆盛の中心となる。後漢の明帝、使を大月氏に遣して佛教を求め、佛教これより支那に行はれ、印度の文物も亦た支那に入る。此のときに當りては大月氏も亦支那に服したので、亞細亞の南にアンドラ朝の摩竭陀に君臨するあるの外は、勢威を有するものは世界全く支那と羅馬とあるのみの有様であつた。勿論我が日本は敢て他の勢威に服せず、東海の表に屹立して居つたが、それは未だ人皇十三代成務天皇の頃で、世界の大勢に干與するほど發達はして居なかつたのである。が、其の後、幾もなくして神功皇后の征韓となつて、其の勢威は支那の邊境に及んで來たのである。

後漢の天下は百九十餘年にして亡び、支那帝國は三分して、魏の曹操、蜀の劉備、吳の孫權互に權を争ひしが、魏遂に之を一統し、其の魏は又其の臣、司馬炎に逼られて位を禪りて、世は晋となりしも、此の時に當りては匈奴、

羯、鮮卑、氐、羌等の四方の蠻族、中國に侵入し、漢民族の天下將に覆らんとし、匈奴の俊傑劉淵起つて漢王と稱し、其子聰の時に至りて全く晋を亡ぼして楊子江以北の地を領し、其の他の諸族皆な各地に割據して十六國の多きに分裂した。これ恰もゲルマニの諸族のフン人種に追はれて羅馬に入り、羅馬初めは西ゴス族のアラリックの蹂躪に遇ひ、後にはフン王アツチカの襲來を受けたのと同狀態で、時も亦相距る遠からぬ頃であつた。即ち劉聰の晋を亡ぼしたのは紀元三百十六年で、アラリックの羅馬に入つたのは四百〇一年、アツチカの入つたのは同四百四十一年である。西晋亡びて東晋立ちしも、もとより統一の業を遂ぐる能はず、東晋亡びて支那は南北の兩朝に分れ、南は晋の禪を受けたる宋に初りて齊、梁、陳と次第し、北は後魏ありて、これ亦東西に分れたが、隋の文帝に至つて此南北朝を平定し、漢末より分れに分れ、晋一たび一統せしも亦分れに分れたる支那帝國をして一統の下にあらしめしが、其の子煬帝、驕奢に耽りて、盛んに土木を起し宮室を壯麗にし且つ運河を造り、兩岸に楊柳を植ゑ、帝は龍舟に乘じ、皇后以下群臣之れに従ふ

とか、或は天下舞樂の伎を一堂に集めて、清夜の宴を張るなどといふ風流をやつたものであるから民心離れ、天下大に亂れて終に位を唐の李淵に禪らざるを得ざるに至つた。隋僅に三十年にして亡びて、唐の代となる。これ實に紀元六百十八年にして、西羅馬の亡びしより百四十二年後のことである。羅馬は亡びぬ、渾圓球上、大帝國を以て目せらるゝのは、唯だ漢民族の建設したる支那帝國あるのみで、強て之れに次ぐものを求むれば回々教徒の建てたるサラセン帝國位である。蓋し唐代の支那は前古未だ見ざるの隆盛を致したので、内は制度文物整然として備り、中央政府には上に中書、尙書、門下の三省あり、其下に吏部、戸部、禮部、兵部、刑部、工部の六部あり、地方は十道に分ちて道の下に州あり、州の下に縣あり、縣には令を置き、州には刺史を置き、道には巡察使を置き、官吏登庸の爲めには考試の法あり、田制税法を定め、歷朝老子を尊崇して道教を隆盛にし、且つ經學を獎勵して文藝を盛ならしめ、韓退之、柳子厚、李太白、杜子美、白居易等の名家出で、繪畫、音樂も亦勃興し、外は中、南、東の亞細亞悉く唐に屬し、内屬の諸邦八百と

稱せられ、バルチアの後に起り、突厥トルコ匈奴の別種といふと結び羅馬と戦ひて版圖を擴めたる、ササン朝の新波斯は大食國に苦められて唐に降り、其の大食即ち回教の祖なるマホメットの後嗣が建設したるサラセン國も亦唐に通じ、印度の方面は亦其の内亂を戡定せんとて、唐の太宗は王玄策をして吐蕃チベットに並にネパールの兵を率ゐて討平せしめたといふのであるから、眞に國威八紘に振ふたといふべきである。

唐の版圖此の如く廣く、其の國威此の如くに振ふたのであるから、支那人の通商も次第に其の範圍を廣くし、初めは羅馬人の專有に歸したる印度洋の航海權も漸次に支那人の手に入り、馬來半島より印度洋に出で、錫蘭に出で、更に印度の西海岸に沿ふて波斯灣に入り、アラビヤの海岸に沿ふて紅海灣に向ひて、諸種の物産を輸入し、唐の都は實に世界の珍を集めたのである。これは物貨の上のみならず、思想上の產物に於ても、印度の佛教は南北朝を経て隋唐に至りて益々盛んに、太宗の時には僧玄奘、歷遊十七年、天山南路より印度に入り、經を求めて歸り、次で義淨も亦印度に入り、二十五年の日月を

經て歸り、支那にも亦高僧出で、頗る盛んとなり、東羅馬の僧正ネストリウスの開きし基督教の一派ネストリアンは、羅馬を追はれて西方亞細亞に入りて波斯に行はれしが、太宗の時阿羅本なるもの其の經典を齋らして長安に來りて、太宗の尊信を得て波斯寺を建て、後に之れを太秦寺と改め、マホメットの初めし回々教は大食國より天山南路を經て、漸次南方に行はれた。これらの諸教は武帝の時、専ら道教を信じて自餘の宗教を嚴禁し、其の經典を焚き殿堂を毀ちしが故に衰滅に歸して、唯だ佛教のみ舊に復して長く支那思想界の一大勢力となつて居るのみとなつた。

宋と蠻族

唐は安祿山の亂があつたが、天下を保つこと二百九十年にして亡びて五代の世となり、僅かに五十四年に梁、唐、晋、漢、周と代を易へ、帝位にあるもの十三、群雄は四方に割據し、北方に契丹起りて威を中國に振はんとし、漢族の天下復た唐の如くなる能はず。宋の太祖之れを統一せしも、契丹は國を遼と號し、東は日本海より西は天山に接し、南は支那本部の北部を占めて敢へて譲らず。僅かに之れと和して國內の太平を維持し、盛んに富國強兵の

術を講じ、終に王安石の新法を用ひて青、苗、募役、市易、均輸等の保護政策を以て農商業を獎勵し、保甲、保馬の法を以て強兵を計りしも、之れを行ふ嚴峻なりしかば民、新法を喜ばずして事、意の如くならず。朋黨内に争ひ外には契丹の東、黒龍江の上にありし女眞、勃興して國を金と改め遼を亡ぼし、餘威を以て宋に迫り、宋は堪ふる能はずして和を請ひて淮水以南の地を得、且つ朝貢を約して國運を維持する悲境に陥りしが、更に契丹の西北、蒙古の地に成吉思汗なる英雄起るに及びて、宋を苦めし金は亡ぼされしが、宋も亦繼で亡ぼされて、支那の天下は全く蒙古人の支配に歸し、國號を元と稱するに至つた。宋は此の如く初めは遼に苦められ、中頃は金に苦められ、終に元の爲に亡びたのであるが、國初以來三百二十年、文教大に起り、殊に儒學は從來の訓話註疏を事とし、文字の末に先人の糟粕を尋ぬる弊を避け、直に其根本を究めて宇宙人生の本義を明にせんとする性理の學が起つた。これは一面佛教の盛んとなりて唯心の理研究せらるゝにつれ其の影響を受けたので、周茂叔あり、張載あり、程明道程伊川あり、殊に宋末に大儒朱熹出るに

及びて儒學殆んど此に大成したので、大義名分を明にし、節操を學ぶの風は慥かに此の學の特色である。詩文に於ては歐陽修、蘇東坡等の諸家輩出し、後世支那文學をいふものをして唐宋と併稱せしむる盛觀を呈したのである。由來、漢民族は、彼の羅馬人が我は羅馬の市民なりと稱して世界に誇りしが如く、我は中華の民なりとして四邊を夷狄視したのであるが、今や彼の羅馬が蠻族の蹂躪に任したるが如く、北狄蒙古の爲めに蹂躪せられたのである。吾等は更に眼を翻して西羅馬滅亡後の歐羅巴を見ねばならぬ。

第四節 中世文明の大觀

漫然と亞細亞と呼び、歐羅巴と稱する時には其の面積相如くが如きも、其實、歐羅巴は亞細亞の四分の一にして、漸く支那一國と同じ位であるから、支那の盛衰は歐羅巴各邦の興亡と同じ位であると見ねばならぬ。さて西羅馬没落の後にはゲルマニ族其の墟址に國を建て、西ゴート、ワンダル、ブルグント、東ゴート、フランクの諸王國となり、海を隔て、ブリタニアにはアン

支那、歐羅巴

東羅馬帝國

ゴロ、サクソン人入りて七王國を建設した。元來これらのゲルマニ族は家居なく、神殿なく、唯だ口碑の信仰を有する蠻族に過ぎなかつたが、來つて羅馬に近づくに従ひて、羅馬の文化に觸れ、且つ基督教の熱心なる傳道は、夙に蠻地に普及せしを以て其の來りて羅馬に寇する時も、教會の財産は之れを荒さなかつたといふほどである。其の最も最初に基督教に入りしはゴート族にして、次ぎはフランク族、其の次ぎはアングロ、サクソン族で、何れも基督教を篤信したが故に教會の命令には最も柔順であつた。併し此のゲルマニの移動によつて歐羅巴の社會状態は一變し、羅馬帝國の文物は地を拂ふて滅亡し、都市は荒廢して商工業は全く衰へたので、萎靡たりと雖も、舊文物を維持し、羅馬帝國の面影を存するものは東羅馬帝國のみであつた。此の東羅馬帝國にユスチニアヌスなる英主出で、大に綱紀を振肅し、前きにもいひし有名なる羅馬法典を編纂して範を後世に垂れ、初めて養蠶の法を支那より傳へしめて、歐羅巴に於ける蠶業の基を開き、自ら波斯を征して邊境を安んじ、亞弗利加に渡りてワンダル王國を伐ち、伊太利に入りて東ゴート王國を倒し、

東羅馬の威大に振ふた。帝は又當時國內に基督は唯だ神の性質を有すといへる説と、神の性質を有すると共に人間の性質を具ふといふ説とあつて、相争ふて居つたのに判決を與へ、斷然後説を容れて、之れに従はざるものネストリウス以下を國外に放逐した。これが亞刺比亞、波斯、支那に入つたのが先きにいふ唐の太宗の時に渡つた景教である。

此の如く歐洲の天地が基督教化せらるゝ時に當り、東方亞刺比亞の地にマホメットなる宗教家出で、新信仰を唱へた。元來亞刺比亞人はセム民族に屬して居るが、北方に大砂漠ありて文明の通路を塞いで居つたから、人民は遊牧、隊商を事とし、其の宗教も天然崇拜の域を脱せず、星辰隕石を拜して非常に世界の進運に遅れて居つたのであるが、紀元五百十七年、此の地方に於ては宗教并に商業の中心たるメッカにマホメット生れ、少壯、隊商に伍してシリア地方を旅行して基督教并に猶太教の感化を受け、四十歳の時、新にイスラム(Islam)教を唱へ、眞神アラ(Allah)の信すべきをいひ、其經典をコーラン(Koran)といふ。其異教徒に對するやコーランか、劍か、然らすんば朝貢かとの戦闘

マホメット

基督教の
分裂

的態度で教を弘め、武力を以て諸國を征服したので、マホメットの後相承けて此の主義によりシリアを伐ち、波斯を略し、埃及を取り、ダマスクに都し一面は屢々東羅馬帝國に迫りて撃退せられしが、他面は亞利加の海岸を征服してイスパニアに渡りて西ゴート王國を倒し、紀元七百三十二年、旗鼓堂々としてピレネー山を越えてガリアの平野に新月の旗を翻した。これが有名なるサラセン軍の侵入で基督教の運命は實に此の一舉にあつたのであるが、幸にフランク王國の宰相カロマルテル、伐つて之れを平げて、回教徒の蹂躪に遇ふことを免れた。これより先き歐洲諸國は悉く基督教に歸して、殊に舊帝國の首府たりし羅馬の大都會は最も盛大を極め、且つ此の教會の大僧正は基督の高弟ペテロの法を繼承するものとして權力大に加はり、グレゴリオ一世大僧正たる時より法皇(Pope)の號を稱し、グレゴリオ二世の時に當つて東羅馬帝レオ三世が基督教會に偶像を祀るを排斥せしに反し、偶像崇拜を以て凡俗に必要なりとして、東羅馬帝國と分離して、基督教はこれより東西の二派に分れ、東なるものは東羅馬帝國の首府たるコンスタンチノブルの教會によ

りて希臘正教と稱し、西なるものは羅馬教會を宗とし羅馬正教天主教と號した。かくて羅馬法皇は、教權を以て西羅馬の舊領に君臨し、諸王國の内政に干與するの源を爲したので、彼のサラセン軍を伐つたカロロ、マルテルの子ピピンが前王朝(メロウインガ朝)を廢してフランク王位に即いたのも、法皇の許可を得たのである。此のピピンの子にカロロ大帝出で、諸方を征服し、西はエプロ河より東はエルベ河に達し、北はオーデル河より南はチベル河に至るの地を領し、殆んど西羅馬の版圖を復して紀元八百年基督降誕の日、法皇レオ三世の下に西羅馬皇帝の位に即き、大に文藝を興隆し、基督教を奨励したが、此大帝國は僅に十有餘年の生命にして八百十四年帝死するや、後嗣不肖にして此の大國を治むるに適せず、國は東部中部西部の三に分かるゝことゝなり、西フランクは後、都をパリに奠めて佛蘭西の先となり、東フランクは獨逸の先で中部フランクの地をも得て、オット一世は法皇の加冠を得て神聖羅馬皇帝と稱し、爾來、獨逸王は伊太利王を兼ね皇帝の稱を得て居つたのであるが、此の皇帝は、最も羅馬法皇に近接せるものであるから、しばしば衝突を醸し

帝
カ
ロ
ロ
大帝
法
皇
と
皇

て或は皇帝の法皇を廢したこともあるが、一千〇七十三年グレゴリオ七世法皇となるや、權力を皇帝の上に得んとし、時の皇帝ヘンリ四世は之れに服せずして法皇の命令を輕んじたものであるから、法皇は終に皇帝を破門し、其の臣民に服従の義務なきを布告した。此の時代に於て基督教より破門せられたのは社會的生命を絶たるので、人民は帝に離れ、諸侯は此の機に蜂起し如何とも爲す能はざるものであるから終に法皇に宥を請ふと、法皇は之れ神に對した罪であるとして露頭洗足で三日間、雪中に立つて懺悔せしめて破門を許したといふほどであつたといふのであるから、如何に法皇の權力が盛んであつたかを見る事が出来る。併しヘンリ四世は此の屈辱を報る爲め終にグレゴリオ七世を國外に追ひ、クレメンヌ三世を立てた。其の後、獨逸に法皇黨、皇帝黨との二派を生ずるに至つたが、法皇インノケント三世の代に當りては全く歐洲の諸帝王を服して無上權を得るに至つた。かく法皇の權力を得るに至つたのは全く信仰の力で、時人は帝王は唯だ肉體の財産を保護するのみで、精神上のことは全く法皇によるの外なしと信じて居つたからである。

歐洲の中世は全く基督教全盛で、曩きにカロロ大帝文學を興隆せしも、希臘羅馬の古學は基督教權の下に服従し、苟くも基督の教義、羅馬教會の信條に反するものは行はるゝとなく、さしも幽邃を極めたる希臘の哲學も、今は教會の奴婢となつて其の勢力を伸ぶることが出來ず、天文、地文の諸説も唯だ基督教の教義に反せざる限りに於て行はれたので、思想界は全く壓迫せられて居つた。併し當時の歐洲人は戦争これ事として心を學藝に傾けるの餘暇がなかつたから、何事も教會に一任して敢て怪むものもなかつたのである。文藝の方は此の如く振はなかつたが、世は封建割據で、上は國王より下は社會の各級に至るまで、各、上級者より領地を受けて幾層にも君臣の關係を生じ、君は臣を保護し、臣は又其臣を保護して行くので、此の時代の美風と云はれるのは、武士の間に行はるゝ宗教を保護し、婦女を愛敬し、弱者を憐み、強を挫くに當りては身命財産を惜まざる任侠の俗で、之を騎士たるものゝ本分とすること、猶ほ我が國の武士道のやうなものである。即ち騎士たらんとする者は七歳より侍童(page)となりて、十四歳に至るまで王侯の城中にありて、

武術を練り心膽を養ひ、十四歳に至れば侍士(squire)となり、騎士に従ふて戰場に出で、或は狩獵、或は競武場に出で、二十一歳に至りて初めて騎士(knight)の列に入るの、其の時には前夜に入浴して身體を淨め、斷食徹夜して君前に出で一場の宣誓を爲し、君主は刀背を以て其の頸又は肩を打つのを式を行ふので、此の騎士の風の盛なる時には競武のことは盛んで、帝王の即位又は戦勝、結婚等に執行して馬上に殺傷の恐れなき武器を取りて相争ひ、敵を馬より落し、又は其の槍を折るを以て勝者とし、其の勝者は貴女より賞譽を受くるを以て無上の光榮としたのである。此の如くに武を練り、且つ戦亂斷ゆることなき時であるが、宗教の力は偉大なもので、毎水曜日の夕より月曜日の朝まで、又は祭日並に教會の定日等は神の平和(Truce day)と稱して一切の争闘は禁せられ、之れを犯すものは嚴罰に處せらるゝことゝなつて居つた。これらが後世國際公法の淵源を爲すに力あつたものである。

斯く此の民族の基督教に心酔せる間に、回々教國たるサラセンは二分して東部はチグリス下流なるバクダートに都を奠めてアツバス朝を建て、西部は

イスパニアのコルドバに都してハリファアと稱し、其の中間に埃及に入りてカイロに都を奠めたるフツチマ朝ありて、亞細亞、亞弗利加、歐羅巴の三洲に亘りて回々教の教義を宣傳し、バクダート、ゴルドバ、カイロの三府共に隆盛に赴き、寺院、宮殿、圖書館、天文臺等の建築は完美を極め、文學技術も亦大に起り、其文化は到底當時の歐洲人の夢想だも爲し能はざる所であつた。これら回々教國は悉く回々教を信せしめたのであるが、亞刺比亞の本部以外は人頭税を課して異教の信仰を許したので、其税金の収入も少からず。殊に亞刺比亞人は商業に熱心なる國民であつたから、諸種の工藝品を製作して諸方に輸入したるを以て國大に富み、東西交通の要路に當れる東部サラセンのバクダートは尤も繁榮を極め、國王ハルン、アル、ラシットの如きは常に四千の宮女を後宮に養ひ、錦繡綾羅を纏はしめて歡樂に耽つたと傳へらるゝほどであり、文學美術は大に發達し、天文、數學、化學は長足の進歩を爲して今日諸國に行はるゝ亞刺比亞數字を初めとし、^{アルゼンチン}代数(Aleghra)煉金術^{アルケミ}(Alchemy)アンモニア(Ammonia)アルコール(Alcohol)等は皆な亞刺比亞より傳へられたのであり、

イブン、シナ。イブン、ロシットの二大學者の如きはアリストテレスの哲學を、却て歐羅巴に傳へた名家で、ゴルドバには十一世紀に於て十個の圖書館、十七個の高等専門學校を有して居つたといふことである。

驕る者の久しからざるは古今同一轍、何れの世、何れの時にも、此理に背かず、爛漫と開きし花の散らで止まざるが如く、後宮四千の美人、奢侈に耽りたる東部サラセンの國威は日に衰へて、唐に破られし突厥の一部たるセルジック、トルコは漸次其の域内に入り來りて、初めは傭兵として用ひられしが後にはサラセン國王は唯だ宗教上の權を有するのみとなり、兵馬の全權は悉く此のセルジック、トルコの首長に歸した。これより先き唐の保護を仰ぎし波斯のササン朝は亡びてサマン朝起りしが、此のサマン朝は紀元八百十四年サラセン國王よりサルタン(Sultan)即ち君主に封せられて其地を領せしが、九百九十九年に至りて東方より來れる回紇即ちウイグル人の爲めに亡ばされ、もとサマン朝に仕へし突厥の子マムード自らサルタンとなりてガズニに都して、北はアム河より南は波斯灣に至るの地を領し、更に兵を出して印度を攻め、

十字軍

二十五年間十七回の侵入を試みて之れを略し、大に勢威を振ひてサラセン王國を脅かせしが、セルジック、トルコの會長ドグルルベック、ガズニ朝を亡ぼし、一族相繼ぎて或は小亞細亞を略し、シリアを平げ、葱嶺以北西比利亞以南の地悉く其の版圖に歸して、基督の聖地たるパレスチナも亦此のトルコ人の手に落ちた。パレスチナは基督教徒の巡拜尤も多き地である、此の地のサラセンに領されて居つた間は、決して異教徒なりとて迫害するとなく、且つ巡拜者によりて巨利を得しを以て却て厚遇したが、トルコ人の手に落ちるに當りて、基督教徒の此地に集るを喜ばず、大に巡拜者を苦め、其の寺院を毀ちしかば、佛蘭西の僧ベテロ自ら聖地に參拜して其暴狀を憤り、還りて諸方に遊説して聖地恢復を呼號し、羅馬法皇は一千〇九十五年佛蘭西のクレルモンに貴族、僧侶、平民を招きて大會を開きて此の舉を獎勵し、翌年八月を以て十字形の赤布を右肩に着けて出軍すべきことを約したが、大に激昂したる二十萬の徒は其期を待たず、狂氣の如くにベテロ等を推して指揮官として小亞細亞に入つた。されどもとよりこれ烏合の衆、唯だ信仰あつて規律なく、

甚しきは神の冥助によつて戦はざるも勝つべしとて、武器の用意さへ疎かなるものがあつたのであるから、全くトルコ人の爲めに敗られて、全軍殆んど戦歿した。此一舉に於ても當時如何に基督教の信仰が熱烈であつたかを想ひ見る事が出来る。さて本軍は期日を以て發し、これを第一として爾來二百年間、七回の遠征を試み、初めは聖地を恢復してイェルサレム王國を建設し歡喜して凱旋したが、直にトルコ人の爲めに恢復せられて基督教徒は虐殺の慘禍に遇ひ、其後は殆んど失敗のみであつたから、終に其の目的を達する能はず、此の舉は徒らに羅馬法皇の權利を増大するに過ぎずして終つたやうであるが、此の爲めに基督教國民は自己以外に更に優秀なる文明あるを知り、且つ此の遠征によつて通商の途開け、各地の都市盛大なるに至つたのであるから、決して無益のことのみではなかつた。

歐洲の社會が十字軍の爲めに騒いで居る間に、亞細亞の北部には唐の世契丹の西北に散處し、幹難、怯綠連兩河の源なる不兒罕山の邊に遊牧して居つた蒙古民族は、岫然として起つて、こゝに成吉思汗なる英雄出で、大に四方

を經略して亞細亞、歐羅巴の二洲に跨る大版圖を有し、其の四子版圖を分領して、更に其の領土を擴張し、東の方は金宋を亡ぼし、高麗を服して、支那全部を一統し且つ吐蕃等の地を併せたる元朝となり、西は拔都を將として一千二百三十六年北歐に侵入し、モスクバを陥れ、キエフを焼き、更にブダペストを陥れ、ドナヴ河を渡りて歐洲の天地を震駭せしめ、退て都を南方露西亞なるボルガ河流のサイラに奠め、キルギス以西、カルバト山以東及びドナヴの下流を統治して欽察汗國(Kipchak-Khan)を建て、其の一族旭烈は更に南に向ひて波斯を伐ち、サラセン帝國を亡ぼし、小亞細亞を攻め、北に轉じてアルメニアを略し、都をダマスカに奠めて伊于汗(Ilkhan)國を建て、其の他天山附近に察合臺汗國アルタイ山附近に阿窩臺汗國ありて、其の版圖は亞細亞の南北兩端を除くの外、大陸を横貫して東は日本海より西は歐羅巴の東北部に跨る、空前にして恐らく絶後の大帝國を建設した。しかもそれが太祖成吉思汗が蒙古を統一してより僅かに七八十年の間に成就したといふのであるから驚くべき發展ではないか。此の發展によりて北歐の地に入りたるゲルマニ族

の一部たるノルマン人の酋長ルーリックが、スラブ民族を征服して國を建てたる露西亞の如きは、全く其發達を阻害せられて其後二百年間は之れに壓迫せられつゝあつたのである。何故に蒙古人が、斯くも速かに斯くも大なる帝國を建設するに至つたかといふに、それは性質慍悍で、騎射を善くしたの由るの云ふまでもないが、元來遊牧の民であつたら其の生活が簡易で、行く所を家として其の飲食物も僅に馬乳、馬血、及び其乾酪のみにて足れりとする風、到底文弱に流れ、煩雜なる生活に慣れ、家を離るゝを顯はざる者の敵することの出来なかつたの由るに外ならぬ。蒙古人はかく慍悍であつたが其の國を治むるや頗る寛量で、元の世祖忽必烈の如きは、心を人材の登庸に用ひ、才を愛して降るものは拒まず、來る者は之れを容れて、遼人耶律楚材を用て編輯を司らしめ、吐蕃人八思巴を用ひて佛教の一種たる喇嘛教を布かしめ、伊太利人マルコ・ポーロを顧問とし、波斯人阿合馬を以て理財の事に當らしめ、萬事が大帝國流で、宗教の如きも喇嘛教を國教として崇信したが、他の宗教を拒まず自由に任せられたから、當時回々教國と相戦へる羅馬

法皇の如きは使を遣して和親を求め、基督教も亦支那に行はるゝに至つたのである。かゝる風であつたから中華を以て誇る漢民族は北方の蠻族に蹂躪せられたのであるが、其の爲めに文教の發達を害せらるゝとなく、戯曲詞賦の如きは此時代に於ても隆盛を致し、彼の有名なる三國志、水滸傳、西廂記の如きは共に此時代の産物である。加ふるに東西交通の便開けたものであるから西洋の學術も亦支那に入つて、東西文明融合の素を爲した。併し蠻族に屈從するは漢民族の堪へざる所、漢民族は機あらば乘じ、隙あらば窺はんとし、後、國勢の漸く衰ふるや、豪傑諸方に割據し、終に明の太祖朱元璋の爲めに亡ばされ、南宋の滅亡より此に至るまで八十九年にして、世は復び漢民族の手に歸した。これ實に紀元一千三百六十八年である。此時に當りて蒙古の他の汗國は尙ほ存したが萎靡として振はず。翻て西歐羅巴を見れば英吉利は佛蘭西と兵を構へて、有名なる百年戦争の半ばにして、獨逸はバプスブルグ家勃興し、瑞西は獨立し、東歐羅巴なる東羅馬帝國は、蒙古人の壓迫を受けて小亞細亞の地に移れる突厥族、漸次盛大に赴き、其の首長オスマン、其の子

オスマン、トルコ

帖木兒

ウルハンの時に至りて東羅馬帝國の領地を蠶食し、小亞細亞全部を略して、國をオスマン、トルコと稱し、都をアドリアノブルに遷して帝國を包圍し、ボスニア、マケドニア、希臘の地方を侵し、帝都コンスタンチノブルを突かんとする時である。これ多年相敵視する回々教徒の基督教國を襲はんとするのである。東羅馬帝はホンガリア、獨逸、佛蘭西等に援を請ひ、十萬の精騎を以て之れに對したが、脆くもトルコ軍の爲めに破られ帝國の運命旦夕に迫る。此に於て皇帝は當時、中央亞細亞より起り、成吉斯汗の壯圖を再演せんとする蒙古人帖木兒のサマルチカンドに都し伊兒汗國を亡ぼし欽察汗國を伐ち、西して印度を略し、其の後を突かんとするトルコを破らんとして西に向ふを奇貨とし、歳貢を約して援を之れに求めしかば、帖木兒は直に突進してトルコを討ちて之れを卻け、帝國は幸に安きを得、帖木兒は更に東して支那に向ひ明朝を亡ぼして蒙古の朝廷を恢復せんとせしも、半途にして死し、子孫互に位を争ふて其壯圖も跡なく消え。一たび帖木兒に破られしトルコは勃興して一千四百五十三年、トルコ王マホメット二世二十餘萬の兵を以てコンスタ

ンチノブルを圍み、終に之れを陥れて全く東羅馬はトルコ人の有となり、一時宇内に雄視したる羅馬帝國は影も止めなくなつた。興亡幾轉變、此の如くにして中世の幕は閉ぢたが、さしも一時歐洲を支配したヘブライの思想は漸く疎んせられて、基督教以外に文明なしと思惟したりし人々も、回々教國の文明に觸れて其の然る所以を疑ひ、法皇の權力過大にして其の基督の聖旨に悖るあるを思ひて、希臘羅馬の文學を復興せんとするの思想は、先覺者の中に現はれ、宗教改革の精神は愛宗の徒に萌じたる時に際し、東羅馬帝國亡びてコンスタンチノブルの學者多く逃れて伊太利に入りしかば、希臘ラテンの古文學研究は多大の便を得、此の古學の復興につれて古代の美術も亦復興の機運に向ひ、之れと共に諸種の發明行はれ、十五世紀の頃より火藥を武器に使用することゝなりて戰術一變し、活字行はるゝことゝなりて印刷の便大に加はりて書籍の刊行進歩し、羅針盤造られて航海に便を得ることゝなり。人類の生活状態は全然其の趣を改むることゝなつた。

近世文明の曙光

第五節 東西文明の融合

東洋西洋の文明は、古來幾度が接觸したのであるが、それは僅に其の一部分であり、且つ一時的であつたが、近代に至て極東と極西と相通じ宇内一家の實を見ると出来るやうになつた。これは全く航海進歩の賜で、陸は山河隔絶して相通すること難きも、海は一味鹹水で東洋の水は西洋の水と接し、ニールの河の流れも、チグリス、ユウフラトの河の流れも、ガンガの流れも、楊子江の流れも、乃至ラインの流れも、ダニープの流れも皆な同じ海の水となるが如く、よし波浪の難ありとも航海の術だに開けなば千里も隣接と同じく交通することが出来るのである。近代文明は先づ海より開けたので、從來歐羅巴人の東に通ずるには、地中海より小亞細亞を経、メソポタミヤに入り波斯灣に出で、印度に達するか、埃及より紅海を経て印度に航するかであつたが、トルコ人の東羅馬を亡ぼせしより、何れよりするも其の領土を經過せざるを得ず、之れを経過せんとすればトルコ人は之れに到底耐へ能はざるは

海の文明

どの過大の税を課したが爲めに東西の交通は全く杜絶したが、併し歐羅巴人は其食卓に胡椒、茶等の東洋産物の肉類を消化するものなくて協かなはぬのであるから、如何にかして地中海以外に通路を見出さんとし、殊に羅針盤の使用傳へられて航海の術進歩し、ホルトガル王ジョアン一世の子ヘンリコ自ら航海學校、天文臺を立て且つ毎歳探検船を出して亞弗利加西岸の群島を發見せしめ、後一千四百九十八年、バスコ、ダ、ガマの亞弗利加の南端を廻りて印度に達せしより、此に新航路發見せられて益、航海術の發達を來し、天文地理の學も從て大に進歩し、伊太利人コロンブスは地球の圓形なることを信じ、西方に航して能く東方に通ずることを得べしとて、イスパニアの女王イサベラの援助を得て一千四百九十二年を以て大西洋を航して西印度諸島を發見し、更に數回の航海を試みて亞米利加大陸を發見し、一千五百十九年にはホルトガル人マガリエンス、亞米利加の南端の海峡を過ぎて太平洋に出で、終にフィリッピン島を發見し、其の身は土人に殺されしも、部下は廻航を續けてイスパニヤに歸り、此に世界の圓形なることが確められ、東西交通の便は開かれ、

航海術の發達

人類の生活は一變せざるを得なくなつた。尙ほ此の事は後に話すとして、暫く歐羅巴の大勢を看取しよう。

由來中世の歐洲は純然たる封建制度で帝の下に王あり、王の下に諸侯あり、諸侯の下にも亦領地を有する貴族あつて諸方に割據して居つたので、之れを一致結合せしむるは、唯だ宗教上の権力者たる羅馬法皇あるのみであつたが、其の法皇の権力も漸次に衰へて、初めは諸國の帝王を支配したものが、後には國王の爲めに其の権力を左右せらるゝやうになつて、曾ては獨逸皇帝ヘンリ四世を露頭洗足で雪中に立たしめた羅馬法皇も、今は佛蘭西の奴隸の如くに取扱はるゝ悲況に沈淪し、之れに反して諸國の王侯は權力の集注を計つて獨立國家の體面を備へんとし、長く西羅馬皇帝の名譽を繼承し來れる獨逸皇帝の威權は地に落ち、領内の七大諸侯を以て選舉侯として皇帝選舉の常置員とし、一千四百九十三年ハプスブルグ家のマクシミリアノ一世、位に即きてより國內の統一を計り、佛蘭西は百年戦争の後、王權次第に發達し、ルイス十一世の頃には王權いよく擴張の實を擧げ、英吉利は百年戦争の後王位の

王權の確立

繼承に就て薔薇戦争ありしが、戦亂漸く收りて一千四百八十五年、ヘンリ七世立つに及びて國內統一し、嚴に貴族の兵を養ふを禁じて王權を伸張し、一時サラセン帝國支配の下にありしイスパニアは、基督教徒の勢力漸次に恢復し來り、終にサラセンを破りて其故地を復し、一千四百六十九年にはアラゴン王フェルデナンド、カスチリア女王イサベラと結婚して兩國合同してイスパニア國の基礎を定めて、貴族を抑制し、宗教裁判所を設けて異教徒を罰し、教俗二權を掌握して國威を擴張し、もとカスチリアの領地たりしポルトガルは之より先き一千四百五十五年ジャン二世、國內の大諸侯を討滅して王權を確立し、大は小を併せ、強は弱を制して國家の形態漸く強固になり來つた、これはトルコの勃興等に鑑みて王權確立の必要を認めたと、由るであらうが、又火薬の發明によつて戰術に變化を來して、小さきもの、到底大なるものに敵することが出來なくなつて統一を早めたのにも由るであらう。

かく歐洲諸國の王權が擴張せらるゝと共に羅馬法皇の權力は益々衰へ、加ふるに教會内の腐敗は其絶頂に達したものであるから、十字軍の不成功や古學

の復興によりて教會の權威に疑ひを懷いた人心は、宗教改革の必要を促し、英吉利のウィクリフ、伊太利のサボナロー、ボヘミヤのジョアン、フス等起りて基督の教義は一に聖書に頼らざるべからず、羅馬法皇の宣言の如きは信するに足らずと呼號し、羅馬教會の是れ等の徒に嚴刑を施し、フスの如きは火刑に處せられたのであるが、終に一千五百十七年、獨逸ウィテンベルヒ大學の神學教授たるマルチノ、ルーテルの九十五箇條の非難文をウィテンベルヒの寺門に掲げて羅馬法皇反對の聲を擧げしより、改革の氣運此に熟して、七選舉侯の一たるサクソニア侯フレデリキ之れを助けしより教會の腐敗を憤慨せる諸侯靡然として之れを賛し、ルーテルと前後して佛蘭西のカルビン、瑞西のズインクリも亦改革を唱へて新教は大に勃興した。之れに對して舊教たる羅馬教會は又王侯の援助を得て相争ひ、終に鮮血淋漓たる新舊兩教徒の軋轢を歐洲の史上に現出し、結局北歐羅巴の獨逸民族は主として新教に歸し、南歐羅巴のラテン民族は主として舊教を奉ずることゝなつた。かく羅馬法皇の教域の侵略せらるゝに際し、新に教田を拓かんとて東方傳道を試

みたのが、イスパニア人イグナチオ、ロヨラ、フランシス、サビエル。マテオ、リチ(利瑪竇)等の主唱したエスイタ教會である。

これより先き東西の交通は、いよいよ開けて世界は益々廣くなり、ポルトガルは埃及に於けるサラセンを破り、更に印度を壓して此の地に總督を置き東は支那に通じて東洋貿易の主權を掌握し、イスパニアは南亞米利加に發展して夙に北米に國を建てたるメキシコを征して之れを領土とし、更にペルーを畧し、一千五百七十八年、ポルトガル王統絶えてイスパニア之れを併すや、尙ほ其の領土を擴張せんとして艦隊を南洋に出してルソン、ミンダナオ等のフィリピン群島を取り、支那大陸とは指呼の間に接するに至る。エスイタ教會の傳道を試みんとしたるは、此の地方で、イグナチオ、デ、ロヨラは印度に入り、フランシス、サビエルは馬來半島を経て日本に來りマテオ、リチは支那に入りて其の教義を宣傳せんとした。

此の時に當りて、一時、帖木兒の爲めに征服せられたる印度は、其の五世の孫バベル大王に至りて莫臥兒帝國の礎を築き、バベルの孫アクバル大帝に

至りて全く統一せられたりしが、今は勢ひ微弱となり。元を亡ぼして統一の大業を樹てたる支那の明朝は、四方を經略して國威大に振ひ、文教も亦盛んとなりて大儒王陽明の如きも出たのであるが、太平三百年、内政大に亂れ、外には東方に倭寇の來りて沿海を擄掠するあり、西方に安南の分裂して其の勢威に服せざるあり。加ふるに滿洲の地に起りたる愛親覺羅氏は蒙古諸部を統一して、將に南下して中華を侵さんとするあつて、衰滅の機運漸く熟し、後、紀元一千六百四十三年に至りて終に愛親覺羅氏の爲めに亡ぼされて國は清と改めらるゝことゝなつた。エスイタ教會の支那に來たのは、此の明末清初の頃で、マテオ、リチは一千五百八十一年を以て支那に入りて、明の神宗の信任を得、次でバントヤ來りて北京に天主堂を建て大に布教に努め、それと同時に西洋の學術、支那に入り、アダムシアールは清の康熙皇帝に寵用せられて欽天監即ち天文臺長となりたる等、歐洲の宣教師續々支那内地に入り、天文、地理、曆法、砲術等を傳へた。康熙皇帝は實に稱世の英傑で、支那人の所謂夷狄より起つたのであるが、能く漢民族の心を得、中華の文教を奨励

して其の徳に服せしめ。四方の未だ歸順せざるものを征して蒙古西藏に及ぶ此の時に當り支那の北方に勃興したる國あり、露西亞といふ。久しく蒙古人の羈絆の下にありしが、一千四百六十二年、モスクバの大公イバン三世王政の基を開き、其の子イバン四世初めて帝(Царь)と稱し西比利亞を征服し、其の後一千六百十三年國祖ルーリクの遠孫ミカエル、ロマノーフ、帝位に即き國威大に揚り、其の孫ペテロ大帝に至りて、東羅馬帝國の滅亡と共に衰へしギリシア、カトリック教の正統なる繼承者として政教二權を掌握し、北の方はポーランドを略して勢望隆々たる瑞典王カロロ十二世と戦ひて之を破り、南の方は、此の康熙皇帝とネルチンスク條約を結びてスタノボイ山脈、ケルベチ河アルグン河を以て兩國の境と定め、歐亞二帝國は陸に於て密接し來り、海に於てはイスパニア王フィリポ二世の、其の領内をして悉く舊教徒たらしめんとするに抗した、獨立したる和蘭陀は盛んに東洋に航路を開き、ジャバにバタジャ市を建て、根據地とし、ポルトガルに代て南洋の海上權を掌握し、英吉利人も亦東洋貿易を起し、殊に眼を印度に注ぎ一千六百三十九年マドラス

市を建て、次でボンベイ、カルカッタを開きて英領印度の基礎を定め、印度の棉花、ボルネオの金剛石、セイロンの肉桂、マラッカの胡椒等は歐洲の市場に上り、歐洲人は東洋を以て寶庫として東へ東へと注目したのである。併し東洋の方では、餘り歐洲人の來ることを喜ばない。それは物質文明は歐洲に學ぶ所多いが、それと共に輸入せらるる基督教の信仰は、支那並に日本の國民性に相悖るので、支那では屢々之が排斥を試み成功するには至らなかつたが、日本に於ては豊臣秀吉、徳川家康相繼いで基督教即ち當時に所謂切支丹の宗門を禁制し、終に國を鎖して歐洲との交通を斷ち其侵入を防ぐに至つた。

東洋の形勢此の如き時に當り、歐洲の内地は王權の擴張其絶頂に達し、各國の交渉複雑を極め、英吉利女王エリザベタは先にいひしイスパニア王の壓抑の下にありて苦める和蘭陀の獨立を助けたる等の原因によりてイスパニアと兵を交へ、其の艦隊を撃破せしより國威大に振ひて、海上の主權を掌握し東、印度は云ふまでもなく西は亞米利加に發展し、文學も亦興りて空前の大戯曲家シェクスピアの如き文豪出で、哲學には近世哲學一方の鼻祖と仰がる

るペーコン出で、佛蘭西はルイス十四世立つて「朕は即ち國家なり」と豪語し、宮廷の男女は日夜遊戯に耽り、奢侈の風國內に溢れ、浮華輕佻、妄りに重税を課して民の痛苦を問はず、自由を愛し、權利を重んずる歐洲民族の永く此の如き壓抑に耐え得べきにあらざれば、エリザベタ女王死してジェームス一世立ち、君權神授の説を信じ、自ら位に登れるを以て神より受けたる自然の權利とし、其神聖にして侵すべからざるをいふて壓制を施し、其子カロー一世も亦父に劣らざる君權萬能主義なりしかば、議會の建言を蹂躪し、專斷の政を行ひて國內の擾亂を來し、終に一千六百四十九年クロムウエルの爲に國家の公敵として死刑の宣告を受けて、斷頭臺上の露と消るに至りて、政權クロムウエルの手に歸し、國王は廢せられて共和政體となりしが、クロムウエルの子、國政を處理するの技なく、人民復た王政を想ふて、共和政廢せられてカロー二世立ち、次でジェームス二世立ちしも前專制の轍を踐み、以て國民の望を繋ぐに足らず。此に於て議會はジェームスの女婿ウイレルムを和蘭陀より迎へて之を立て、權利條例(Bill of Rights)を制して國王は議會の協賛を經

英國革命

佛蘭西革命

米國の獨立

ずして租税を課し、又は兵を徵發することを得ざる等のことを定めて民權を擴張し。佛蘭西はルイス十四世の後、ルイス十五世立ちしも、宮廷の奢侈は前朝の如く、且つ政を嬖妾に委ねて、妄りに無益の戰爭に従事し國用多端に失し、民之を怨むこと甚しく、ルイス十六世立つに及び大に願る所ありて之れが廓清を改らんとせしも宿弊如何とも爲し難く、加ふるに自由平等の思想は國內に普及せられ、國會を召集したれど議論は沸騰して、いよ／＼紛擾を醸し、大勢の推移する所、如何とも爲し難く、終に有名なる佛蘭西革命となり、王政廢せられて共和政體となり、國王ルイス十六世は一千七百九十三年を以て死刑に處せらるゝに至つた。之れより先き英吉利人の本國政府に不平を抱いて北亞米利加に赴き、此に新なる殖民地を拓けるもの、此の殖民地に於る本國政府の暴政に反抗して獨立を企て、ジョージ、ウォシントンをして元帥とし、我れに自由を與へよ、然らずんば死を與へよと絶叫して英吉利軍と戦ひ、佛蘭西軍の援助を得て大に之を破り。千七百八十三年、英吉利をして其の獨立を承認せしむるに至り、十三州の民は大統領と國會とを以て成る

共和政體を組織し、ウォシントンをして第一回の大統領とし、此新天地に於て新たなる國家を築き、自由獨立の氣象は歐米の天地に彌漫し伊太利、和蘭陀は共和政となり、アイルランドは英吉利より獨立せんとし、亞米利加に於けるイスバニア領は殆んど獨立し各國の帝王をして大に恐れしめたのである。蓋し此の民族が自由民權の思想は、早く希臘の昔より胚胎し、羅馬に至て權利の觀念更に醗酵せられて中古の時代に入りしが、君權の勃興に従つて爆然として發したるので、もとく歐洲の民族は希臘羅馬の思想より云ふも、之れに代りて精神界を支配したる基督教の思想より云ふも、神を除くの外、人は皆な平等の權利ありてふ觀念は、深く心裏に印したるに、中世の歐羅巴は羅馬法皇、上にあつて宗教上頗る不平等であつたが、宗教改革の聲起りて、羅馬法皇も人なり、吾等と何の異なるべきなしとの思想普及する時に當り、君主の獨り權力を擅にして人民の權利を壓抑するは、理の當に然るべからざる所此に於て此の民權自由の説出で、貴族のみ富と權とを有するも亦自然にあらすとの思想は、平等の觀念を起さしめて、英佛の革命となり、米國の獨立と

西洋思想
と東洋思想

なつたのである。更に此の原因を地理的狀態に求めて、此の思想に冷淡なる東洋殊に支那とを比較すると、其面積は同じ位であるが、支那は高山峻嶺に乏しく國土は分割せられずして、統一せられ易く、歐羅巴は高山峻嶺縱横に國を區劃して統一せらるゝよりも分割せらるゝに適するが故に、古來歐洲の天地は、羅馬の統一が破れてから、カロー大帝が一たび統一したが、死後直に分割せられた外、統一の歴史を見る事が少いに反し、支那は周の世、春秋戰國に分れた後、秦漢引續いて之を統一し、三國の分裂、南北朝の對立、五胡十六國の分割はあつたが、それは實に短き日月で、隋唐之れを統一し、宋之れに代り、元之れに繼ぎ明となり清となり常に統一せられて居る國である。分割せらるゝものに自由獨立の氣風盛んに、統一せらるゝものに服従の觀念固くなるべきは争はれざる大勢で、此の點が東洋の思想と西洋の思想との異なる要點ではあるまいか。されば佛蘭西革命の後、人心恟々として復た王政を想ふの時、ナポレオン大帝身を砲兵士官より起して諸方に轉戦して埃及、シリヤを伐ち、武勳噴々たるに際し武力を以て議會を解散して新憲法を作り、

ナポレオン大帝

三人の執政官を置き、其中一人を執政總長として實權を有することゝして自らそれに任じ、外は歐洲各國の之れを承認せざるものを伐ち、伊太利を取り、オーストリアを懲らし、内は内治の改良に心を潜め、舊教を以て國教とし且つ有名なるナポレオン法典を作り、終に一千八百〇四年を以て共和政を廢して君主政體として皇帝の位に即き、英吉利、露西亞、瑞典、オーストリア等の諸國の同盟して之を攻めんとするを破り、更にイスパニアを伐ちて之れを略し、オーストリア帝の女マリア、ルイサを娶りて皇后として終に歐洲大陸を統一し、僅に對岸の英吉利の之に服せざるのみなりしも、そは眞に東の閩にして、諸國は機あらば離れんとし、一千八百十二年長驅して露西亞に入つてモスクバに破れしより帝威地に落ち、プロシア、瑞典等英吉利と同盟して佛蘭西に逼り、佛蘭西元老院をしてナポレオンを廢して之をエルバ島に置き、ルイス十六世の弟十八世を迎へて帝位に即かしむるに至る。ナポレオン、島にあること十箇月脱れ出で、復び帝位に即き大に列國の軍と戦ひしも、一千八百十五年、英將ウェリントンの軍とウオトルローに戦ふて大に破れ、身は

大西洋中の一孤島セントヘレナに配流せらるゝことゝなつて、列國は皆な其獨立を恢復して國勢を振興することゝなつた。統一せられんとして分割せらるゝは歐洲の國風で、其の爲めに自由獨立の氣象は益々盛になるのである。ナポレオン殞落の後、佛蘭西復たルイス十八世の代となり。各國の帝王は神聖同盟を造りて、自由民權の主義を壓抑せしも、勃然として起りし此主義の壓抑せらるべきにあらず、ルイス十八世の後にカロロ十世立ちて民心を失ひて七月革命となり、王をして位を退かしめ、次王フィリポ亦政を失して終に一族を率ゐて英吉利に逃れしむる二月革命となり、佛蘭西は又共和政と變じ、ナポレオン一世の姪之が大統領となり、伯父の壯圖を恢復するの志を以て一千八百五十二年帝政を再興し、ナポレオン三世として之れに君臨し、國力の發展を計りて當時ニコライ一世立ちて國勢大に揚り南の方トルコと隙を生せる露西亞に抗し、オーストリアに敵し、今又勃興し來れるプロシアと兵を交へしが、不幸にして一敗地に塗れ、一千八百七十一年五十億の償金と、エルザス、ロートリンゲンの二州を割きて和を請ひ、之れよりプロシアは歐洲に

雄視す。プロシア王ウイレルム一世は獨逸皇帝の位に即き、憲法を發布し、佛蘭西は、帝政又廢せられて、共和政となる。これより先き希臘はトルコと戦ひ、其の羈絆を脱して獨立し、白耳義は和蘭陀と分離し、伊太利は統一せられ、これより後、露西亞とトルコとの戦争ありて其の詳細は此に述べ難けれど、近時の歐洲諸國は内は互に權力の均衡に心を勞すると共に、外に向つて勢力を扶殖せんとし、歐洲禍亂の中にも西力は東侵し來つて英吉利は一千八百四十九年に至るまでに、殆ど印度全國を征服し、一千八百七十七年、英吉利女皇ヴィクトリアは印度女帝の號を稱し、更に東の方には一千八百二十四年にシンガポールを同三十九年にはアデンを占領し、支那に對しては同八十年には香港を割取し、上海、寧波、福州、厦門、廣東の五港を開かして南清の商利を壟斷し、佛蘭西は夙に安南に着目し、一千八百八十三年之を保護國とし、東京地方を得、暹羅の地を割取す、かく英佛二國が海よりして清國に迫るに對し露西亞は陸よりして手を太平洋沿岸に下し、一千八百五十三年より樺太の經營に着手し、一千八百六十年には清國より烏蘇里江東の地を得

歐洲と亞細亞

て浦鹽斯德を建て、中央亞細亞に於ては諸汗國を併せ南下してアフガニスタンに及ばんとす。此のアフガニスタンは印度と境を接するを以て、露西亞の南下は英國の不利となつて英露此に交渉を開き、東西兩洋の問題は相互に影響して世界の大勢に干與することゝなつた。

歐洲と亞細亞

一波動けば千波萬波、立どころに影響するは歐亞の二大陸のみならず。歐洲の勢力は亞弗利加に及び、埃及は英吉利の保護國となり。トランスバール、オランイエも亦英吉利に併せられ、チウニス、サハラ、ギネア、マダカスカ、ソマリは佛蘭西の勢力の下にあり、東亞弗利加には獨逸の勢力及び、南洋方面即ち太平洋洲に屬する部分を見れば、オーストラリアは英國國旗の下に屬し、タスマニア、ビクトリア、クインズランド、ニュージールランド、フィジーも亦英領たり。カイゼル、ウイレルムランド、ビスマルク諸島、マルシアル、ソロモン、サモア諸島は獨逸に、ニウカレドニア、ツアモタは佛蘭西に屬し。一千八百二十三年大統領モンローが歐洲諸國の干涉を拒絶して、亞米利加のことは亞米利加に於て決すべしとしたる合衆國は國勢漸次に發展し

合衆國

てメキシコと争ふてカルホルニア、ニウメキシコの地を得、英吉利と共にロッキーン山以西を分割してオレゴンの地を得、内には南北戦争の如きものもあつたが復び一統して國勢益々振ひ、力を海外に伸さんとし、近く一千九百八十八年、太平洋上なる布哇を合併し、同九十五年イヌバニア領なるキウバ島民の獨立を計るに左擔してイヌバニアと戦ひ、其結果同九十八年を以て西印度諸島及びフィリッピン群島を得て、清國並に我が國とは指呼の間に接するに至つた。これより先き我が國は兵を清國と交へて連戦連捷、遼東半島並に臺灣澎湖島を得しが、露西亞獨逸、佛蘭西は同盟して遼東半島の還附を請求し、我れは其の請ひに應じたりしに、獨逸は之れを口實として清國に迫りて膠州灣を借り、露西亞は大連、旅順を借り、且つ滿洲鐵道敷設權を得、英吉利は威海衛を借り、佛蘭西は廣州灣を借り東京鐵道の延長を求めて、支那大陸は歐洲列強の争ふ所となり。露西亞の如きは恣に滿洲を占領し、朝鮮の内政に干與し、我が國の抗議に遇ふも應せず。此に於て日露の戦争となり、連戦連捷、一千九百〇五年に於て滿洲に於ける露西亞の既得權を放棄せしめ、後ち

我は朝鮮を併合するに至つた。かくの如く、東洋の一孤島と歐洲とは密接に關係し、其一舉一動は影響するやうになつた。これには種々の原因もあるが、其主要なるものは、科學の發達で即ち十八世紀の末、ジェームス、ワット蒸汽力を發明し、十九世紀の初めに至つて亞米利加人ロバート、フルトン之れを汽船に應用して一千八百〇七年之れをハドソン河上に試み、次で大西洋の航海に用ゐて、從來の帆前船に代へ、英吉利人ジョージ、スチブソンは之れを陸上の車に應用せんとし、一千八百十二年を以て機關車の製造を完成し、一千八百三十年、リパブル、マンチエスター間に鐵道を敷設して之れを走らして此に汽車なるもの生じ、此力によりて陸上交通の便を開き、海には新航路發見せられ、陸には鐵道布設せられ、地球上は海と陸とを隔はず、縦横に往來せられ。山を穿ち地を割きて、一千八百六十九年にはスエズの運河成りて、大西洋の水は、印度洋と接して航海に便を得、カナダ合衆國縦貫鐵道成りて大規模の鐵道漸く計畫せられ、今や歐亞の二大陸を横貫する西比利亞鐵道完成し、之れに加ふるに一千八百三十七年、亞米利加人、モールスは電

氣力を應用して電信を發明して全四十四年にウオシントンに架設し、全五十年には英吉利政府、海底電線を沈設して歐洲との通信を便にし、更に之れを米大陸との間に設け、一千八百七十二年にはスコットランド人ベル幾多の困難を凌ぎて電話機を發明し、下て全九十六年には伊太利人マルコニ、無線電信を發明したる等、世界の神經は鋭敏となつて、眞に打てば響く、宇内一家の實を示すやうになつた。

第四章 日本の世態人情

第一節 日本民族の文明

世界は大にして日本は小。されど大なる世界の風潮は、此の極東の一孤島四面繞らすに海を以てせる小なる日本を訪れ、此の小なる日本の一盛一衰は直に大なる世界に影響す、所詮世界は一家、宇内は一國、其の交通の便開けざりし昔にあつては、暫く彼我の懸隔甚しくして相通することなかりしも、其の時に於ても大波小波の幾重にも渦紋を爲して互に關係したので、埃及、

世界の日本

日本原始の文明

パピロニヤ、乃至希臘羅馬の文明は我が日本と何等の交渉なきが如きも、深く日本文明を研究し、精しく日本民族の原地を調べば、其の間何等の關係がなかつたとは斷ずることが出来ないかも知れぬ、彼の日本民族を以てアルヤ系に屬すとし曾ては西亞東歐に雄飛したりしにあらずやてふ研究も、我が日本民族は太古埃及並にパピロニヤの文明と前後して其の地方に入り込むだヒタ(Hittite)人の後裔であるなどといふ臆説も、何時かは萬人の正しと認むるに至るやも計られぬ。併し其等の研究は今必要けれど、我が日本民族が、其の初めに於て早くも遊牧の時代を去つて農業の時代に入り、土器石器の時代を過ぎて鐵器銅器を使用するの時代に入つて居つたのは争はれない事實で、保食の神の體中より稻、粟、麥、稗、大小豆及び藨を生じ、五穀は以て農業の本となり、天神は其の中より殊に稻を選むで子孫の食と定められ、我が國をして豊葦原の千五百秋、瑞穂の國と稱するに至り、藨は養蠶の本となりて織縫の事行はれ、その他長白羽の神が麻を植え、天日鷲の神等が穀を植えられたる等の説話、下つては神武天皇が天富神をして麻、穀を總の國、粟の國

に補えしめられ、崇神天皇が農を以て天下の大本にして、民の恃みて以て生ずる所なりと仰せられた等の史實に徴して明かであるし、我が民族以外のコロボツクル、アイヌ等の諸族は此の國にあつて未だ石器土器使用の時代にあつたのであるが、我が民族は刀劍といひ鏡といひ皆な金屬製のもので、石凝姥命は銅を以て日形の鏡を造り、天目一箇命は鐵を以て刀、斧の類を造られたといふ、これらを推しても我が民族文明の程度が測られる。

さて其社會状態はといふに、既に治者被治者の關係おつて君臣の分明かに定つて居つた、勿論其の關係は他の諸國と同じく宗教的意義の付加せられて居るのは云ふまでもないが、我が社會に於ては此宗教的意義と血族の關係とが密接不離となつて、萬國無比の國體の本を成したので、太古地未だ剖判せず渾沌として雞子の如きの時、中に天御中主神あり、其後天神七代地神五代、伊弉諾、伊弉册の二神に至つて始めて此大八洲の國を生み、次で山川草木風火の諸神を生み、伊弉册尊死して後、伊弉諾尊又三神を生む、一は日の神にして天照大神、二は月の神にして月讀神、三は素盞鳴尊、此の素盞鳴尊、暴

萬國無比
の國體

戻にして逐はれて出雲に至り更に韓國に渡りたまひ、其の子大己貴命、出雲にありて能く國家を治めたまひしが、後、大八洲の主たる天照大神が皇孫瓊々杵尊を葦原の中つ國に降して我が子孫の君たるべきの地と仰せられ、征いて四方を征せしめたまふや、大己貴命は其の國家を擧げてこれを皇孫に譲り奉つたといふ、此一事に於ても我が國情の他と異なるを窺ひ知るべきではないか。瓊々杵尊の子が、彥火火出見尊、其の子は鷓鴣草葺不合等で、即ち神武天皇の父君に當らせらるゝのである。されば天照大神は代々の天皇の祖に當り、代々の天皇の統治の大權を得たまひしは、大神のこれを天孫に授けたまひしに基き、此の御代の安らげく治るも大神の護らせたまふに基くてふ信仰は祭政一致の基礎となり、政治即ちまつりごと、神祇を祭るを以て治國の要務とし、天皇の神を祭りたまふは則ち祖先に孝なる所以、臣下の天皇を以て現神として尊崇するは之れ君に忠なる所以にして、天皇の祖と臣民の祖とは其本一なれば、天皇に忠なるは又其祖先に孝なる所以と見る忠孝一致の國民性を養ひ來つたのである。されば臣たるものの君の命を奉じて戦ふは身命を

國民性の
根幹

神に捧ぐると同じてふ信仰を以て勇武絶倫能く他の民族に對し、以て中原を平定したのである。君民同祖は我が民族の誇りにして忠孝一致は我が國民性の根幹である。當時我が國には未だ成形した宗教もなく道徳もなかつたのであるが、所謂惟神の大道、自然に此國民性を有し民族精神を發達せしめたので、其後、儒教來り佛教入つても、此の精神を主として之れを撰擇し、此の國民性を中心として他を同化せしめたのである。儒教の入つたのは應神天皇の朝であるから、支那の三國時代に當り、佛教の入つたのは欽明天皇の朝であるから支那の南北朝の末に當るので、一般の文運は支那に比して非常に遅れて居るのであるが、此の支那印度の文明を受くるのが遅かつた代りに、我が日本には、又日本獨得の文明を形成して、能く外來の文明を咀嚼し融和するだけの力を養ふて居つたのである。我が日本民族は勇武の氣象を以て能く北に蝦夷人種や土蜘蛛人種を逐ひ、南に熊襲人種を伐つたのであるが、文に於ては頗る幼稚なもので我が國は言靈の國として未だ文字もなかつたのであるし、其の生活状態は質素簡朴で、衣は布を纏ひ、食ふには土器又は木の葉を

外來文明
の咀嚼
和

優しき心

用ひ、住居は貴人には丸木柱の住宅ありたれど、賤民は穴居を俗として居つたのである。かく生活は質素で勇武であるといふのであるから、我が民族は慄悍にして愛なぞといふことは少しも解せぬやうに思ふ人もあるであらうが、我が民族は決して強いばかりではない。優にやさしい心を持つて居つたので、そは慄悍比なしと云はれた素盞鳴尊も、出雲に櫛稻田姫を娶つては、八雲立つ出雲八重垣の歌を詠じたまひしの一事にても想像せらるゝのである。歌は思ひを述ぶるものとして早く行はれ、舞樂は神をいさめの伎としてこれまた早くより發達して彼の天照大神の天の岩戸に神隠れまませし時、天鈿女命が天香山の日蔭蔓をかけ、手に小竹葉を結び、足踏み鳴らして躍りたまひしより、降ては神功皇后の琴を弾じて神託を請ひたまへるなぞ其の例に乏しからぬのである。

當時、我が民族は東北には文化我に劣れる蠻族の蟠居せしありて朝廷しばしば之を征討せられしが、西南僅に一葦帶水を隔てては夙に支那大陸の文明を呼吸せる三韓ありて、武力に於ては我れに敵せざれど文化に於ては我れに

三韓征伐
と生活狀
態

優るものありしが、神功皇后の三韓征伐より三韓我れに服屬して諸種の文化を貢献せしを以て、我が生活状態は勢ひ一變せざるを得ざるに至つた。即ち應神天皇の十六年には百濟より儒者王仁を送りて論語並に千字文を貢して我が國初めて文字あるを得、繼で阿直岐等も來りて書籍を傳へ、漢の靈帝の苗裔阿知使主も其子都加使主と共に我が國に歸化して支那の文學を傳へ、物質文明に於ては同じく應神天皇の朝に新羅より木工を貢して造船のこといよいよ精しく、百濟より鍛工を貢して從來の倭鍛冶の外に韓鍛冶の法を傳へ、爾來諸種の文明相繼で入り、國內の文化も亦次第に發達し、欽明天皇の十三年佛敎の百濟より渡ると共に、彫刻、繪畫、建築の事も從つて輸入せられ、推古天皇の朝、聖德太子の立ちたまふに及びて日本文明は燦爛の美を呈するに至つた。聖德太子は實に日本文明の恩人である。欽明天皇の朝に渡來してから其の採否に就て問題となつて居つた佛敎を採用して精神的に文明の基礎を定め、日本在來の思想並に儒敎を融合して國民性の根底を定め、近隣に比して文化劣れる此の日本の國をして對等の地位に進められた。吾等は日本の歴

史を遡つて推古天皇の朝に至り、此に前代未だ見ざるの文明を見るのである、已に佛敎を入れる佛像を畫かしむる爲めに繪畫を獎勵せざるべからず、即ち推古天皇の世に黃文書師、山背書師を定めて永く其の業を子孫に傳へしめられ高麗の僧曇徴は歸化して佛畫を傳へ、鞍作の刀利は彫像に秀でこれより先き敏達天皇、崇峻天皇の世に百濟より造寺工を貢せしが、聖德太子に至りて四天王寺の造營、法隆寺の建立ありて建築、彫刻、繪畫等長足の進歩を爲し、文學に於ては太子親ら法華、勝鬘、維摩の三經を講じ且つ其の疏を造りたまふ等殆んど後世をして驚かしむるものがあつた。併し太子の功績としていふべきはこれだけではない。

元來我が國は上に萬世一系の皇室を戴き、何事にも血統を尊び世襲を旨としたので中臣、齋部の祭禮を掌り、物部、大伴の兵政を司るを初め、弓削部、矢作部、靱負部は兵器を製し、鏡作部、鍛師、玉作部、土師、漆部、下つては鳥養部、山守部等に至るまで其の職を世にしたるを以て、次第に人民の階級を生じ殊に大臣、大連の如きは盛んに奴婢を養ひて權威を張り、終には皇

室を蔑にするものをも生ずるに至つた。太子は此に於て國家統治の機能を明にするが爲めに十七憲法を制して君は天、臣は地として君臣上下の分を明にし道徳的訓誨を本として爲政の方針を定められた。擅に農業を害するを戒め、且つ施藥、療病、悲田、敬田の四院を設けて賤民の救済に心を注ぎ、外、支那との交通を初め、矜驕一世を曠うする隋の煬帝をして侮ることなきを得せしめられたのは、太子の功である。日本の文明は推古天皇の朝に至つて初めて其の蓄を破つたのである。併し其の咲きも残らず散りも初めぬ満開の光景は之れを七重八重咲く花の匂ふが如く今盛りなりける奈良朝より、大宮人は櫻かざして今日も暮しつる平安朝に見るのである。

第二節 奈良平安朝の世態人情

一國の盛衰榮枯を四季に喩へて見るのは、面白き觀察法で、奈良平安の兩朝は實に日本文明の春、鎌倉時代は夏、南北朝より戰國時代にかけては秋、徳川三百年は冬と見ることが出来る。今まで蓄んで居つた日本文明の花は此

の奈良平安の時代に至つて咲き誇つたので、國家の機制、社會の狀態頗る其の面目を改めた。從來しばしばいふ如く我が國は君民同祖の國體で血屬世襲し來つたのであるから天皇は中臣、忌部、物部、大伴、蘇我等の諸族を統治し、其の諸族は又其の以下の分族分派を統治して居つたから、天皇は諸族の長にして直接に人民を治めたまふのでなかつたが、太子の憲法出で、族長制度漸く打破せられ、天皇統治の事確認せられたのであるが併し尙ほ蘇我氏の如き大族の權を弄するあつて、統治の權能充分ならざるものあつたが、孝徳天皇の大化の革新によつて貴族豪家の私民私領を廢し、總ての土地人民をして直に國家に隸屬するとし、官制を改めて一切の組織は人によつて族によらざるの制を執り、天皇は總族長の地位にあらずして自然に種族を超越して人民を統治する君主として一切の權利を統攬し中央に神祇官を設け、其の下に太政官を置き、太政官の下に八省を置き、百官を配し、全國を六十餘國、六百餘郡に分ち、國には國司、郡には郡司を置きて國家統治の機能略ぼ完備す、内政此の如く完備の緒に就くの時、支那は漢民族勃興の絶頂たる唐の天下にして

太寶令

其の手は我が服屬國たる三韓に及び終に之れを亡ぼし、百濟人は多く逃れて我國に來りて其文物を傳へ、我が國も亦汲々として唐の文明を模倣して漢詩漢文も漸く盛んに、文武天皇に至りて更に唐制によりて、律令を定めて國の準則とせられた、これが有名な太寶令で我が國法の大成せられたものである。此の内に學令あつて教育の事を審にしてある、これによると學校には大學と國學とあつて、大學は中央にあつて五位以上の子弟を教ふる所、國學は毎國にあつて郡司の子弟を教ふる所で専ら明經、紀傳、明法等の四道を修めしめた。明經道といふは禮記、左傳、毛詩、周禮、儀禮、周易、尙書等の經書を修むることにして、紀傳道といふは支那の歴史並に文章を修め、史記、左傳、漢書、文選等の經書を講究し、明法道は法律を修め、算道は専ら算學を修めしめたのである。其の他醫道ありて専ら醫術を究め陰陽道あつて天文曆數の事を司る等學術に於ては非常の進歩を爲したのである。翻て宗教の方を見ると佛教全盛となりて歴代の皇室之を尊崇し、殊に聖武天皇の如きは諸國に國分寺を建て、奈良に大佛を建つる等の舉あり、名僧碩徳も亦續出して道昭、行

佛教と文

金錢の使

基の如き人々が道を拓き橋を架し井を穿ち池を掘つて文化を助け、國々の交通は頻繁となり、道路も漸く整ひ來り、従つて商業も亦盛んなるに至つた、商業はもとは何れの國も同じく物々の交換で、元明天皇の和銅元年に初めて和銅開珍の錢を鑄て之れを通用せしめたのに、人民は常に多く布及び米を用ひて居つたから、錢を用ふるを便としなかつたから官から之れを獎勵したといふことである。それより後にも、しばしば錢は鑄られたが一般人民尙ほ其の便を思はず、平安朝の末なる花山天皇の時に至つても十個月間世上一般に錢を用ひざるを以て其の流通を神祇に祈りたることありといひ、一條天皇の時には檢非違使を遣はして錢を用ひざるものを詰責せしめたといふことである。これらの事情より察するも、當時、中央政府は盛んに唐制を模倣して居つたが一般人民は尙ほ永く素朴の風を存して居つたのであらう。

されば其の住宅に於ても高貴の住宅並に寺院は壯嚴の美を極むるに至つたであらうが、多くは丸木柱に茅の屋根であつたのであらう。されば聖武天皇の神龜元年、太政官奏して「京師は帝王の居す所、萬國の朝する所、壯麗な

住居の改

らすんば、何を以てか徳を表せん、其の板屋草舎は古の遺制なれど、營み難く、破れ易くして甚しく民財を殫くす請ふらくは五位以上及び庶人の富有にして營むに堪へたるものは瓦舎を構へ、塗るに丹堊を以てせむ」といふて許されたるにても、當時の事情を考へることが出来る。

歌垣

我が國古代には面白い風習があつた。それは東國語にてか、い、ひといひ男女外に出で、山上又は市場に互に歌よみ交して入り交り遊ぶ歌垣の風で、之れによりて情を通じ婚約を結ぶことが多かつた、殊に男體女體の二つの峰より落ちて流るるみな、川の川に其名高き常陸の筑波の歌垣は有名なもので、其の他各地に此俗あつて津の國には歌垣山といふのがあつたといふことである。奈良朝の時代には朝廷にも其の状を模して一つの遊戯となつたといふことで、恐らく後世の盆踊の淵源となつたものであらう、朝廷にても歌垣を模するやうになつたのは、如何に我が國が文弱に流れつゝあるかを見る事が出来る。されば萬葉集に現はれたる古代の歌には豪健の氣風の見るべきもの少からざるものであるが、平安朝に入つては歌の調も纖弱となりて勇武の氣象は漸次

に都人士の中に消磨して來たやうである。

神佛融合

桓武天皇の都を京都に遷されたのは、大化革新後、一百餘年、大寶令後六十年に近く、已に唐制模倣の時代を経て、之を我が國に融和せざるべからざるの時代となつた。之を宗教の上に見るも、聖武天皇の頃より僧行基によつて企畫せられたる神佛融合のとは、本地垂迹の説を経て弘法大師の兩部神道と云つて一切の神祇は其の本地は佛の顯現に外ならず、佛意は之れ神意、神意はこれ佛意なりとして神佛を融合して日本的の宗教となり、其佛敎も亦た支那傳來のまゝにあらずして日本人の創意を加へたる傳敎大師の日本天台弘法大師の眞言となり、之れを文字に見るも從來は支那文字を其儘にて使用して我が國語を寫したる萬葉假名は一轉して吉備眞備等によつて其一片一畫を取りて音を示す片假名となり、弘法大師の力によつて草書より更に脱化したる平假名生じて、僅に五十字内外を知ることによつて文字の利益を享受し得ることとなり、此に全く日本文字なるものを生じた。かく一面に日本化の行はるゝと共に他面には支那文明の模倣に努めて漢詩漢文隆盛に赴き、文明

假名文字

の花に酔ふて其の實を忘れ、中央政府の膨大は地方の疲弊となりしも顧みず、大宮人は櫻かざして今日も暮しつゝ文弱の弊に陥つたので、此の時代の末期に於ける世態人情は紫式部の筆になる源氏物語や赤染衛門の榮華物語によつて尤も巧みに描寫せられて居る、宮中男女の風俗は淫靡に流れ、月卿雲客は奢侈に耽り、其の好むで讀むものは淫靡の書、其の咏する和歌は男女情交の媒となるといふ風にて、閨閣の亂れ此の時より甚しきはなく、男女の關係の倫條を蔑如したるも亦此の時の如きはない。女は男の懸想文を受けては之れに酬ひ、和歌文章共に戀を主題として其他を顧みず、咒咀嫉妬も亦従つて行はれて一般に婦人的となりて迷信惑信は頗る盛んにして、古くよりありし卜占は陰陽道と融合して諸種の迷信を生じ、佛教は祈禱を事として、祈禱によつては何事も意の如くなると思はれ、甚しきは藤原純友、伊豫に叛き、平將門、下總に反して京都の朝廷の危からんとする時にも、第一に朝敵降伏の祈禱によつて太平を貪らんとした程で、石占、錢占、辻占はいふまでもなく方位方角を忌むことも此時代より起つたのが多い。荻生徂徠の著「南留別志」に

平安朝の
世態人情

源氏物語を見れば、病に藥用することは少くして、おほかたは祈禱をのみしたるやうなり、今も田舎のものはかくの如し、鬼を尙べる風俗の弊なるべし。

と此の時代は實に此の如きものであつたのである。此の如きを以て佛會祭祀は年中行事として、しばし行はれ其他雜遊、端午、重陽等の節會禁中にはれて平安朝に於ける中央政府の官人生活は遊ぶにこれ日も足らざる有様である、此の如く文弱は迷信を伴ひ、迷信は文弱を長じたる時代の驕奢に陥るべきは勢ひの自然なれば、衣服も漸次に華美となりて十二一重の衣を重ねし上臈の風俗、浮文固文の章ある直衣着たる月卿雲客、繪の如く、食物は佛教の流行につれて獸肉を食ふことを忌みたれど魚鳥の肉は用ゐられ調理の法も進み、菓子も初めは其の名の如く木に生りたるまゝの果實なりしが此頃より米麥の粉を固め、又は餅などに甘味を加へて種々の形としたるものを造るに至り、其の住宅も亦壯麗に赴き、庭園の裝飾も出來、出にるは金具もて飾られし牛馬ありて、九條の大路を都人の牛車に乗りて行くさま實に悠々たるも

のであつた。

かゝる次第であつたから文藝の隆盛になつたのは云ふまでもないが、殊に和歌は巧を極め、女子も亦文學に堪能なるもの少らずして、先きに擧げた紫式部の外、清少納言、赤染衛門等の女流作家彩華灼爛の筆を以て世態人情を描き、繪畫は孝謙天皇の世に唐僧鑒眞が支那より畫師を從へて歸化せしより初めは専ら佛畫なりしが後には山水花鳥とも行はれ、文徳天皇の頃には百濟河成ありて其寫す所眞に逼れりといひ、次で宇多天皇の頃に巨勢金岡あり、其技亦非凡と稱せられ、後世日本畫の祖と云はるゝに至つた。

之れを要するに文藝の上からいへば、平安朝は實に全盛であつたが、先きにいふとごとく文弱の弊のこれに伴ひ、淫靡やうやく俗を成して、遊女、傀儡師、白拍子の如き風俗上喜ばしからざるものも此の時代から生じた、住吉物語に

あそびものども、あまた舟につきて
心からうきたる舟にのりそめて

同時代の
文藝

闇黒面の
女性

旅行

ひと日も波にくれぬ日はなき

とあり、源氏物語、榮華物語にも、江口の遊女のことあり、傀儡師といふは木偶を遣ひて旅情を慰めつゝ終に枕席に侍するものなり。
藤原定家の

一夜かす野上の里の草枕

むすひすてける人の契りを

といへるは、これを咏んだのであるといふ。これらの遊女は、舟行の人々の休泊する多少般賑の地にあつたので、一般は交通頗る不便で、且つ旅舎ともあらねば、路傍の家に入りて一夜の宿りを請ふか、それも適はずば艸枕折り敷きて眠りたるほどにて道路も亦多くは苔の細道辿り行くの外なく、却て舟行を便としたるも、其の舟も不完全なれば、少しの風波にも止り勝ちにて彼の紀貫之の土佐より都に歸るには三月ばかりを費し、菅原道實の筑紫に流された時にも家を離れて三四月を経たやうである。かゝりければ京師と地方との交通は勢ひ頻繁なる能はず、國司も任官せられても赴くを好まず、中央

の政令は地方に達せず、地方の豪族は擅に權を振ふて終に王朝覆滅の因を爲したのである。

初め大化の革新に功あつた中臣鎌足の子孫は奈良朝時代に漸次頭を擡げ來り平安朝となつては次第に權を得て終に大權を掌握して外戚の威によつて政を擅にし藤原道長をして、「此の世をば我が世とぞ思ふ望月のかけたることもなしと思へば」といはしめ、三條天皇は却て「心にもあらで浮世にながらへば戀しかるべき夜半の月かな」とのたまふに至るの專横を來せしかば、其の榮華の夢は、地方に根據を有したる武門武士の爲めに打ち破られ、保元の亂となり平治の亂となつて、世は武士たる源平二氏の争ひとなりて、政權は終に平氏に歸するに至つたが、平氏亦藤原氏の轍に倣ふて驕奢に耽り、專横を事とせしが故に、源氏の爲めに亡ぼされて政權は武門に歸するに至つた。此の源平の頃より世態人情も亦漸く文弱の弊に飽きて武勇を喜ぶの風と推移し來つた、これを側面の社會状態に見るも、遊女等と相似てしかも其の品等を異にする白拍子なるもの出で、白き水干に立烏帽子を着し、白鞘卷の腰刀を佩び

社會の變遷

て舞ふ男舞の姿流行し、平清盛尤も此の伎を好み、妓王、妓女、佛等を寵愛したといひ、源義經の妾靜は此の白拍子であつたことは何人も知悉する所である。一面繪畫の方を見ても濃厚なる彩色を施したものは、漸く世に飽かれて鳥羽僧正覺猷の形似を求めずして筆力を示し、減筆を以て輕妙に寫し去る鳥羽繪の如きもの、出たのも亦此の氣運の產出したものと見ることが出來、教義は高遠なれども、實際の安心に困難なる天台眞言の二宗の外に、直に往生淨土の眞因を示すといふ簡單直截なる念佛の宗門の萌芽を出し來れるも亦此の氣運と離るべからざる關係があるのである。兎に角、九、十の春光已に、謝して、新緑の候となり來つたのである。

第三節 鎌倉室町時代の世態人情

奈良平安朝は徒らに支那文明を模倣して、中央政府の月卿雲客は華美を競ひ、榮耀に耽りて終に文弱の弊を馴致し、武強なる地方人士の爲めに其の實權を奪はるゝの止むなきに至りて、統治の權勢は公家の手を去つて、武家の

手に歸し、初めは桓武天皇の後胤たる平氏權を得、平氏亡びて清和天皇の末裔たる源賴朝が覇府を鎌倉に開き、六十餘州の總追捕使となり征夷大將軍となつて兵馬の權を掌るに至り、日本の中心は天皇の在ます京都にあらすして幕府の所在地たる鎌倉となり世態人情は一變し、統治機能に於て天皇は唯だ虚器を擁したまふこととなり、幕府獨り權を擅にせしが、其幕府は又藤原氏并に平氏が驕奢に亡びたる轍に顧みて質素儉約を旨とし、賴朝先づ之れを誠め、次で北條氏の世となるや、北條泰時は寡欲を以て子孫の守るべき第一義と教へ、北條時頼は質素を以て範を後世に貽すといふ状態で、天下の執權職の母が障子の切り張をしたといふなどであるから、之れを平安朝の榮華に比ぶれば眞に霄壤の差である。其の一例として見るべきは執權北條泰時の家活武家の生の齋板壞れて見苦しかりけるを、幕府の將士何かな追従せんとて今沙汰あれ、各々申し計らひて築地つきて參らせんと勸むるを、泰時答へて「各々の御志の程は悦ばしく候へども、是を築かんに、人夫多く集まりて世の煩ひ多かるべし、家に築地つき廻すとても、運拙くば泰時助かること候ふまじ、さなく

とも運ありて召し使はれなば、何の恐れか候べき」といふて固く辭したといふとであり、源賴朝が質素を勧誘した時に、筑後權守俊兼が華美を好み、小袖十餘領を重ねて參勤したるを見て、賴朝は直に刀を以て其の小袖づまを切りて誠め、北條時頼の夜更けて大佛宣時と酒を飲むに、臺所の棚の小土器に残りたる少しの味噌を以てしたりといふにても推さるゝのである。かく衣食住ともに質素を旨とし、武を練ることを以て主としたので、殊に弓馬の術は武士の本領として之れを奨んだので、彼の源義家が堅甲三領を重ねて樹枝に懸け一矢を以て之れを洞貫したといふ話や、源爲朝が伊豆の大島にありて三百餘兵を載せたる船を射て覆没せしめたといふ話、さては源賴朝が紫宸殿に怪鳥を射、那須與一が扇の的を射たる如き、或は源義經が三千の兵を従へ、馬に乗りて鵜越の嶮を下り、佐々木盛綱が馬に跨りて藤戸の海上を渡つた如き武勇談は、彼等が理想として語つた所で、平常の心掛は武の一點にあり、幼時には鎧の着始あり、歳始には乗馬始あり、弓馬始あつて一切の事、唯だ武を之れ事としたるを以て、宗教も亦此の武士的精神に適合する禪宗、不立

文字、教外別傳直指人心見性成佛を旨として専ら膽力の養成を示し、日蓮宗は立正安國を標榜して活氣縱横。前代より發達し來れる念佛の法門も亦決死の精神を與へた。此の時に當りて歐亞の大陸を蹂躪したる蒙古の大軍が來り寇したのであるから、さしもの大軍も我が民族の武勇に拒まれて、終に此の叢爾たる日本を如何ともすることが出來なかつたのである。

蒙古即ち元の大軍を卻けて幕府の勢威は益々盛んに、天下は皆な鎌倉を宗とし、商業の中心も鎌倉となり、京師と鎌倉との交通は利便になつた。かく世の治るに従ひ、曾ては質素を以て起りたる鎌倉も漸次驕奢に流れて、勵精治を圖りたる北條氏も稍々人心を失ふに至つた。此の時に當り後醍醐天皇の北條氏討伐の舉は企てられ、終に其の目的は達せられて、天皇親しく萬機を綜攬したまふこととなつたが公卿百官、久しく政務に參せなかつたから皆な其の職に熟達せず、内情錯雜し、嬖臣の内奏しばしば行はれて、綸言變り易く、賞罰濫りにして當を失ひ、天下却て武家の世を思ふに至つて、足利尊氏源氏の正統を以て能く此の間に立ちて人心を收攬し、恩威を武人の間に布き

北條より
足利

應仁の亂

て、世は南北朝の分立となり、これより諸國干戈を用ひざるの日なく紛亂を極めたが五十餘年にして兩朝合一し終に足利氏は幕府を京師の室町に置きて實權を掌握して天下は再び武家の時代となつた。尊氏の孫義滿、權を握るや驕奢度なく、專横極りなく、室町に花の御所を建て、北山に鹿苑院を營みて三層の金閣を造れるなど盛んに土木を興し、苛税を施し遊樂に耽りしより、實權は漸次に下移して、將軍より管領に移り、管領より管領家の家宰に移りて終に應仁の亂となり、諸國の大名各々黨する所あつて東西兩軍三十七萬の兵京師に入り亂れて前後十一年、平安朝以來の帝都を灰燼とし、羈旅の客をして「汝も知るや都は野邊の夕雲雀、上るを見ても落る涙を」と嘆せしむるに至つた。爾來天下麻の如く亂れて、人は門閥よりも實力を尙び、英雄各々其の地に據りて強は弱を併せ、優は劣を敗り、日本國內は全く擾亂の巷となつた。諸國の英雄、自ら守り他を侵すに急にして朝廷を顧みず、足利氏中央にあれど、これ亦奢侈を事として皇室を護り奉ることを忘れ、朝廷の儀式は行はれず、大内は微々として、ありし昔の影をも止めず、築地もなくて

皇室の式

竹垣に茨など結びつけたるさまにて、三條の大橋より内侍所の燈を拜し奉ることが出来、御所の掖にて兒童は戯れ遊び、萬乗の天子も些少の錢貨に替へて宸筆を賣らせたまひ、後土御門天皇崩御したまひし時には、大葬の用途納まらざれば、靈柩を黒戸御所に置き奉りて、近臣宮女、涙と共に宿直するこゝと四十日なりしといひ、後柏原天皇、踐祚したまひし時には、即位の大禮を行はせたまふの資なく、僅に本願寺の獻金によつて之れを行ひたまひしといふ如き悲惨の極に達し、月卿雲客は諸國に流浪して大名に寄食し、諸國の大名はおのがじ、自國の富強を計りて、京都の衰へしに引き代へ、北條氏の居城たる相模の小田原、大内氏の居城たる周防の山口の如きは殷賑を極め、其他、九州には島津、大友、龍造寺の諸豪あり、四國には長曾我部あり、各々城を堅くし、堀を深くし、干戈止む時なく、豪族は驕奢に耽り、細民は塗炭に苦み、上下の生活状態は非常に懸隔を生じたのである。下、細民は年々災厄打ち續き、加ふるに戦亂の爲めに田畠も蹂み闢られて、五穀實らず、物價は騰貴して生業は安きを得難く、京中には老幼相枕して倒れ、日々、車に遺

京師と地

上下の懸隔

骸を載せて棄つるもの山を爲し、満目の悽愴言語に絶したれど、上は田樂、猿樂等の遊宴を事とし、禪風と共に盛んになりし若輩に耽りて、其の邸宅を華美にし、其の飲食も奢侈に赴き、花園天皇をして、

殘民爭採首陽薇、處々鎖爐閉竹扉、

詩與吟酸春二月、滿城紅綠爲誰肥、

といふ御製を下して將軍足利義政を諷諭したまふに至らしめたほどである。かゝる亂離の世の常として、人は各々己れの慾を逞ふせんとして他を排し、他を苦めて顧みざる世に、萬民を憐ませたまふ、天皇の御仁慈は吾等日本國民の永久に忘る能はざる所で、上に此の御仁慈あり、下はたゞ天皇を頼み奉るのみ、實に此の亂離の世は天皇の御名によるにあらざれば到底統一するこゝとは出来ないのである。されば諸國の英雄は皇室に近づき奉らんことを思ひ眼は皆な京都を指したれど、互に牽制せられて進むことを得ず、今川義元先づ東海道に雄視し勢ひに乗じて京都に入らんとして、織田信長の爲めに桶狭間に倒され、織田氏終に勅命を拜して禁裏守護の任を受けて、信長の事業漸

亂世の人情

く成らんとせしが、未だ其の目的を達する能はずして明智光秀の爲めに倒され、其の光秀は秀吉の爲めに亡ぼされて世は豊臣の天下となり、禁裏を修繕し、天皇を尊崇し以て統一の大業を立てた、南北合一より此に至る二百餘年これを我が日本の暗黒時代といふ。

此時代は足利氏驕奢に耽つたが、故に家屋は宏壯となり、鎌倉時代の質素なりし武家の邸宅と、華美なりし平安朝時代の公卿の邸宅と混淆せられて宏壯の造營となり殊に禪風の隆盛に伴ふて寺院の建築法も亦武家の家屋に應用せられ、玄關、書院等益々立派となり、座敷には床の間を置き、初めは佛菩薩の畫像を懸け後には花鳥山水の畫幅をも懸け花瓶に花を挿し、香爐に香を薫じ、其他種々の置物を据えて裝飾とし、園藝も亦禪味の加はりて作庭法に相阿彌なぞの名家出で、山水の風致を一庭の中に集め、其他盛山盛水の法も行はれて座敷の裝飾となり、茶の湯は同じく禪と密接の關係を有し、禪家食事並に調理の方式たる典坐てんざの清規せいぎは茶の湯の作法の源となり、南都の珠光より紹鷗を経て千の利休に至りて、趣味は益々發達し、殺伐なる武士の間にも

室町時代の
禪の生活と武家の作
法の

此の風流ありて、其の氣を軟らげたのである。殊に此の禪と關係を有して我が武士道に少なからぬ影響を與へたのは武家の作法である。これは清拙大鑑和尚が禪家の作法たる百丈清規によりて武家の禮式を定め之れを小笠原貞宗に傳へ、貞宗更に工夫を凝らして小笠原流の禮式となつたものである。これらのことがあつたから攻伐こうはくこれ事とする武士も、禮儀作法といふことに氣を付けて、暴虐に陥らなかつたのであらう。此の時代は文化として見るべきものは凡て禪の感化を受けて居るので、武士は殺伐を事として文學の素養なく、學問は全く僧徒の手に委せられたこと、恰も中世歐洲の暗黒時代の如くで、五山の禪僧は全く文學の權を握つて詩文も亦唯だ此徒の間のみ行はる、狀態で、織田信長の天下を一統せんとした時、文教の頹廢を悲み「夫れ、學問は釋門のみ勤むることと心得來ると是非なき次第に候」と云ふたといふ一事に於ても知ることが出来るのである。其他繪畫も亦雪舟の如き禪僧によつて此の時代を代表せられ、又此室町時代娛樂として用ひられたる能樂の如きも亦僧徒の手に成つたもので、鎌倉時代より田樂といふもの起り、足利の代とな

文學の權

りて田樂衰へて猿樂起り、足利義滿の時、猿樂に堪能なりし觀阿彌、世阿彌の父子、田樂其他の舞曲を折衷して謠曲を興し、これを能樂といひ、五山の僧徒も亦此の謠曲を作つたので其の云ふ所の多く佛教に關係して居るのは此の爲めである。

さて又武術の方を見ると、これとても禪と關係のないものはない、此の時代の末に下總の飯篠山城守家直は擊劍を善くし、其の流を天真正傳神道流といひ、其の奥旨は鹿島、香取の兩神宮より受くる所といふ、此の人の門に塚原土佐守あり、其の子をト傳といひ、劍の極意に達し、更に、上野の人、上泉伊勢守信綱に従ひて新影流を得別に一流を開いた。此の上泉は、これより先き日向の鵜戸權現より奥義を得たりといふ愛州誰孝より傳へられたもので、塚原ト傳は劍法を以て諸國を遊歷したので、此頃から武者修行なるもの起り、禪僧の身を雲水に托して諸國を修行するが如く、四方に遊歷して武を練ることが流行し、其の奥旨は又禪の印可を與ふるが如く教外別傳の致があつたのである。槍は劍法と共に發達したのであるが、殊に南都寶藏院の僧胤壁は之

武術の發達

れを善くして、之れを寶藏院流といふ。其他弓術馬術各々其の法を傳へ、武を練ることは、おさく／＼怠らなかつたのである。

後妻打

一般の風習、此の如きを以て、婦人までも亦此の氣風を受けて、平安の昔よりありし後妻打うはなうちは此の時代に於て盛んにして、妻を離別して後妻を娶りたる時は、先妻は其の親戚より脅力ある女を借り、其の身分に應じて二十人なり五十人なりを集め、手に手に棒、木刀の類を持ちて豫めこれを新妻に通知し、其の日に押し寄せて器具を破り、障壁を傷け、亂暴狼籍を働くにて、其の頃の女に後妻打に二三度頼まれて出でぬはなかつたといふ、これらも此の時代の人情として見るべきである。

室町時代の貿易

さて何事もかゝる風習であるから、産業は一般に不振であつたが、大名の城下は比較的安全であり、其の大名も亦之れに税を付して其の利便を計つたが爲め商業は各城下城下に行はれしが、それよりも比較的盛んであつたのは、外國貿易で、足利義滿、明より勘合符を得て、之れを周防の大内氏に掌らしめしより、大内氏は盛んに支那朝鮮と貿易し、従つて支那の通貨は我が

國に入り來り。久しく國內鑄造のこと絶えたる我が國にては専ら支那の通貨を用ひたのである。此の外國貿易と共に忘るべからざるは、此の時代にあつて頻りに支那朝鮮の近海を剽掠した倭寇のことである。國內亂れて英雄雲の如く起るの時、志を國內に得ざるもの、又は海上の事に慣れたる有爲の士は船を艤して海外に雄飛し、自由に貿易を營み、時に掠奪をも試みたのである。かく我が國民が眼を海外に注ぐ時に當つて、葡萄牙人の我が國に來るあつて九州の大友宗麟は先づ之れと約して貿易を初め、爾來西洋の文明は我が國に輸入せらるゝに至り、其後、呂宋、阿媽港とも互に往來することゝなりて、海外貿易は大に發達し、肥前平戸、和泉の堺の如きは頗る旺盛を極むることとなつた。此の西洋貿易の隆盛、殊に銃砲の輸入は我國情に一大變化を與ふべき時となつた。火藥の發明が西洋中古の群雄割據を打破する一原因であつたが如く、銃砲の輸入は我が群雄割據を打破する一原因であつた。初め葡萄牙人の九州種ヶ島に來つて鳥銃及び其の法を種子島時堯に傳ふるや、根來寺の僧杉房、紀州の人津田監物、筑前の人泊一火の如き皆な種子島に至りて其

西洋文明
の輸入一統の氣
運

の術を學び、次で大友宗麟、葡萄牙人より大砲を傳へ、此の術諸國に傳播して弓矢を以て唯一の武器としたる從來の戰術に代り、築城の法も亦傳へられて、小を以ては大に敵するを得ず、豊臣秀吉は實に此の機運に乗じて國內統一を計つたのである。

豊臣秀吉、微賤より起りて天下を統一し、萬民漸く其の業に安んずるを得た。秀吉、更に威を朝鮮に振はんとして、事半ばにして止み、秀吉薨じて、其の子秀頼尙ほ幼冲にして、國內再び亂れんとして、終に政權は徳川氏に歸して、こゝに三百年の太平を馴致し、世態人情は又一轉變した。秋は過ぎて冬となれり、徳川三百年は眞に冬籠の時代である。

第四節 江戸時代の世態人情

さしも式微の極に達したる皇室は、織田・豊臣の二氏によつて興復せられ、京都の繁榮も稍々舊態に復し、公卿百僚の諸方に流浪したるものも漸く召還され、豊臣秀吉の略ぼ海内を一統するや五奉行を置きて政務を管理せしめ、

徳川氏の統治

冬籠りの時代

其の上に五大老を置きて大事を議せしめ、諸國には大名を封じて國郡を管理せしめ、檢田使を發して五畿七道を臨檢せしめて其の所領を明にし、且つ大判、小判並に丁錢等を鑄て商業に便せしめて太平の象漸く現れんとす。徳川家康、天下の權を握るや、自ら征夷大將軍を以て幕府を江戸に開き、子孫其の職を世襲し、巧みに配置の法を考へて諸侯を各地に封じ、關東を以て自家の根據地とし、京阪樞要の地は之れを直轄とし、便宜の地には譜代親藩を配し、邊陲の地には外様大名を置き、且つ參勤交替の制を設けて悖逆の憂を少うしたる等其の政策行き届きしを以て、終に三百年太平の基を開き、千代田の御濠、風、枝を鳴らさず、四民をして御家萬歳を謳歌せしめた。これより先き足利氏の末に當りて歐羅巴諸國との交通開け、切支丹即ち基督教も亦從て我が國に入り漸次國內に流布したが、豊臣秀吉其の害を認めて之れを防ぎ、徳川氏に至つて之れを嚴禁し、其極終に外國との交通を絶ち僅に肥前長崎の一港を開きて、和蘭陀のみの入航を許し、國を鎖して事を外國に構ふることを避けた。これ實に、日本文明の冬籠りの時代と目すべきである。此冬籠りの

鎌倉時代武士風俗 (模一暹上人繪詞傳)



(貞享元時代風俗) (模川師宣筆職人繪)

足利時代町人風俗 (模土佐光信筆職人歌合)